

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

①

佐伯裕子

一

明治十六年、カトリックの祈禱と聖歌を邦訳した短歌集『聖詠』が、フランス人神父マレシャルと日本人信徒パウロの手によって刊行された。『聖詠』刊行に至るまでの経緯は、勝本清一郎の「キリシタン短歌の残照」(『文学』昭和三十七年二月号)に詳しいが、その紹介により、『聖詠』の存在を知るに至って、わたしはふいをつかれた。

明治十六年といえば、外山正一が編集した『新体詩抄』出版の翌年にあたる。西欧の詩に倣って「新体国詩」を創ろうとした詩集だった。雪崩のように移入されようとしていた西欧の詩歌文芸に困惑しながら、新しい日本の詩を生み出そうとする気運の中で、カトリックの「聖歌」を翻訳した「短歌」が存在した。そのちょうど同じ頃、明治十七年には、十二歳の樋口一葉夏子が、「旧派」につながる和歌を初めて作っていた。明治五年の太陽暦移入の年に生まれ、二十四年という歳月を駆け抜けて生きた樋口一葉の人生と文学を思いあわせるとき、明治時代という近代日本の土壌がいっそう厚味を増

してくる。与謝野鉄幹と晶子、正岡子規たちが新時代の短歌を用意した、その寸前の時代の深みが照らしだされるような思いに、さらに駆られるのである。

二

明治十六年という年は、わたしにとっても思い入れの深い年である。

数年前、機会を得て群馬県の高崎市を訪れた。長いあいだ心にかかりながら、一度も行ったことのない町だった。高崎市は、父方の祖母、岡田カヨの生まれた町である。さまざまな事情があつて、生家との交流の薄かった祖母は、ほとんど生まれた家の話をしなかった。機嫌のよい日などに、市内で旅館を営んでいた祖母の父が、キリスト教に心酔して教会設立の活動に携わったという記憶の断片を、ぼつりぼつり話してくれる日もあつて、わたしの想像を膨らませた。

その話には、明治期の半ばに生きた地方都市の青年たちの激しい希求心が匂っていた。だが、それを語る祖母の口調は素っ気なく、彼らの生き方に共感を寄せるものではなかった。

けれど、写真さえ見た覚えのない曾祖父の姿は、わたしに深い印象を残した。その後、日蓮宗を信奉していた母の反対を押して、わたし自身がカトリックの洗礼を受ける騒ぎを起こしたとき、キリスト教に心酔した曾祖父が、さらに身近に感じられたのである。

そのような薄い関わりをたよりに、高崎市を訪ねてみたのである。商店街には、曾祖父が営んでいたという旅館を知る人はいなかった。だが、市内にある高崎教会が、かつて曾祖父たちが創立に情熱を燃やした教会であることが分かり、百何十年の歳月が一時に縮まった。

高崎教会はプロテスタントの無教会派で、その前身を西群馬教会といった。群馬県に生まれ、沼田藩士の家塾で学び、日本で初めてのプロテスタント教会、横浜公会で受洗した星野光多が、明治十七年に設立した。わたしの祖母の妹は熱心な信徒となり、九十余歳で亡くなるまで通っていたという。

乞うて、牧師館の奥に蔵われている古い手書きの伝道日誌を見せてもらった。二十二、三歳だった星野光多が、高崎市を再三訪れて伝道し、教会設立の準備をしていたときの日誌であった。墨で書かれた日誌から、新しい時代を真に生きようとする人たちの濃密な息吹きが、つい昨日のもののように立ちのぼってきた。

「上毛高崎教会伝道史」と上書きされ、明治十六年七月からの事柄のみが列記された日誌なのだが、準備活動中の日々

が実に生き活きと伝わってくる。翌十七年に教会が創立し、星野は第一代の牧師となった。その日誌にたびたび登場してくる岡田謹吾という名前にかすかな聞き覚えがあった。星野たち伝道者は、岡田謹吾の営む旅館にしばしば投宿している。祖母が話してくれた曾祖父であらうと思われた。

○明治十六年七月 上毛高崎地方伝道ノ事、実行ガ今日ニ始マルハ、今ヲ去ル數年前、東京横浜ノ信徒中往々ココニ来レル伝道者アリ。而シテ未ダ充分ノ好機會ヲ得ズ。只嘆息シテ中バニシテ廃ム。

茲ニ於テ東京木村純二氏横浜星野光多兩人、明治十六年七月六日、伝道ノ志ヲ果サンガ為此ノ地ニ来リテ新町越後屋ニ投宿ス、是レ岡田謹吾氏宅ナリ。

○即チ七月八日安息日 会堂ニ出席、集會者甚ダ少ナシ。木村起チテ教言勸ム。

午前十一時頃、兩人再ビ高崎ニ至リ越後屋ニ投ズ。游老名氏モマタ後ニ来タル。午後ニ至リ聴衆求道者殆ンド四十名来會。コレハ、松本氏、岡本氏及ビ岡田氏ナドノ周旋ニヨル也。

初めは、小林セキという老婦人ただ一名だった高崎市内の信徒が、五か月後には四十名に増えた喜びを記し、神を讃えて「上毛高崎教会伝道史 巻号」が終わっている。七月二十

四日には、新島襄を迎えて大演説会を開き、聴衆は五、六十名に及んだと記している。新島襄は、神田一橋にあった上州安中藩邸に生まれ、ボストンのアンドーヴァー神学校に学んだ。また、明治二十年に東京の一番町教会を設立した若いキリスト教信者の植村正久との交流もあり、当時、関東周辺の伝道者たちが、縦横に活動をしていた様子が伝わってくる。岡田を初めとする教会草創期の高崎の青年たちとの会合や、旅館越後屋を中心に繰り広げられた伝道の日々が、事実のみの記述ながら、若い時代の嵐のような印象を与えてくる。

だが、このようにして数カ月のうちに急速に信徒が増えたこと自体に、西欧文化を性急に移植しようとした脆さも浮かび上がって見える。地域の青年たちが必死に集めてきた、まだ得心のゆかない聴衆と求道の人々だったにちがいない。

教会史の年譜を見ると、星野牧師が辞任したのは、五年後の明治二十一年で、この年、越後屋からの出火により市内が大火に見舞われた。翌二十二年には、教会から十二名の除名者が出て、会を離れていく人々が増えたとも記されている。

さらに、明治二十年代には三百四十名にまで膨れ上がっていた教会員が、二十七年に至って百名に急減した。この動きは、高崎のみの現象ではなかったにちがいない。

星野牧師が目指したものは、ピューリタニズムと日本の儒教思想を結びつけた新しい倫理思想であった。その禁欲的な倫理観と、唯一の「神」を信ずる教義を、町の人々は真に理

解したのだったろうか。彼らのエネルギーは、もっと別種のものであったように思われてならない。

このようにして、日本が明治五年に太陽暦を移入してから、その翌年のキリシタン禁制の廃止を経た十余年のあいだに、烽火のようにキリスト教の教えは広がっていった。それは、主としてピューリタニズムに根ざしたプロテスタント系の教えであった。

また、安中藩出身の新島襄や、上州高崎藩士の子息だった内村鑑三を初めとして、明治期のキリスト者には士族出身の青年が多かった。西欧を真似て、近代国家へと急ぐ日本にあって、旧藩士という世に入れられない負のエネルギーが、理想の共同体を求める力となって噴出していった。高崎教会という地方の一教会設立の日誌からも伝わってくる、明治の青年たちの理想を求める息吹き、それは、どこか熱病のような脆さを伴っていた。

三

明治十六年、日本が近代化に向け浮足立ち、激しく変動していた日々に、先にあげた「聖歌」の翻訳短歌集『聖詠』は刊行された。十六世紀にスペイン人フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸して以来、カトリックの教えはキリシタン禁制の弾圧を受け、形を変えながらも粘り強く広がっていた。だが、「短歌」という伝統詩の形をとった「聖歌集」が出版されたのは、この本が本邦初めてであった。以来、明治期の

カトリック教会の「聖歌」は、この『聖詠』を踏襲して邦訳されたのである。

同じキリスト教でも、プロテスタント系の「賛美歌」が、当時の新体詩形式を母体にして邦訳されていたのに対し、カトリック教会（旧教）のほうは短歌形式であった。このところに、日本の伝統と西欧文化のせめぎ合いを生きた明治という時代の厚さが窺える。

『聖詠』には、短歌一四六首と三〇句が収められていて、勝本清一郎の考察によると、明治十一年ごろに筆写された「写本聖詠」が基になったものらしい。この一冊はカトリック教会のミサのための歌本であった。

『聖詠』の原本を手にするのは困難なので、勝本の「キリシタン短歌の残照」に、その全短歌が掲載されている「写本聖詠」から何首か引いてみる。礼拝で歌いあげたらしく、全てカタカナ表記で、旧カナ遣いに乱れがある。ためにしに漢字カナ混じり文に直してみると、思わぬ斬新さが味わえた。

聖神に対しての祈願

ひさかたの、天つ空より、輝きて、来たらせ給へ、スピリトサント

キリストに、焦がるる人を、憐れとも、思ひに燃えよ、スピリトサント

聖体

キリストの、一度なしし、死しと血の、教へをバテル、今に継ぎぬる

我がアニマ、悲しみを去り、強くして、導き給へ、パライソの道

御助かりのこと

果てんなや、炎に焦がる、インヘルノ、アニマ体を、焼くぞ恐ろし〇人はみな
楽しさや、楽しみ絶えん、ゴロリヤを、アニマ体に、受くる楽しみ〇人はみな

「聖神」「聖体」という邦訳語を連題にしながら、短歌にうたい込めるときは、元の「スピリトサント」「アニマ」というラテン・ポルトガル語系の外来語を用いている。「パライソ」「バテル」「インヘルノ」「ゴロリア」にしても、「天国」「神父」「地獄」「栄光」という邦訳語を短歌に求めようとはしない。

ことに、「聖体」を「アニマ体^{カラダ}」とうたっているところに、和洋折衷の荒々しい詩魂が漲っている。「アニマ」はキリシタン用語では「靈魂」を指し、その靈魂の体「アニマカラダ」はキリストの体「聖体」を指している。西欧の言葉の神秘的な響きを重視した翻訳短歌集が、明治十六年という激動の年に刊行されていたのである。

この年、樋口一葉夏子は十一歳だった。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

②

佐伯裕子

—

群馬県高崎市新町の旅荘越後屋の息子だったわたしの曾祖父、岡田謹吾が、キリスト教伝道のために訪れてきた星野光多に共鳴して、市内の青年たちと教会設立の運動を進めたのは明治十六年だった。

伝道は越後屋を拠点にして行われ、翌十七年には西群馬教会（高崎教会）が創立された。そのうち、明治二十一年、越後屋からの出火で町内が大火になるまで、曾祖父は、教会に係わる激しい対立と紛争の渦中にいた。わたしの祖母カヨの生まれる前の事件ではあったが、祖母が一度だけ、言い淀みながら不審火のことに触れた日があった。事実は不明だが、当時、不穏な噂が流れていたのであらうか。初代の牧師を勤めた星野が、本郷西片町にいた新島襄に相談して教会を辞め、東京の下谷教会に転属したのも同じ二十一年であった。

長く続いた祖母の実家の旅荘が、キリスト教の布教の渦に巻き込まれ、あつというまに大きな転換を迫られることになった。それは、明治十七年に、上野から高崎まで鉄道が開通

したことが大きな要素となっている。交通の便の発達によって、東京との交易が盛んになり、星野光多たちがもたらした清冽なビューリタニズムと西欧文化が伝播され、市は大きく変貌していった。鉄道は、伝道とともに、そのような新しい空気も運んできたのである。

また、鉄道の普及に伴って、明治十六年には、交通機関としての人力車が激減した。「此家ハ下谷よりよし原がよひの只一筋道にて、夕がたよりとどろく車の音、飛ちがふ燈火の光り、たとへんに詞なし。行く車ハ午前一時までも絶えず、かへる車ハ三時よりひときはじめぬ。（日記『塵の中』）」というふうに、明治二十六年に、吉原遊廓に近い下谷区竜泉寺町の家で樋口一葉が聞いていた人力車の騒音は、遊廓に通う人々のものであり、滅びゆく時代の車輪の軋みだったのである。それは、鉄道という近代の幕開けの轟きとは、まさに対照的な軋みであった。

地方都市の旅荘の主人として静かな生涯を送るはずであった一青年が、キリスト教に心酔し、旅荘を失い、やがて政治

に関心をもつようになる浪漫的な経緯は、親族にとって由々しい事だっただろう。だが、そういう事態も、曾祖父一人の身に降りかかった状況ではなかった。明治十六、十七年という年は、生活意識や思想信教の転換を計らなければならぬ状況が、市井の隅々にまで浸透していった年だった。

二

生活習慣や思想信教の怒濤のような欧化に伴って、詩歌文芸の言葉も「新しい形」を持たなければ、複雑な文化を表し伝えることはできない。「言葉」がなければ完成しない何かを求めて、新しい時代が新しい表現を要求するのである。それが、どこか接ぎ木されたような印象を与えようと、表現の開拓は求められてやまないのである。

プロテスタント系の『讃美歌』は明治六年に刊行された。また勝海舟が、英国の唄「ローフデンヘール」を訳詩したことは、外山正一の紹介によってよく知られている。

思ひやつれし君

勝海舟

なにすとして、やつれし君ぞ、
哀れその、思たわみて、

いたづらに、我が世を経めや、
あまのはら、ふりさけ見つゝ、

あらがねの、土ふみたてゝ、
ますら雄の、心ふりおこし、

清き名を天に響かし、（以下略）

海舟は「試にみくに詞になせしなり」と記している。そういう、明治初年からの「新詩」への涙ぐましい試みの成果として、明治十五年に、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の訳詩集『新体詩抄』は出版された。明治十七年に、詩ではなく短歌に邦訳されたカトリック聖歌集『聖詠』が刊行されたのは前に記したとおりである。

『新体詩抄』は、広い題材を平俗な言葉で表す詩型を創り出し、「新しい国」の「新しい詩」の出現を目的とした。外山正一は序文に、「甚た無礼なる申分かは知らねとも三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り尽すことの出来る思想は線香烟花か流星位の思に過ぎざるべし」と言挙げした。三十一文字に象徴される従来の詩歌では、もはや現在の複雑な文化や思想、感情を表しえないというのである。

「シェークスピア」という表記で紹介されたシェークスピアは、二人によって訳されている。「ながらふべきか但し又ながらふべきに非ざるか 爰が思案のしどころぞ」と訳した尚今居士こと矢田部良吉、「死ぬるが増か生くるが増か 思案をするはこゝぞかし」と訳したのは、山仙士こと外山正一である。いずれも、平俗な謡物の口調が用いられている。

「我は官軍我敵は 天地容れざる朝敵ぞ ……」とうたう山仙士の「抜刀隊」は、テニソンの戦争詩の訳および創作詩で、

やはり講談、俗謡の調子がつきまといっている。フランス人ルーの作曲で、日本最初の軍歌となった一篇である。

初めて、シェークスピア作『ハムレット』の一部が訳詩されたのは画期的だったが、非難は激しかった。確かに「死ぬるが増か生くるが増か」では、まったく喜劇になってしまう。日本の俗謡に流れる艶ばい情感が、西欧的な内容に被さってしまっている。軽薄な「西欧かぶれ」という批判のうえに、そういう、詩の言葉の粗さが非難されたのである。

だが、『新体詩抄』刊行の十五年後、明治三十年に出版された、国木田独歩、柳田国男、田山花袋たちの詩集『抒情詩』の序文として載った独歩の文章は、『新体詩抄』に寄せる熱いメッセージであった。

日本に詩歌の発達せる形式なかりしは新日本の文明を跋足ならしめる大原因の一なりと余は信ず。

斯る時、井上外山両博士の主唱編集にかかはる「新体詩抄」出づ。嘲笑は四方より起りき。而も此覚束なき小冊子は草間をくぐりて流るる水の如く、何時の間にか山村の校舎にまで普及し、「われは官軍わが敵は」てふ没趣味の軍歌すら到る処の小学校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき。又た其のグレイの「チャルチャード」の翻訳の如きは日本に珍らしき清爽高潔なる情操を以てして幾多の少年に吹き込みたり。斯くて文界の長老等が思ひもかけぬ感化を此小

冊子が全国の少年に及ぼしたる事は、当時一少年なりし余の如き者ならでは知り難き現象となりとす。

出版当時は世の嘲笑を受けた『新体詩抄』が、やがて、山村の少年たちにまでに、その詩想が浸透していった事実を、独歩は自分の体験として記した。「日本に詩歌の発達せる形式なかりしは新日本の文明を跋足ならしめる」という危惧は、明治の文人たち共通の危惧であった。その意味で、『新体詩抄』は後統の青年たちに読まれ続けていったのである。

では、国木田独歩が、「山村の校舎にまで普及し」と記した『新体詩』の影響は、樋口一葉なつ子のところにも及んでいたのだろうか。怒濤のように移入されたキリスト教文化や、もろもろの西欧文明とその思潮を、なつ子はどのように感じたのだろうか。

三

一葉の父樋口則義は、文政十三年（一八三〇）に甲斐の国の農家に生まれ、母たきと江戸に駆け落ちしてきた自由人であった。江戸で、ようやく八丁堀同心株を買って幕臣の一人となるが、翌年の明治維新（一八六八）によって武士の身分を失い、東京府の下級官吏職についている。かろうじて敗者として浪人にならずにすんだのだが、幕末は番書調所という西洋の書物を調べる役人であった。さらに、則義が墓を購入した築地本願寺から芝にかけての海辺は、外国人専用居留地がで

きた場所であった。内幸町の官舎に生まれた一葉は、西歐文化を身近に生きていたといっている。

日本が太陽暦を採用した明治五年に生まれた一葉が、初めて歌に触れたのは、世の中が大きく変貌を始めた明治十七年、十三歳の年であった。そうして、国木田独歩が『抒情詩』で新しい日本の詩歌を提唱する前年の明治二十九年（一八九六）にはこの世を去っている。短い生涯だったが、一葉は好奇心をもって、新体詩の詩人たちとは異なる視線で、「西欧」に對峙していたのではなかっただろうか。

明治十七年に、一葉は青海小学高等学校を中途退学して、父の縁故の歌人、和田重雄に歌を習った。和田の前身は静岡県の土族、あるいは幕府の御家人であったといわれる。この三か月の歌が、中島歌子の「萩の舎」に通う前の詠草で、「なつ子」の署名と和田の添削が添えられて残っている。当時は和歌を教養として身につけるために、「題詠」という方法がとられた。例歌の括弧の中は、与えられた題である。

詠草 明治十七年一月—三月

たのしさにさとのわらべはとくおきてわかなつみにとい
づる春日野 （名所若菜）

賤の女がいろ／＼きぬをはせをりてわか菜つみにとい
づるかすかの 同

空高くなくかりがねもとまるらんおぼろ／＼とかすむつ

きかな

（霞中月）

三千年のよはひたもつと聞からに世になつかしきひめも

ゝの花

（桃花）

すみれさく野をなつかしきみうないごけふもそゝろにあそ

びくらしつ

（野遊）

古今集の影響もみられる大人びたうたいぶりで、太田垣蓮月尼などが連想されるが、新鮮な発想も覗いている。ことに三首目はおもしろい。朧ろの月に雁も止（泊）まるだろうと、わたしは読む。無意識に月を球体と見ているところがあるのだ。原作の「空高くなくかりがねもとまるらんおぼろ／＼とかすむつきかな」を、添削は「空高くなくかりがねもまとふらんおぼろ／＼とかすむつきかげ」と、常識的に直してしまっている。月を球体と見る科学性を、常識的に月影にしてしまった。たとえ過去に類想歌があったとしても、題「霞中月」を与えられてこういう歌を作ったところに、独自で新しい感覚の芽生えを感じさせるのである。

群馬県高崎市という地方都市に生きた一青年の身にさえ、激しい西歐の波が覆いかぶさってきた時代であった。ひとり一葉が、自分と和歌を括弧の中に括って、古風なお稽古を良しとしていたとは思えない。「とまるらん」を「まとふらん」と直されたとき、一葉は、新時代を生きる者として、何かざらりとした違和感を覚えたのではなかったらうか。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

③

佐伯裕子

中学生のころ、わたしは学校の図書室で、樋口一葉の『たけくらべ』の対訳本や、易しく書かれた一葉の伝記を読みふけていた。煉瓦作りの陰気で古めかしい図書室は、一葉を読むのにふさわしい空間であった。蒼然とした一葉のポートレートに、いかにも古風な女性の印象を抱かされたが、心惹かれる感じのほうが強かった。

いったい、どこに惹かれたのだったろうか。たびたび思い返して、ひとつ思い当たるのは、伝記の中に「土族の誇り」という言葉が何度か書かれていたことであった。

わたしが、あの暗い図書室に通っていたのは、昭和三十年代の後半である。日本が高度経済成長期に入っているころとする、勢いのある日々だった。すでに「土族」などという言葉は死語になっていて、友人はもとより、誰からもそのような言葉を聞いたことはなかった。だが、わたしの家では、まだその言葉が生きていたのである。軍人だった父方の祖父、土肥原賢二の家は、岡山藩の土族であった。「瘦せても枯れて

も、土族の誇りをもって生きた」などという話が、折にふれ、零落の思いに満ちていた祖母と母の口から発せられた。

群馬県高崎市の旅荘の娘だったわたしの祖母カヨが、高崎歩兵十五連隊附に赴任した祖父賢二と恋に落ちたのは、明治三十七年ごろという。土族出身の青年将校と商家の娘との縁談は難しく、双方の家族にとっては大変な出来事だった。祖母は、いったん他家の軍人の娘として養女となって、やっと結婚が許されたと聞いている。

そういう結婚をした祖母だったが、「土族の誇り」を声高に言う微妙な屈折感に、少女だったわたしは少しも気づかなかった。「土族」という言葉には、どこか敗残の匂いがつきまとい、祖母や母が力を籠めて言うほどに、はじめな気持ちになっていった。ただ、不思議なのは、父の口から一度も「土族」という言葉を聞かなかったことだった。

そのような日々、わたしは樋口一葉に出会った。歌人となり、小説家となった「樋口一葉」を用意したもの、それは何であったのかを思う。

二

一葉は、もっとも早い時期の日記、明治二十年の『身のふる衣 まきのいち』に、中島歌子の歌塾「萩の舎」の発会に
着てゆく晴れ着への思いを記した。門下には令嬢や貴婦人が
多く、一葉のように貧しい家の娘には辛い会だった。その発
会は、明治二十年二月二十一日に催されている。

「廿一日といへる日に身はいさめども、心にはいさまぬ色
をおしつゝみ、とかく引つくるひつゝ、午前十一時といへる
ほどになんあたり近きおきなが車にうちのりて参りぬ。此月
は発会の事にて待れば、九段の坂上なる万亀ろうにて有けり。
……目とよめて見てければ、げにや善尽くし美つくしたるき
ぬのもやうおびの色かどやく計に引きつくるひ給ふ。……い
とどはづかしとおもひ侍れど、此人々のあやにしきき給ひし
よりは、わがふる衣こそ中々にたらちねの親の恵とそごろう
れしかりき。」

歌友たちが錦の晴れ着で集う発会に、一葉は、「母」が仕
立て直してくれた古着を着て出かけた。その時の描写である。
「身はいさめども、心にはいさまぬ色をおしつゝみ」という
ところに、心の揺らぎと気概が感じとれる。少女向きの伝記
では、そのような描写に添えて、「父が武士であった誇りを支
えとした」などと記されていた。後に読んだ和田芳恵の『一
葉の日記』（初版・昭和二十二年刊）でも、一葉の士族意識はし
きりに暗示されるところである。

明治初年の日本の人口は、約三千万人だった。そのうちの
九割が農民で、残りの三百万人のうち半分が武士、他は町人
たち庶民となっていた。（村上兵衛「明治零年」文芸春秋・一九
六八年十一月号による）。三千万人に満たない農民、町人が、百
五十万人の徒食する武士を支えていたことになる。しかも、
江戸・東京の土地の多くは武家屋敷だった。残余の狭い土地
に町民たちが群いていたのである。

本来の仕事である戦さが無用になった時、明治初年の武士
たちは、新政府にとって厄介な存在でしかなかった。新政府
で仕事を得られたのは、主に開国派だった藩の武士たちであ
る。西欧文化による新しい価値観を受け入れるかどうか、そ
こに悲惨な分かれ目が生じた時代だった。

明治新政府と相容れなかった武士の多くは、人力車の車夫
になり、キリスト教の伝道者になり、あるいは新聞記者にな
り、あるいは暴徒になっていった。彼らの妻や子供たちは、
昔日の誇りを支えにして、その誇りゆえに時代のなかで浮い
た存在になろうとしていた。そのような時代の状況にあって、
「士族の誇り」という言葉には、「瘦せても枯れても」とい
う必死の意味合いが付加されていた。だが、果して彼らは、
時代から真に敗れ去っていったのだろうか。

三

明治三十九年に出版された山路愛山著『基督教評論』は、
そういう武士たちの流れを、敗残者の系譜として捉え直す文

化論を展開している。明治という新時代に果たした彼らの役割を、愛山は初めて本格的に炙りだした。

「植村正久は幕人の子に非ずや。彼は幕人の総てが受けたる戦敗者の苦痛を受けたるものなり。本多庸一は津輕人の子に非ずや。維新の時に於ける津輕の位置と其苦心とを知るものは誰れか彼れが得意ならざる境遇の人なるを疑ふものあらんや。井深梶之助は会津人の子なり。彼れは自ら国破山河在の逆境を経験したるものなり。……」と愛山は記した。ここに名前が挙げられているのはみな、明治期にキリスト教を広めようとした代表的な青年たちである。

さらに、愛山は、「総ての精神的革命は多くは時代の陰影より出づ。基督教の日本に植ゑられたる当初の事態も亦此通則に漏れざりしなり。」と記している。

少女のころ、わたしは「士族」という言葉のもつ敗残意識を単純に自分の家に引き寄せて共感していた。だが、「士族意識」とは、一言で括れるものではなかった。一葉の場合は、明治へと転換する時代において、「農家から出奔してきて同心株を買った父」、「上昇志向の強い、新しい考え方をする父」の存在を考えなければならぬのだろう。しかも念願の武士になったその翌年に、武士階級は廃せられてしまった。旧世界の幕府に義理立てし零落するよりは、新政府の末端にでも属したいと願った「生活する父」の気持ちである。

だが、後に一葉が好んで小説に描いたのは、落魄した生粹

の士族の娘という設定が多かった。一葉の母が奉公した稲葉大膳家の養女「鉾」がモデルだった、と言われている。あるいは、師である中島歌子から聞いた水戸藩士たちの悲劇が影響しているとも言われる。いずれにしても、一葉は自分の父が生きた生活者としての「士族意識」よりも、少女らしく潤色した士族意識の蔭に、自らの「誇り」を培っていたのではないかと思えるのである。

四

一葉夏子の歌に大きな影響を与えた師、中島歌子の恋の歌と、一葉の恋の歌を引いてみる。行き違いの多い師弟であったが、二人の歌には、冷静に自己凝視する「恋」の観察者、分析者の眼差しが共通している。

よしされば我もはかりてはかるらむ人の心もこころみて
まし 歌子『萩のしづく』

君にこそ恋しきふしは習ひつれさらば忘るることもをし
へよ 同

今はただ人つらかれといのる哉末とげがたき中とおもへ
ば 夏子 明治二十五年七月―八月

いかにせんおもふもつらしこふもうしきりとて人の忘れ
れなくに 同

つれなさようさよとかつはにくみてもその人やがて恋し
きやなぞ 同

歌子のほうは年齢的にも成熟しているから、恋の駆け引きの鋭さが滲み出ている。貴方が恋を謀るのなら、私も謀りましよう、とうたう。さらに、私に恋を教えたのだから、忘れ方も教え給えよ、と痛烈に皮肉っている。全て題詠であるが、男女の恋そのものを観察し、分析しようとする冷えた視線が窺える。

一葉夏子の歌は、小説の師であつた半井桃水との恋が暗礁に乗り上げてからのものである。やはり題詠だが、二十歳の女性にしては、冷静すぎる自己凝視が覗いていよう。夏子の歌にも、男女そのものを分析しようとする作家姿勢が感じられるのである。

一葉はつねづね、悲劇的な最期を遂げた水戸藩士を夫にもつた歌子の半生を、歌子自身の言葉で聞いていた。そこに語られる「遺された武士の妻の誇り」を、一葉は、自分の身の上に引き寄せて聞いていたにちがいない。

歌子の実家は、ベリ―来襲以来の沿岸警備を受け持たされて窮した川越藩の財源を支えた、豪商「網谷」である。また、のちの「萩の舎」の在所となる江戸小石川に「池田屋」という郷宿を持っており、そこに水戸藩士が入りしていた。そこで、夫、林忠左衛門と恋仲になったが、武士と商人の娘との縁組は成り立たず、正式な夫婦にはなれなかった。だが、歌子は気にせず、出入りの水戸藩士を支援しつづけた。水戸藩は、過激な攘夷派と穏健派に分かれて内紛の絶えない時

期であつた。井伊直弼が桜田門で水戸藩士に暗殺された事件には、忠左衛門は参加していなかったが、その残党として、歌子まで二か月間、牢に入れられたのである。

やがて忠左衛門は、藤田東湖の遺児、小四郎の起こした水戸藩の内紛に巻き込まれて命を落とす。忠左衛門が二十五歳、歌子は二十一歳だった。その別れに際しての歌子の歌は、「国のため君のためとぞおもはずばいかにしのばむ今日のわかれ路」など、型を踏んだ純真なものであつた。先に引いた歌は、それから多くの恋を重ね、歳月を経て作られたものである。別人のような作風の違いが認められるだろう。

五

林忠左衛門の最期については諸説がある。藤井公明著『樋口一葉研究 中島歌子のこと』（桜楓社・昭和五十九年刊）という研究書には、真実は、内紛で負傷したために切腹したと記されている。

だが、中島家の記録では、戦死したことになっているらしい。歌子は、夫の死を潤色したかったのではないか、とも記されている。歌子は、「反乱藩士を鎮圧する戦いで戦死した武士」という自負を、生涯の支えに生きたかったのである。樋口一葉が、その父の「士族」を少し潤色して生きたかったように、残されたものの「誇り」は、ひそかに姿を変えてゆく。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

④

佐伯裕子

の結論のようなものであった。

明治二十八年に記された一葉の日記「しのぶぐさ」を、和田芳恵は「長い詞書をつけた歌集」と評した。「廿八年一月／しのぶぐさ／なつ子」と表書きされた二十三歳の日記である。

「浪六（軍記物作家、村上浪六・筆者注）のもとより今日や文の来るとまちはかなくとしも暮れぬ」と、頼んでいた借金返事待つ閑達で平明な書き出しに始まり、歳晩の下町に住む人々を描く歌物語ふうの日記になっている。「たけくらべ」など、一葉の創作活動が頂点になる年を象徴するような文体で書かれた日記である。

その「しのぶぐさ」の中には、文芸の「表現方法」に寄せる一葉の考えを、はっきりと記した箇所が出てくる。それは、十二歳で父の友人である和田重雄に歌の手ほどきを受け、十四歳の時に中島歌子の「萩の舎」に入門し、二十歳で半井桃水に小説の指導を受けてから、日記「しのぶぐさ」に至るまで、ほぼ十年の歳月にわたって、一葉が育んできた方法意識

ひかる源氏の物がたりはいみじき物なれどおなじき女子の筆すさび也 よしや仏の化身といふとも人のミをうくれば何かはことならん それよりのちに又さる物の出こぬハかゝんとおもふ人の出こねばぞかし かの御時にハかの人ありてかの書をや書きとよめし 此世にハ此世をうつす筆を持て長きよにも伝へつべきを更にそのこゝろもたるもあらず はかなき花紅葉につけても今のよのさまなどうたへるをばいみじういやしき物にいひくたすこゝろしりがたし 今千歳ののちに今のよの詞をもて今の世のさまをうつし置たるをあなあやし かゝるいやしき物更にみるべからずなどいはむものか 明治の世の衣類調度家居のさまなどかゝんに天曆の御代のことばにていかでうつし得らるべき

柴式部の書いた『源氏物語』は、素晴らしい物語であるけれど、それでも、同じ女性の手に成された「筆すさび」なの

である。紫式部以降、彼女に匹敵するほどの才能が現れてこないのは、書こうと思う者が出来なかったからにすぎない。そう、一葉は自負する。書こうとするところを自ら励ますように響く、つよい調子の文章である。

紫式部の時代には、式部がいて、ああいう物語を書きとどめた。いま現在にあっては、いま現在を写す文体をもって、式部のように、長く後世に伝える気概を持ちたいものである。明治の衣類調度家居のことを描くのに、どうして古い時代の言葉で写し取ることができようか。古典を仏と崇めるばかりで、進取の志を持たない多くの書き手たちを嘆きつつ、一葉は自分の方法意識を高らかに表明した。

「此世にハ此世をうつす筆を持て長きよにも伝へつべき」……。だが、一葉の高らかな言挙げは、ひとえに「小説文」についてであった。生涯にわたって作りつづけた「歌」に関しては、気概に満ちたその方法意識を表立てることをしていない。例えば、同じ「しのぶぐさ」に挟まれた歌を見ると、次のような作風のものが並べられている。

まちわたる人のたよりハ聞かぬまにまたぬとしこそまづ
来たりけれ

わすれぬもさすがにうれしからごろもつまにといひしな
ごりとおもへば

中垣の隣の花のちる見てもつらきハはるのあらし成けり

掛け詞や縁語、枕詞などの古い約束ごとを用いた一連である。三首目は、一葉には珍しい日清戦争に寄せて作られた歌である。日本艦隊に封鎖された「丁汝昌」という清艦隊の提督が、部下の助命のために降伏自害した時事について、「かたきなれどもいとあはれなり」と感想を記している。そのあとに付けてある一首が、「戦争」を「はるのあらし」に喩えた「中垣の」の歌である。「此世をうつす筆を持て」書くのは小説文であり、「歌」というものでは、日本古来の抒情を踏襲するものという意識が、日記にはの見えてくる。

二

一葉が、時代に即した新しい文体を希求するおよそ十年前、『新体詩抄』（明治十五年）の序文に外山正一が記していた一文を、もう一度思い出してみたい。

「甚た無礼なる申分かは知らねとも三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り尽くすことの出来る思想は線香花火か流星位の思に過ぎざるべし」。

そうして外山は、明治期の「新しい国」にふさわしい「新しい詩」を求めて、散文調の翻訳詩を『新体詩抄』としてまとめた。やがて国木田独歩が、明治三十年に出版した共著『抒情詩』の序文に、刊行当時は嘲笑された外山たちの仕事は、独歩を初め多くの少年たちを感化した経緯を記したのである。独歩の危惧は、「日本に詩歌の発達せる形式なかりしは新日本文明を跛足ならしめる」という事態にあった。

明治維新を押し進めた武家階級は、何よりも政治経済を優先させ、詩歌文芸を用なきものとして、新国家の方策を実施していった。背後には儒学の思想が残っていたと見ていい。

そういう国家の動きに対して、敗れた旧幕臣たちが、キリスト教および詩歌文芸、新聞などのほうに力を注いだことは前回に記した。明治の近代文芸の成立のところに、ある種の偏りが窺われるのは、そういう事情があつてのことである。

それ故に、新しい詩を起こす動きは、日本古来の和歌を抱擁しながらの革新ではなく、まず三十一文字の形式を離れて、西洋の散文詩のような詩型を創出することに急いだ。一葉が、「歌」のことは差し置いて文芸革新の方法意識を記しているのも、そういう流れがあつてのことといつていい。

一葉が小説家を志すようになったのは、「萩の舎」同門の先輩歌人、三宅花圃が、明治二十一年に出版した小説『蔽の鶯』に心動かされたからだ。当時一葉は、樋口家の家計を一身に背負わなければならない身となつていた。『蔽の鶯』で得た原稿料が、家運の傾いていた三宅家の法事を盛大に実現させたという話に動かされたのも事実であつた。だが、一葉は何よりも、『蔽の鶯』の、新しい、西欧的な風俗を取り入れた言文一致体に驚かされたのではなかつたらうか。

明治十九年に、『新体詩抄』に倣つた『新体詞選』を編集刊行し、小説『武蔵野』（明治二十年）を書いた山田美妙は、最初の言文一致の新聞小説家であつた。ほかに、自由民権運

動で女権拡張を唱えた女性学者の一人で、夭折した木村曙が書いた『婦女の鑑』（明治二十二年）などの小説が出版されている。明治二十年代初期の文体革新の機運は大きな動きを示していた。

そういう機運のなかで、爛熟した文明開化を満載したような歌友の小説、言文一致体の『蔽の鶯』を読んで、一葉のころがどのように騒いだか、わたしはしばしば想像する。

三

三宅花圃は、幕末の外国奉行組頭として、何回か欧米に派遣された蓮舟田辺太一の娘である。長じて、加賀藩の侍医の息子で、西洋文化を深く洞察した国粹主義の思想家、三宅雪嶺と結婚した。花圃は、ごく自然に鹿鳴館の男女の会話や、西欧化された風俗を小説のなかに取り込むことができたのである。『蔽の鶯』には、冒頭から、鹿鳴館の男女の会話が描かれている。

男「アハハハハ。このツー、レデースは。パアトナアばかりお好きで僕なんぞとをどつては。夜会に来たやうなお心持ちが遊ばさぬといふのだから。

甲女「うそ。うそばかり。さうぢやござりませんけれども。あなたとをどるとやたらにお引つ張り回し遊ばすものですから……あの目がまはるやうでござりますんで。そのおことはりを申し上げたのですワ。」

男「まだワルツがきまりませんなら願ひませうか。
ときれいにかざりたるプログラムを出して名を書きつけ
る。

あるいは、九段坂での学校帰りの少年たちの会話、「君け
ふのレッスンはディフィカルトだったねえ。」「アーだけれど
僕は昨日ブラザアに下読みをしたらつたからすこぶるイー
ジーだったぜ。」「グッドバイ。」「などが活写されている。カ
タカナ語を散りばめ、いかにも背伸びした当時の日本人が想
像される言文一致体である。

だが、この小説は、文章では西欧風俗をふんだんに取り込
んでいるのだが、内容は、むしろ西洋風の男女の風俗を戒め、
従順の美德を女性の理想としたものとなっている。明治十年
代までの西欧文化への日本人の傾倒混乱ぶりが、一つの収束
を迎えている時期でもあった。日本文化を見直そうとする機
運が反動的に起こってきたのである。『蔽の鶯』で、西洋か
ぶれの女性を女生徒が批判した箇所がある。

「明治五六年ごろには。女の風俗が大そうわるくなつて。
肩をいからしてあるいたり。まち高袴をはいたり。何か口で
生いきな慷慨なことをいつて。誠にわるい風ださうでした。が。
この頃大分直つてきたと思ふと。また西洋では女をたつとぶ
とか何とかいふことをきいて。少し跡もどりになりさうだと
いふことですから。」

明治五年、一葉が生まれた頃から「女の風俗」が悪くなり、
大分良くなったと思つたら、また女性尊重という西洋の悪習
がはびこつてきた、と花圃は女生徒に語らせたのである。

『蔽の鶯』を読んで、わたしは、昭和二十年に太平洋戦争
が終結した日々のことが思われた。悲惨な日々であったと想
像するが、一方では、アメリカの進駐軍によって解放ももた
らされた時期だった。その是非はおいて、ことに女性に関し
ては、参政権などの表立った動きとも違う、女性としての「自
信」を持たされていく過程があったのではないだろうか。

鹿鳴館の時代に、三宅花圃たち女性が知った、西欧の男女
の風俗。その是非は別にして、根底のところ、新しい風習
が、幕末以来の女性の忍従の姿勢を解放した面があったので
はないだろうか。思い切り気障なカタカナ語をちりばめた『蔽
の鶯』は、そのような自信の上に成立した。その上で、日本
女性の従順さを再び見直そうとしたのである。そのことは、
「紫式部も同じ女性である」と声高に言挙げした一葉の自負
にも、根底で繋がっていたにちがいない。

一葉は、上層階級を生きる五歳年上の花圃の、「西洋かぶ
れ」の文章と保守的な内容とのアンバランスさについて、本
当はどう思つたのであろうか。冒頭に挙げた、文芸への声高
な革新意識は、一葉の場合は「西欧」に向けられていかなか
った。一つの激しい選択が成されていった。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

⑤

佐伯裕子

明治二十六年三月二十九日、本郷菊坂町の二十一歳の樋口一葉のもとに、歌友の伊東夏子が、ピアノに合わせて歌う英語の讃美歌をもってきた。そのとき一葉は、翻訳の真似事を試みている。一葉の「よもぎふにつ記」の中の一節である。

此日午後伊東夏子ぬし来訪 英和学校にてピアノに合はせてうたふべき彼の国のうた是れのに詞を訳さんとするに五七に斗ならひたる身八六の調べのいと六つかしく又意味をもよく取がたければあはれよき知恵かし給へとて也 諸共にしばし案じてさは斯くなさんとしてをかしくもと

たのしきくにあり 老せぬたみ
とこしへのはるに かれせぬはな
日はつねに照りて うきやみもなし
とみれば隔つる 死出のながれ
其二
ときはの野べは かわのあなた

ヨルダンもカナをぞ へだてたりし
モツセのごとたちて 御くにをみば
いさみてこゆべし さかまくなみ
すべてはんやくの難きは我れと彼れとならほしのことなり
たる故なめり 猶原文を残りなくかみ砕きて更に我が詞にていひ出さんにはしかず かゝる短時間にておもふこと得
よくも尽しがたきを其うちに又参らせ給はずや もろ共に
これが研究せまほしきをなどかたる

明治二十六年の日本に生きた一葉が、「翻訳の難しさは、彼の国と我が国の習慣が違ふせいなのだろう」と嘆息したことは、むしろ誠実な文人の姿勢であった。自国のこなれた言葉に溶かしこむ困難さを自覚しながら、「共に研究したい」と語っている。また、一葉は、「和歌の五七五七七のリズムに慣れている身には、八六八六の調べは難しい」と、夏子の言葉を借りながら、流行の「新体詩」と韻律の問題を提起している。一葉の、新しい西欧詩への関心は、時代相応のもの

といつていいだろう。

伊東夏子通っていた「英和学校」とは、駿河台英和女学校のことで、すでに夏子は前年の二十五年に卒業していた。

日記で一葉が訳しているのは、原題「The Life everlasting」というイギリスの讃美歌である。作詞はアイザック・ワッツ、曲にエドワード・C・ウォーカーとジョン・H・ガワーズのものがある。夏子が持参したころは、日本ではまだ翻訳されていなかった。

日本での讃美歌の移入は複雑で、明治七年に出版された『神戸版無題讃美歌集』以来、何回も増補削減をくりかえしながら今日に至っている。一葉が手にした一編は、八六八六の詩型の讃美歌であった。その十年後に出版された、プロテスタント教会共通の『讃美歌集』（明治三十六年版 讃美歌委員会）に、三百四十六番として掲載されている。

一きよきみたみらの 住むみくには
はれてのどかなる とこ世のはる

つきせぬいづみは 野辺にわきて

うつろはぬ花の いろかきよし

二おもへばしたはし 天なるカナン

へだつる川なみ たかゝらねど

なほそのきしべに おちまどひて

船出しかねつゝ 人はたてり

三ビスガの峯より モオセのごと

天国のたのしさ のぞん見れば

巖ばしるヨルダン なにかはあらん

いさみにいさみて われゆかまし

旧約聖書の「申命記」（三章二十五節）の一節「願くは我をして渉りゆかしめヨルダンの彼旁なる美地美山およびレバノンを見たことを得させたまへ」（明治二十三年・旧約新約全書）を表した讃美歌である。「申命記」は、約束の地カナンに足を踏み入れる際の律法の書、といった主旨をもつ難解な一書である。

一葉訳と、讃美歌集の訳を見比べてみてどうだろうか。

カナンは、神がアブラハムとその子孫に約束した天国、理想の地であった。一葉は、カナンという理想郷をどう捉えたのだろうか。「たのしきくに」「老せぬたみ」「とこしへのはる」「かれせぬはな」と、いかにも桃源郷めいた東洋的な訳がなされている。

さらに、一葉が、長いフレーズを簡潔に言い換えているところに、歌人として鍛えられた言語感覚が窺えるだろう。ことに「死出のながれ」は斬新な訳と思われる。そこは、讃美歌集の「へだつる川なみ たかからねども／なほそのきしべに おちまどひて／船出しかねつゝ 人はたてり」に当たるフレーズである。一葉訳には、説教臭のまつわらない美しさ

があるが、「聖き御民」という概念が入っていない。「神」が不在の翻訳であることが、「死出のながれ」という虚無的な美の表現を生み出したのだろう。

このことは、和歌と比べての斬新さに惹かれながらも、一葉が「新体詩」に疑義を寄せていたことと一緒に記憶に止めておきたい。一葉は、流行の新体詩は、「才能と学識のある人が作っているが、若い人の場合、好みに偏ったり、好色になったりして異なったものになっているので、人が笑うのも当然でしょう」という主旨を「塵中日記」に記している。

「申命記」から採られたこの三四番歌は、その後の日本の讃美歌集からは削除されていた。神との契約、約束の地カナン、という旧約聖書の中心をなす構想自体が、日本人に定着し難かったのではないだろうか。

二

たしかに、樋口一葉にも讃美歌と触れあった日々があった。だがそれは、決して特別な接点ではなかった。当時の人々が普段の生活のなかで出会っていたものでもあった。

「富国強兵」を旨とした明治新政府は、軍事経済の活性化には全力を注いだのだが、詩歌文芸による「国のことば」の重要性は置き去りにして、西欧化を進めていた。官軍に敗れた藩士の息子たちの多くが、キリスト教の伝導に走った背景には、そういう時代状況があった。新政府とは異なる、新しい価値観の天地を求めていたのである。明治期の文人た

ちで、キリスト教の息吹きを浴びていないものは稀れといっている。ことに、「聖書」や「讃美歌」の邦訳が詩歌文芸にもたらした影響には、計り知れないものがあった。

日本で最初のキリスト教会（プロテスタント）が横浜に創設されたのは、明治五年であった。在留宣教師ジェームス・バラによって開かれた英学校で、聖書を学んでいた植村正久ほか十一名が創設に加わった。それが、先に記した「高崎教会」の初代牧師、星野光多の出身教会となった「横浜海岸教会」の前身「日本基督公会」である。キリシタンの禁制が解かれたのは明治六年のことであるから、日本基督公会の設立は、ひそかに進められていたのだった。

明治十六年に横浜で開かれた祈禱会がきっかけとなり、リバイバル（信仰復興）運動が、関東各地から全国に広がっていった。その運動の一環として、商人の町であった高崎市にも、明治十七年に教会が建つことになったのである。星野光多に共鳴して、わたしの曾祖父、岡田謹吾が高崎教会の設立に深く関わった。その思い出は、祖母カヨの口を通して、「当時のキリスト教が青年たちに与えた影響の激しさ」と語られた。父方の祖母、カヨの生家は高崎新町にあり、旅荘「越後屋」を営んでいた。祖母によれば、キリスト教は、長く続いていた旅荘を失ってしまうほどの暗い情熱を、曾祖父にもたらしたのであった。

三

キリスト者となった青年の「暗い情熱」、このことからすぐに思い出されるのは北村透谷である。透谷と樋口一葉は、まったくの同時代、同空間を生きていた。そうであるのに、擦れ違った二人として語られてきた場合が多い。あるいは、「わたしと会っていたら透谷は自殺しなかっただろう」といったという一葉の逸話も伝わっている。また、小田切秀雄に代表される、「『人生に相渉るとは何の謂ぞ』等の透谷の主張は、一葉の『たけくらべ』等に最初の芸術的結実をつくりだしている」と評するような見方もされてきている。

一葉が、星野天知に原稿を依頼されていた明治二十六、七年ごろの文芸誌「文藝界」には、透谷と一葉の作品が前後して掲載されている。それは透谷の「桂川（吊歌）」を評して「情死に及ぶ」（明治二十六年七月号）、「劇詩の前途如何」（同十二月号）、一葉の「琴の音 上」（同号）等々である。しかし、一葉は、同じ「文藝界」の平田禎木や馬場孤蝶の作品については揶揄したりしているのに、なぜか、目にしたのはずの透谷作品に寄せる感想を日記に記していない。

透谷が芝公園地の自宅で縊死した二十七年五月に、一葉は下谷龍泉町から本郷福山丸山町に転居しているのだが、ちょうどその五月の日記は書かれていないのである。引っ越し騒ぎにとりまぎれて、日記が記されなかったのかもしれない。けれど、身近な文学仲間の大事である。そのことを一葉はなぜ日記に書かなかったのか。消失したか、あるいは削除されたのか。

てしまったのか。

先にあげた「よもぎふにつ記」の三月二十二日には、禎木から「文藝界」二号が送られてきたと記されている。その号は、透谷の代表作「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（明治二十六年二月）が掲載された号であった。透谷の親友である山路愛山の記した頼山陽論「頼裏を論ず」への反駁である。これに関しても一葉は感想を書いていない。

愛山が「文章即ち事業」とし、文章と事業を同列のものとして論じたことに意義を申し立てた一文である。一読すると功利的に見える愛山の論の真意には、新政府から敗れ去った旧幕臣たちの思いが深く潜んでいた。透谷は小田原藩藩医の家に生まれており、父は大蔵省の役人であった。「人生に相渉るとは何の謂ぞ」で、透谷は、文芸は愛山の言う如く直接の敵を撃つものではない、激しく「空の空の空を撃つ」ものであると、ピューリタニズムに根ざした論を展開した。

「然れども文学は事業を目的とせざるなり、文学は人生に渉ること、京山の写真主義ほどになるを必須とせざるなり、文学は敵を目掛けて撃ちかゝること、山陽の勤皇論の如くなるを必須とせざるなり、」

有用の文芸と無用の文芸、近代日本の文芸の始まりを左右する対立が、樋口一葉の眼前で繰り広げられていたのである。一葉自身も、その皮膜を揺れ動いて書きつづけた作家であった。

短歌表現とその時代

⑥

佐伯裕子

一葉に導かれて

一

一葉の記した「日記」は、最近こそ口語訳が出版されたが、注に頼るほかない原文はとても読みづらい。たしかに一葉の文章は、他の明治時代の作家よりも読みにくいのである。その読みにくさの理由が何であるのかを時々考える。

一葉の日記に、明治二十五年に書かれた「日記」という一綴りがある。その「三月廿四日」のくだりに、一葉が、中島歌子の「萩の舎」に長歌を見てもらいに行く記述がある。

「大雨 文章があまりおもしろからねば春雨を詠ずる長歌になす 師君に一覧をこはんとて大雨中家を出づ」。

見せに行ったのは長歌だったが、一葉が日記に書き残した師の言葉は、文章に関わる談ばかりであった。

おのれ日々日記を作るに言文一致なるあり 和めかしきあり 新聞体になるあり かくてハ却りて文の為に弊害とのみなりて利は侍らずやあらむとて師の君の異見とひ参らす そは一定の文則なくてハなさざるかたぞよき 何にまれ

一の方にしたがひてものせよなどの給ふ 今のよの新聞屋文といふものこそ我がとらざる所なれ ざるものからこも又一ツの道具に而用なきにしもあらず それはそれこれはこれこかし すべて文にまれ歌にまれ気骨といふものこそあらまほしけれ……

一葉は、日記に、言文一致体、雅文体、新聞体（俗調）と文体が入り交じってしまうことを歌子に訴え、文章を書くうえで弊害だらうかと問いかけたのである。歌子は、「何であれ、一つの文体に従って書いた方がいい」といい、「近頃の新聞屋の文章を私は採らないが、時に一つの道具として用いないわけでもない。だが、それはそれ、文にも歌にも気骨というものが欲しい」などと助言を与えた。「とはいえ、女性

は慎み深く」ということも忘れずに付け加えている。歌子は風邪で臥せていたのだが、歌子自身が十九歳の時に記した「常陸帯^{ひなご}」という秘蔵の日記を一葉に見せた。「常陸帯」の存在は未詳であるが、歌子の歌文集『萩のしづく』

に、改変されて収められたらしい。天狗党の志士だった夫の林忠左衛門が、江戸に上るときから歌子と結婚するまでを記したものである。一葉がその日に読ませてもらったのは、歌子が水戸に下る「道中記」の巻であった。

それを読んだ一葉は、「おのれは歌の姿の哀なるよりも文の詞のなだらかなるよりも其心ばへのいさましさをうしきなんかしこみても猶あまりありけり」と感想を述べている。一葉は、歌子の心ばえの勇ましさと雄々しさに撃たれた。つくづく師の気骨に感心しているのだが、「なだらかな書きよう」と記す文章の姿については、それほど心を動かされていないようである。

中島歌子の『萩のしづく』から、一葉が読んだと思われる箇所を引いておく。

限りもあらぬ荒野の草よりくさに入るといひけむ月の夜ごろもしのばれて 此まゝにまち出なましかはと思ふもわりなしや 先をいそげる旅にはしほしもとどまりがたくこのまゝにやみなむもいと口惜くて

ことならば今宵はこゝに草枕

はなの千草にやどをからまし

かくて行くほどいとしろう咲きみだれたる花を何ぞととへば こはそはの花なりといへるに ふるさとのほゝそはの事おもひ出て

別れてもますみのかどみくもらすは

ふたみにそへて逢はざらめやは
そとろに涙さしぐまれぬるを……

夫の留守を守ろうとして水戸に下る、寂しい旅の野辺の描写である。柔らかな和文に統一されて、一葉の日記よりも読みやすい。風雅の滲み出た安定した和文だが、内容は、水戸藩残党の夫と共に戦う女丈夫の志が通っている。

「気骨」という言葉に象徴されるように、歌子にとって、文章というものは中身が大事であった。そもそも歌子に、「文体意識」は稀薄だったのではないだろうか。優しさも雄々しさも、安定した古い和文の中に収めていくのである。だが、一葉が師に教えを請うたのは、文章というものの姿（文体）の変化についてだった。新しい時代を盛り込むには新しい容れ物が必要なのではないだろうか、文体が変われば中身も変わる、一葉にはそういう考え方が芽生えていた。

以後、明治二十五年から二十九年に亡くなるまで、一葉の文体確立のための試行錯誤は日々に行われていた。小説を読みつづけていけば、雅文調から下町言葉と和文の混合体へと変わっていく経緯が分かるだろう。ただ、さまざまな文体の試みで、一葉が行わなかったのは、三宅花圃の『敵の鷲』のような西洋風の言文一致体だった。

一葉の日記の読みにくさは、言文一致体、雅文体、新聞体という当時に象徴するさまざまな文体が、当意即妙に入り交じっているせいではないだろうか。このように、文体の確立に迷っている明治二十五年、一葉は、心ない噂によって裂かれた半井桃水との別離の心境を、迷いのない旧派和歌の様式をもってうたっていた。

ミちのくの無き名取川くるしきは人にきせたるぬれ衣に
して 一葉

行水のうき名も何か木の葉舟ながるゝまゝにまかせてを
ミン

一葉にとって、文章を書くことに対する和歌の位置とは、どのようなものであったのか。無意識のうちの「家郷」であり「安定性」であったのではなかったらうか。

大正六年に博文館から刊行された、田山花袋の随筆集『東京の三十年』は、明治十四年から三十年間にわたる東京の町と文壇を回想したものである。十一歳で上京し、本屋に奉公した花袋の眼を通して、具体的に即した明治の一時期の東京史を見ることができる。

花袋はそこで、樋口一葉の文章に触れている。ちょうど、坪内逍遙、幸田露伴たちに対抗するように、キリスト教の強い影響のもとに巖本善治の『女学雑誌』の作家たちが生まれ、

それに飽き足らない星野天知、平田禿木、戸川秋骨、北村透谷、島崎藤村たち文藝界派が活躍するなど、文壇が賑やかになったところである。一葉が「文藝界」に「琴の音」（明治二十六・十二）を寄稿して、透谷たちと競い始めた明治二十六、七年の回想である。

兎に角さういふ風に、その時分の文壇は混沌としてゐた。

それに、内容よりも文章が先きであつた。『さうさな、奴もちつとは書けるやうになつた。』とか、『イヤにバタ臭い文章だな。』とかいふ評論が、誰でもの口に出つた。その癖、文体の統一と言ふことはまだ少しも出来てゐなかつた。言文一致、それにも沢山の種類があつたし、雅俗折衷、それにも思軒調、篁村調、西鶴調、近松調、などといふ別があつた。紅葉などでも一作毎にその文章の変化を考へて筆を執つた。『何うも言文一致も好いが、旨味が無い。骨を折つて書いても張合がなくなつてね。』などと紅葉は言つた。（略）一葉女史があつたのを抱いて、あゝした不自由な文章を書いたのも、当時の文体の不統一を語つてゐる好い証拠だ。

田山花袋『東京の三十年』

當時を述懐して、「内容よりも文章が先きであつた。」といひ、一葉について、「あの天才を抱いて、あゝした不自由な文章を書いた」という花袋の感想は、一葉の混乱や懊悩の的

確にいつているだけではなく、文明開化以来乱れていた日本語の問題を整理しているのである。

三

小説家を中心とする文芸の徒が試みた、複雑極まりない「文体」の試行錯誤、その源はどこにあったのだろうか。薩摩や長州の旧藩士たちが固めていく国家に対峙して、敗残側の志士たちの系譜は、植村正久たちのキリスト教（プロテスタント）の普及や文芸の徒を生んでいった。富国強兵、欧化主義の国家造りからこぼれていく何ものかが、当時の複雑な文体の裏に貼りついているのである。

明治六年に官僚である森有礼、福沢諭吉たち洋学者が結成した「明六社」の雑誌「明六雑誌」を読むと、新時代が捨て置いていこうとしたものが何であったかが分かる。「明六雑誌」の論調は深い信頼と敬意をもたれ、人々を動かした。

第一号（明治七・四）の巻頭の文章は、西周による「洋字を以て国語を書するの論」であった。維新以後の日本は昔日の日本ではない、學術の振興と新知識の普及を望む「明六社」がまず前提にすべきは、ローマ字の国字化である、と説いて、具体的に言文一致論の先駆を切った。太陽暦の移入などによって、国家経営と生活の西欧化を急いだ明治初年にあって、詩歌文芸は後回しの合理的な論となっている。

さすがに第二号では、西村茂樹の反論「開化の度に因りて改文字を發すべきの論」を載せている。西村は、ローマ字国

字論はいかにも合理的に見えるが、やがて日本の古典が読めなくなる不便が生じるに違いない、と反論した。だが、西と西村の論とは相反するように見えながら、国家の利益と啓蒙のための合理的な処方箋という意味において、同じ地平のものであった。

西周の「洋字を以て国語を書するの論」に、「それはいゆる字なり術なり文章なりは、皆かの愚暗を破り、一大艱険を除くの具なれば、僕謂ふ、いやしくも人民、私に世道（よそが）につきてかの愚暗の大軍を敗らんと欲すれば、これを置て他路なかるべし。」（『明六雑誌』岩波文庫）という箇所が出てくる。

「愚暗」が何を指しているのか書かれていないが、旧幕臣の反乱武士や、古い日本的な因習、習俗のことなどを指していると思像できるだろう。

この西周たちの合理的かつ啓蒙的な文章は、北村透谷が批判した、山路愛山の評論「頼夷を論ず」（『国民之友』明治二十六・二）の実利性とも異なるものだ。愛山は、旧幕臣の父をもち敗残の辛苦を味わった「愚暗」の側の一人であった。文章即ち事業なり。文士筆を揮ふ猶英雄剣を揮ふが如し。共に空を撃つが為めにあらず為す所あるが為也。」と記した愛山の实利性は、西周の「愚暗を破り、一大艱険を除くの具なれば」という合理性と激しく対峙しているのである。

一葉が悩んだ「文体」の問題には、その時代をどう生きるかという姿勢が鋭く関わっていたのである。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

7

佐伯裕子

一

樋口一葉の日記は、研究書などでは、あたかもそこに真実が書かれているかのように引用されることが多い。わたしもこれまで、一葉の日記を何回か引用してきた。だが、いったい「日記」とは何なのだろうか。半生をかけて、一葉の日記を読み究めた『一葉の日記』の著者和田芳恵は、その日記を「平安朝の女流作家が好んだ日記文学の流れを汲むもの」(『樋口一葉』講談社現代新書・昭和四十七年刊)として、「實在の人が実名で登場する私小説」であると解明した。さまざまな考察を経た結果、読まれることを予想して書かれた日記文学という結論を得たのである。

一葉の日記には、つねに計算された抑制力が窺えて、まさに「日記文学」という風貌をしている。だが、同じ私小説でも、これは「小説」であると差し出される場合と、「日記」として差し出されるのでは、読者の印象はまったく違ってくる。日記は、一葉の没後に、妹の邦子が焼却せずに保管し、明治四十五年になって初めて博文館から『一葉全集』の形で

活字になった。その時点で、「たけくらべ」「十三夜」「にぎりえ」などの当時の愛読者や、周辺の文学仲間には衝撃が広がっていた。そこに真実の心が書かれていると読まれたからであろう。

本来ならば、それ以前に、森鷗外と幸田露伴が一葉十三回忌の記念出版として刊行する計画があった。それが流れたのも、日記の内容を読んだ鷗外が、「出すとならば十分の手入れを要し候ある部分をあのみ出すは一葉を傷つくること甚だしと存候」(明治四十一年九月露伴宛書簡)という危惧を持ったからだ。一葉を傷つける、そういうふうにつめたこと自体に、「日記」イコール「私の真実」という印象がつよくもたれていたと分かる。事実はどうあれ、多くの実名の登場人物たち、彼らへの一葉の辛辣な本心の吐露として、好悪の二つの感情のなかで一葉の日記は読まれていった。

女性の読み手の場合も同様であった。長谷川時雨著『近代美人伝』(昭和十一年刊)に、一葉の日記出版の衝撃について書かれた箇所がある。一葉の小説の愛読者だった時雨は、「美

と夢とがあまりにすくなく」「切羽詰まった生活が露骨に示されている」から、「幾度かその日記を繕^{ひもと}かけては止めてしまった。愛読しなかったというよりは、実は通読することすら厭なのであった。」(表記は岩波文庫に拠る)と記した。時雨の感想には、小説家一葉のリアルな側面を知る不快感が、濃厚にまつわりついている。

いくら「日記文学」「日記私小説」といっても、本人の意志に関わらず、「日記」という名称には、そのような読まれ方をされてしまう要素がある。そのことは、一葉の歌が、いくら題詠と称しても、実際の「私の思い」として読まれる事態に似ている。小説の「モデル」という間接性はなく、ずっと生々しい読まれ方をされるのである。

だが、一葉はどのような思いをもって、夥しい日記を記していたのだろうか。それはそれとして、わたしが一葉の日記に読み取っている肝要な点としては、そこが、明治という時代が抱えた未完成な文体の研鑽の場であったのではないかということがある。

明治二十五年の「日記」のなかの一節、師である中島歌子に、「おのれ日々日記を作るに言文一致なるあり 和めかしきあり 新聞体なるあり かくてハ却りて文の為に弊害とのみなりて利あらずや」と問うた箇所を、いま一度思い出してみたい。ひいては、同時代を生きた小説家田山花袋が後に、明治期の混乱した文体を回顧して、「一葉女史があゝの天才を抱い

て、あゝした不自由な文章を書いたのも、当時の文体の不統一を語つてゐる」(『東京の三十年』)と記したことに繋がる。

二

一葉は、日記の中で、つねに何かを写しているのである。写すというよりは、大きい意味での翻訳といつていいだろうか。人間関係を、街の風物を、あるいは賛美歌を、そうして新聞記事までを、一葉は、ひたすら自分の文章を求めて翻訳しているようにさえ見える。

明治二十六年に記された日記「しのぶぐさ」に、「ろんどの女すり」という題の一文が唐突に出てくる。「読売新聞」(明治二十六・四・十八)の記事を、自分流の文章に書き直したもので、何のコメントもつけていない。

ろんどの女すり

ある老紳士汽車より下りて停車場を出んとする時一少美人あはたゞしく来たり我が父上様よくぞ来給ひしとて其くびに抱きつきて口すゝりなしぬ 老紳士ハ何思ひけん 静かにそびらに手を廻していただきしめしかの女ハしば／＼紳士の面を見てこは何とせん あまりにいとよく似給ひしからふと父にまがひ参らせたり ゆるし給へとて振はらんとす 紳士はこれをしばしもゆるめず否な我は汝の父也をさなき時迷子になし今も猶尋ぬる我子ハ汝よ 警官の来らんまでハ放たじとて抱きたり 誠ハこの女のすりなるを

見とめければ成りとか 何時の間にすりけんかの紳士がえりかざりの宝玉を抜とり居たりしよし

見知らぬ老紳士に「父上」と抱きついて来た美少女の拘摸より、素早く彼女の行為を見抜いて、警官が来るまで「我が子よ」と抱きしめていた紳士が上手だった。だが、何時の間にか少女は紳士の襟飾りを拘摸取っていたのだった……。ロンドンの街の風俗に興味を覚えたのであらう。一葉が読んだ「読売新聞」の実際の記事は次のように書かれていた。いわゆる「新聞体」といわれた文章である。

「倫敦の女掏児 盜賊掏児の術日に増し巧みになるハ東西同じことゝ見え去る三月の始めつ方英京倫敦のとある停車場にて一人の老紳士汽車より下るや窃窺たる一佳人突然駈け来り両手を老紳士の首に纏ひ最も親密なる情を示して「アラマ―御父様よう入らッしやいました本当に嬉しいことね」と云ひつゝ屢々接吻せり其時老紳士は心中吃と思案する所あり又両手を伸して佳人の体を擁けり佳人は擁かれ乍ら熟々老紳士の顔を見つゝありしが「ヲヤ阿那ハ私の御父様でハありませんでしたね余り好く似て在らッしやつた故飛んだ失礼をいたしました」と云ひ様手を振解かんと腕くを老紳士ハ確と抱きて放さず……。」

一葉の文章は、原文を縮めて、事件よりも微妙な心理の方を浮き彫りにしている。世俗的な感想は削除しているが、「接

吻」を「口すゝり」といい、肉感的な和語に換えている。新聞記事の会話の所で思い出されるのは、三宅花圃の小説『蔽の鶯』に出てきた男女や少年の会話だらう。花圃の文体、「アハハハハ。このツー、レデースは。」とか、「アーだけれど僕は昨日ブラザアに下読みをしてもらつたからすこぶるイージ―だつたぜ。」などと通底する文体なのである。

一葉は、『蔽の鶯』に触発されながら、決して、そういう新聞体を採らなかつた。「ろんどの女すり」は、新聞体を品格ある文章に翻訳した、掌編小説となつてゐるのである。

三

一葉の日記を初めて活字にした博文館は、田山花袋が明治三十二年に入社した出版社だった。自然主義文学を代表する作家田山花袋は、一葉より一歳だけ年上の明治四年の生まれである。明治二十五年の文芸誌「都の花」には、一葉が「うもれ木」を、花袋が「新桜川」を発表している。まったくの同時代に生きながら、自然主義の客観的な文体を獲得した花袋から見ると、一葉は、「あの天才を抱いて、あゝした不自由な文章を書いた」(同前)作家と映つていたのである。

しかしながら、花袋の文学的出発は、桂園派の歌人、松浦辰男を師とする和歌の世界にあつたのである。松浦には「萩のした葉」(佐佐木信綱選『明治歌集』明治二十七年刊)という歌作がある。花袋が青年時代の歌を集めて、初めての歌集『花袋歌集』を出版したのは大正七年で、花袋はその「序」に、

自分の歌は「日記以上に何もないのである」と記した。この場合の日記という言い方は、即身辺の生活記録という意味である。『花袋歌集』の生活日記歌は、一葉の日記のような辛辣さをもつものとも異なり、現代に繋がる時まで言ってみた文学的短歌の兆しがある。

冬の川すきとほりても見ゆるかなおよぐあひるの水かきの色
花袋

午すぎの町をすぎゆく獅子舞の笛わがまどの紙にひどけり

おもふ子がまゆをり／＼に眼に見ゆる若葉のかげの静かなる日よ

ゆけどゆけどつきぬ並木の松風の声の中にてけふもくれぬる

賤の男が今日も大根や洗ふらんにごりはてたり里川の水

花袋と同じように、一葉も、中島歌子を師として歌を研鑽したことが文学の出発であった。花袋は明治二十二年ごろに松浦辰男についているから、一葉が歌を習いはじめて数年の後である。一葉は、日記「しのぶぐさ」（明治二十八年一月）で、なんとも言いがたい皮肉な描写をしている。新年の挨拶に來た思ひ人、半井桃水のことを、「何事もかざりをすてゝすがたもいたくおとろへ給へき」と記したうえに、

ますかゞみわれもとり出ん見し人はきのふとおもふにおもがはりせる
一葉

と、いかにも辛辣な歌を挟むのである。あまつさえ、「聞えし美男に而衣裳などいつもきらびやか成し人なりけるを」と結んでいる。日記の中では、恋する人の裏れぶりをこのように辛辣に書いているが、こと、和歌に表現すると次のようになってしまう。一葉の恋の歌を引いてみる。

いさゝ川きのふの春のおもかげもかへらぬ水にかはづなくなり
一葉（明治二十六）

木枯の吹く音寒き冬の夜はかけても君の恋しかりけり

（明治二十九）

歌では、君（桃水）への思慕を旧派の調べに乗って素直にうたっている一葉が、日記では、即小説へ移行するばかりに完成した文体と構成、そして皮肉な視線を見せる。読まれることを想定したのか、しなかったのか。恋の歌が本心か、日記が真実か。これが、一葉の「日記」なのである。斎藤緑雨が小説「にごりえ」を評して、「泣きてののちの冷笑」といった一葉観は、恋しいと思ひの丈を吐露する傍ら、彼我を冷笑するような彼女の恋の悲惨をも言い当てていた。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

⑧

佐伯裕子

樋口一葉はひどい近眼だった。萩の舎の歌友、伊東夏子(田辺夏子)が著した『一葉の憶ひ出』(昭和二十四年・潮鳴会)に、その様子がリアルに書かれている。

「夏子さんが入門した当座は、下をこぎみがちで、隣に居た人にも話してもませんでした。みの子さんが「今度お弟子入りした樋口さんと云ふ人は継子みたいだね」と言ひました。それは強度の近眼で、隣に座つてゐる人の顔も一瞥した位ではハッキリ分らなかつたからでせう。上目でジロ／＼人を見たと云ふのは反対です。毛は薄毛でしたが、すこしもぢぢれてはゐませんでした。」

「上目でジロ／＼人を見た」以下は、それまでの一葉に対する、三宅花圃などに代表される印象記への反論になっている。眼が悪くて、人の顔もはつきり見えないくらいだった。だから、こぎみがちに座っていたのだ、そう庇っているのである。一葉の内気な性格によるところもあつたろうが、強度の近眼のせいだったことは間違いない。

それにも関わらず、一葉は、針仕事をこなし、さまざまな本を読み、そして、新聞をていねいに読んでいた。総じて一葉は、「眼の人」であつた。狭い長屋に暮らしながら、社会との通い路である「眼」は、つねに開いていたのである。

進取の氣に富んでいた父、則義の影響もあつて、一葉は少女の頃から新聞を愛読し、父に記事を読んであげた。新聞が好きだつたのである。「読売新聞」の小さな記事、「ろんどんの女すり」(明治二十六・四・十八)を、ふいに新聞体から和文に書き直したりしたもの(明治二十六年、日記「しのぶぐさ」)、父に読み上げた習慣の延長であつたのかもしれない。長じてからの一葉は、新聞記事に「小説のたね」探しをする興味も覚えたが、新聞のその独特な文体に注意がいくようになっていた。文体が変われば、事柄のニュアンスも変化する。平俗で調子がよく、時代の尖端に触れて揺れる新聞の書きぶりに、疑問を覚えつつも強い関心をもっていた。

一葉が短い生涯をとおして思慕した小説の師、半井桃水は万延元年の生まれで、「東京朝日新聞」の記者となり、特派

員の第一号として朝鮮国の内紛記事を書き送った人である。後に、朝鮮国を舞台にした『胡砂吹く風』を、桃水痴史の名で、明治二十四年十月から百五十回の連載で『東京朝日新聞』に執筆した。桃水は、いわゆる文学青年とも異なり、時代を生きるジャーナリストの先駆者であった。新聞小説というジャンルが、ようやく成立してゆく時代だった。

二

新聞小説というジャンルは、始めからあったわけではない。野崎左文の記した「明治初期の新聞小説」（大正十四年『私の見た明治文壇』）に、その辺の事情が明かされている。左文は、安政五年に高知県に生まれて、新政府の工部省技手になるのだが、小新聞の投書家から仮名垣魯文に師事して新聞記者に転業した。滑稽文、狂歌、狂詩を多く書いて活躍し、のちに鉄道院副参事になった人である。当時は、常連の投書家の文章が新聞の重要な位置を占めて、そこから力のある作家が生まれていた。

明治七、八年から十年までの間に、東京で発行された新聞は、主として、大新聞の「東京日日新聞」「郵便報知新聞」「朝野新聞」「曙新聞」、小新聞の「読売新聞」「平仮名絵入新聞」「仮名読新聞」などであった。これらの新聞発行所のほとんどは、申し合わせたように銀座に居を構え、互いに競い合い、活況を呈していた。

大新聞、小新聞というのは、紙幅の大小をいう区分であつ

たが、それぞれに固有の旗色をもっていた。大新聞の主旨は、国家政治向きの言論におかれ、小新聞の記事は、市井の雑事や花柳界、演芸界のことで賑わった。それに応じて、取材や編集する記者の来歴、性向まで異なった。

当時を活写した野崎左文の回想を引いておきたい。引用は、十川信介編『明治文学回想録』（一九九八・岩波文庫）に拠った。

小新聞は中流以下の階級を読者とするから、その人々の好みに投ずるよう、何か目先の変ったものを掲げていわゆる呼び物となすが営業上の秘訣であった。そこへ行くと『絵入新聞』はよい処に着眼したもので、毎日の雑報へ絵を入れて発行するというのが同社の誇りであった。その絵は同社資本主の一人であった落合芳幾氏が筆を把ったもので、その順序はこうである。（中略）それにしても五、六時間の内に彫上げる必要上からその版木を二つにも三つにも割り、剗削師が手別けをして彫刻し、あとでこれを縫合するという究策を施すこともあったが、（中略）不手際なものであった。そこで版木を丁寧に彫らせるには、どうしても一、二日余裕を与えねばならぬという処から、同記者の前田夏繁氏が「金之助の話」という、三分の事実へ七分の潤色を加えた続き話を載せる事となり、（中略）この続きが恐らく新聞へ小説を載せ始めた嚆矢で、その後小新聞は競うてこ

の絵入りの続き物を掲げ——「読売新聞」のみは一見識あつて紙面に絵を入れた事がなかった。(略)——

「三分の事実へ七分の潤色を加えた続き話」、それは、版木を彫る時間を得るための窮余の策であつた。絵入りになつたがために、前もつての記事が必要になつたのである。事実を伝える新聞が潤色を加えるとなると、そのこと自体を読者に分からせていかなければならない。「七分の潤色」が「小説」に変わるのには、時間の問題だつただろう。やむなく始めた潤色物が、市井の人々の人気を呼んでいった。

そうこうするうちに、大新聞までが絵入り小説を取り入れるようになったのは、絵入り小説を載せると売れ行きがよくなつたことが拍車をかけたせいだつた。

その当初は、内容を読み上げて売つていた新聞が、絵を入れて、見せることで、「黙読」の読者を手にいれていく。だが、その文章は、「音読」の名残りをそのままにして、平明な口語体が要求されていくのである。誰でもが「聞いて分かる」文章と、眼で「読む」文章の混合体が、新聞独自の文体を作つていった。そのようにして、新聞は、文明開化で千変万化する世相を活写する役割を担つた。

一葉が思慕し、小説の手ほどきを受けた半井桃水は、そういう流れの中を生きていた、生粋の新聞人だったのである。

三

絵入り小説がもてはやされていく反面、明治になって発行された新聞の運命は、新政府との戦いの中にあつた。新聞そのものが、誕生した時から政府の言論抑圧の対象となり、反体制の産物となつたのである。言論弾圧の動きはつねに新聞にまつわりついた。もともと、新聞の発行者、および記者たちの大半は旧幕臣であり、明治新政府に深い反感を抱くものたちだったのである。

初期の新聞については、美土路昌一編著『明治大正史・1・言論篇』（昭和五年刊・朝日新聞社）に詳しい。

明治政府の言論抑圧政策は、先づその新聞政策に端を発してゐる。元より当時は、日本においては新聞の発芽時代であつて、いまだ印刷術の見る可きものなく、新聞紙の経営も十分ならず、僅かに木版印刷を以て日本紙数枚綴りのものを一箇月数回手刷り発行するに過ぎず、その数も江湖新聞（福地源一郎）中外新聞（柳河春三）同外篇（渡辺一郎）内外新報（橋爪貫一）遠近新聞（辻新次）横浜のもしは草（岸田吟香）位のもので、その勢力も発行部数も誠に微々たるものであつた。

然しながら、これ等の新聞の発行者は、その大半は何れも旧幕臣であつて、所謂佐幕党に好意を表し明治新政府に對し快からざる態度を持してゐた。されば、その戦報の如きも常に官軍に不利なる報道をなし、或はその論説の如き

も新政府を批難して憚るところがなかった。

江湖新聞の福地（桜痴）は、「薩長の手に政權の帰するは第二の幕府を起すの原因となる」と、声高に新政府を攻撃した。福地は牢に入れられ、版木は没収された。彈圧がほかの言論機関に及んだのち、明治二年、新たに新聞条例が公布され、発行許可が下りる。以降からが、いわゆる近代的な新聞の時代に入ってゆくことになる。初めて活版機械を使ったのは、「横浜毎日新聞」だった。

だが、編集者、記者たちの禁固、罰金処置は、繰り返し取り行われていった。明治八年六月に發布された新聞条例では、「曙新聞」などの多くの記者が厳しい処分にあう。このように、通俗性において、また思想性において、新聞は、時代の最尖端にあった。

四

樋口一葉は、「古今和歌集」「新古今和歌集」「万葉集」「源氏物語」など、おびただしい古典を通読した。その中に、『九雲夢』という韓の士族の教養書のような史書がある。日本の武士道とは発生を異にする新羅の「花郎道」に通じる書であるらしい。（塚田満江「半井桃水の人と文学」・前田愛篇『全集樋口一葉 第四卷評伝篇』昭和五十四年・小学館）。それは、桃水から貸し与えられたものを、一葉が書写して、樋口家の蔵書に残った一冊だ。

桃水は、新婚の妻の死を契機に朝鮮から帰国したのだが、一時は永住を考えたほど、活発な政治活動をしていた。親日と親ロシアの間を揺れる閔妃に、批判的な立場を取る開化派であった。明治十四年に起きた亀浦事件という内紛に関わった際には、獄舎の囚われの身となっており、十五年七月に京城で壬午の変が起ると、特派員の第一号の立場から、すばやく「朝鮮事件」と題する一面トップ記事を送っている。

半井桃水は、写真からすると、憂いを帯びたやさし気な文学青年のように見える。やがて、新聞小説という、平俗なジャンルを切り開く大衆作家となる。一葉は自身、新聞調の通俗的な桃水の文章に疑問をもったことを日記にも書いている。だが、真に一葉に影響を与えたものは、桃水の表面的な小説作法ではなかった。

一葉が、『九雲夢』などという特殊な史書を筆写し、新聞をつぶさに読んでいた事実を考え合わせると、政治的熱血漢だった桃水の濃厚な浪漫主義の影が思われる。日清戦争の報道記事に奮い立ち、戦地で死にゆく兵士に寄せて、

うら山やましいづれ消ゆべき路のよを野原のあらし立まさり
つつ
詠草 明治二十七年

とうたった一葉には、「新聞」が激しく持っていた、外側に開いた眼差しに同化する「眼」が読み取れるのである。

短歌表現とその時代

⑨

佐伯裕子

一葉に導かれて

昭和十一年七月二十六日、陽の照りつける下谷龍泉寺近くの道の端で、一葉の碑の除幕式が行われた。その日のようすが、今井邦子の随筆「碑の除幕式」（樋口一葉 昭和十五年刊・萬里社）に記されている。女性歌人としての目で一葉のこゝとを書き続けていた邦子は、文藝春秋社からの案内によつて除幕式に参加した。

「それにしても余りにも人が少い。暑い為であらうと考へたが寂しい。暑くても何でも出て来た自分を言ふのではないが。（中略）一葉がたとへ半年でもこゝの空気を吸ひ、こゝから空をながめ、この土をふんでゐた事を思ふと身が引しまゐる。明治中期に女が文筆によつて三人の生活を死力を尽して支へたといふ事が又更に思ひやられ、今日御一統の栄え、その原稿の一枚でもが金目をいとはず引張り風のやうにされるとしても、当の一葉は死ぬまで金に苦しめられて身に徹して生活苦をなめさせられてゐたのだ。」

馬場孤蝶、佐佐木信綱の祝辞も、狭い道端で立ったまま述

べられた。いかにも「寂しい」という邦子の感想は、ある種平俗な見方といえよう。だが、「文筆によつて三人の生活を死力を尽して支へた」一葉への思いが、「今日御一統の栄え」とでもいうほどの、人の世の皮肉なものを感じ取っているあたり、現実把握のリアルな眼差しがうかがえる。

樋口一葉研究が初めて一本になった湯地孝著『樋口一葉論』（大正十五年刊・至文堂）から十五年経て、今井邦子の『樋口一葉』は出版された。平塚らいてうや長谷川時雨たち作家の論とも違う、「碑の除幕式」に見られるような、リアルで平俗な視線が捉えた一葉観に新味が感じられる。ことに、本格的に一葉の歌について言及した点は、今に特筆されていい一書であろう。

今井邦子が一葉について書くにあたり、まず念頭にあったのは、同じ歌人・與謝野晶子の直言だった。「さきにも述べたやうに與謝野晶子女史が、一葉などにさう感心するところはない。といふ意味のことを書いてゐたが」（同書）と、さらにと記す邦子の根底には、晶子が一葉に触れた随筆「産屋物

語」の一節があった。

「女の事は婦人の作家が書いたならば巧くその真実を写す事が出来るかと申すに、従来の処では未だ我国の女流作家の筆に然う云ふ様子が見えません。男子を写すのは男の方が御上手である事は申す迄も無いので、女の書いた男は勿論巧く行きません。一葉さんの小説の男などが其例ですが、女の書く女も大抵矢張嘘の女、男の読者に氣に入り相な女に成つて居るかと存じます。一葉さんのお書きになつた女が男の方に大層氣に入つたのは固より才筆の所為ゆゑですけれども、又幾分芸術で拵しらへ上げた女が書いて有るからでせう。」（『産屋物語』東京二六新聞・明治四十二・三・二十）

一葉の小説には、「男の読者に氣に入り相な女」が書かれているという晶子の感想は、一葉を「天才」と持て囃す男性作家たちへの一矢とも読める。明治の短歌革新を遂げた晶子にとって、一葉の歌は認めることのできない作風であった。晶子の言及は、平塚らいてうらの論と共に、一葉を「過去の女性」として眺め、女性にとって不自由だった社会に言挙げをする構えをもっていた。「男子の老大家の側で語る一葉女史は上品すぎ理想的すぎる」（同書）という今井邦子は、晶子たちの言に半ば賛同しつつも、次のように断じている。

「私が云ひたいところは、一葉といふ人を評する時に、何よりも先にその輪郭を「ふるい女」「旧日本の終の女」とだけ評し去つて平気でゐられない所にある。私はむしろ古い新

しいなどといふことは末であつて、それを乗超えたところで彼女の価値を認め、彼女を眺め、彼女を賛美するのである。」人間としての、女性としての「不思議さ」「分厚さ」を指摘する邦子の多面体の一葉観は、ともするとこれまで埋もれがちになってきた。だが、この「古い新しいなどといふことは末であつて」という掴まえ方、女性としての古き新しさを問わない姿勢は、同時に、一葉の歌に対しても新旧を慮らない視線を意味しており、幅のある見方を生んでいる。邦子は一葉の歌を公平に眺めながら、その上で、桂園派の題詠中心で新味のない作りようを惜しむのである。邦子は、「その歌の価値は小説の方で言つて『大晦日』ほどの値打ちも匹敵しない」と指摘した。むしろ、師である中島歌子の歌の素養をかつていた。

二

樋口一葉の十七回忌の記念に出版された、四五八首の『一葉歌集』の序に、佐佐木信綱は、「明治の和歌は明治廿七八年を以て一変してある。廿七八年以前までの歌は忌憚なくいへば捉はれたる歌であつた。」と記した。題詠による歌づくりを閉じられた世界として一葉の歌のうえに見た信綱の序文に、邦子も賛同している。

日清戦争の開戦から勝利までの明治二十七〜八年で時代を分けるやり方は、今井邦子の時代にはまだ生きていた。初めて近代戦争に突入した日清戦争を潜ったか潜らなかったか、

という一線である。一葉は、ちょうど終戦直後の明治二十九年にこの世を去った。日清戦争が、一葉の小説にどのような影響を与え、どのような表れ方をしたか、論の分かれているところなのだが、一葉は古い女性か、新しい女性かと分別しようとする二項対立にこだわっていると見えてこないものがある。邦子は、歌人としてのリアルな眼差しによって、その危うさに気づいたのではないだろうか。

一葉の歌のなかで、日清戦争に関わるものはほんの数首である。詠草にでてくる数首と、日記「しのぶぐさ」(明治二十八年一月より)に記された清国の提督「丁汝昌」を詠んだ一首だけだ。いずれも題を与えられて作ったのではないが、歌の姿は題詠で鍛えた流麗なものとなっている。

丁汝昌が自殺はかたきなれどもいとあはれなり さばかり
の豪傑をうしなひけんとおもふにうとましきはたゝかひ也
り
中垣の隣の花のちる見てもつらきはるのあらし成りけり

詞書としての感想がなければ、丁汝昌の最期をうたったものとは読めない一首である。提督を「隣の花」に、戦争を「はるのあらし」に見立てた底に流れる思ひは、「うとましき、つらき」戦争という感情であらうか。

としのはじめ戦地にある人をおもひて
おく霜の消えをあらそふ人も有をいはんものかあら玉
のとし
明治二十八年詠草

詠草に出てくる数首は、戦地に赴く人や、その妻の心に思いを寄せて作られている。先に引用した一首は、日清戦争の時事に触発され、それを直に歌にしたものだ。めったにしない作り方をするほどに、敵戦艦の提督丁汝昌の最期は、多くの人の胸を打つ出来事だった。「丁汝昌」の名は知られていたのだが、日本中に知れわたったのは、国木田独歩が「国民新聞」の従軍記者として書き送った記事が発端だった。独歩が軍艦千代田に乗り込んで送りつづけた現地報告で、後に「愛弟通信」と呼ばれた一連の外信である。日本軍は、丁の没した黄海海戦において決定的な大勝利をおさめた。あまり知られていないが、日清戦争での日本側の死者は少なく、その数は、十八年前の西南戦争よりはるかに少ないものだった。丁汝昌は、部下の助命を言い、自殺したのである。

「嗚呼丁汝昌は死せり。彼は国のために殉じたるなり。已に丁汝昌死す。北洋艦隊は全滅したる也。威海衛は陥没したる也。開戦今日に至るまで、敵の敗亡滅燬その数を知らず。而も支那北洋艦隊は尤も見事なる最期を遂げたる也。」
この独歩の記事で、「只だ部下をして生命を完からしめんのみ、寄贈の酒肴は受くるに忍びず」という、丁の最期の言

葉も伝えられた。明治二十八年二月十二日の記事である。

日清戦争が始まってから、新聞社は競って特派員を送るようになった。ことに、徳富蘇峰の「国民新聞」と福沢諭吉の「時事新報」の競争は熾烈を極めた。独歩の記事の約半年前、明治二十七年九月二十日に、「時事新報号外」は「丁汝昌」の死を大きく報じている。「……尚ほ其他一艘も撃破され水師提督丁汝昌、佐官ハンネッケン及び他の一外人戦死し其他敵の死傷頗る多く支那艦隊全敗せりとの確証ありたり」という号外である。ハンネッケンの戦死は確認されたが、丁汝昌のほうは誤報だった。

その半年後、独歩の記事が報じられて六日たった二月十八日、「時事新報号外」がその自殺を美談として大きく取り上げた。「国民新聞」に抜かれた記事のフォロワーに苦しんだ経緯があったのだらう。「丁汝昌の死」は、「敵ながらあつばれ、あはれ」という美学のもとに語られていった。そのことは、明治二十七、八年のナシヨナリズムが、まだ武士道由来の浪漫性を潜ませていたことを象徴しているだろう。

一葉の歌、「中垣の隣の花のちる見てもつらきハはるのあらし成りけり」も、同様の、浪漫的ナシヨナリズムの思潮から生まれたものといっている。一葉が接した記事がどれであったかは分からないが、時期的には先鞭をつけた独歩の記事のように思われる。「丁汝昌の死」にまつわる国民感情には、独歩の最初の書きようが大きく影響を及ぼしていた。一葉の

歌に、一步なりとその風潮を超えている点を見るとすれば、「つらきハはるのあらし成りけり」と、問題を戦争そのものに持っていつているところだ。だが、そういう意思が、柔らかな雅語にくるまれることによって、微妙に儂い情感に変容していくのである。

今井邦子は、戦争に関する一葉の数少ない歌について次のように記した。「これ等の歌を通して一葉その人が事変に就いて決して無関心であつたとは思はれない、否当時の年若き婦人としては稀に見るほど時局に関心を持ち、その当時として敷島の道にいそしみ歩む人としては驚くほど難渋な道をそこにも展いてみようとする努力が感じられる。しかし何しても歌そのものが低調である、」と述べ、時代的に「無理ならぬ」と嘆じながら惜しんでいる。

日清戦争に勝利したにも関わらず、すぐに独仏露の三国干渉によって、日本は苦しい外交を強いられることになった。

明治二十七、八年の開戦と勝利の昂揚のあとに、大きな失望が襲ったのである。世界の列強国のなかの日本の苦しい位置が国民に実感されたのは、むしろ戦後の日々だった。

国木田独歩の敵将への思い、そうして樋口一葉の儂い歌の姿、それらを古いと切り捨てて来た「現在」であった。そこからこぼれ落ちてしまった情感はいったい何であったのかと思われるのである。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

10

佐伯裕子

神州男子のこゝろは鉄よ

こゝろは鉄よ

きつさきあらくつんざけ闇を

東西四方むらがる悪魔

かしらをのべて魔王もまてよ

(中略)

一箇のいのちに

一国さかゆ

しぬともうらまじ

余命は千古

無尽のうきよ

まことは尽きず

平和はながし

阿修羅はしばし

おもへば刀剣

博愛の道理あり

日清戦争が勃発した明治二十七年ごろの樋口一葉の雑記「かきあつめ」に、山田美妙の新体詩一篇が筆写されている。日清戦争への思いを述べた詩で、一葉は、美妙の詩として氏が雑誌「少年園」に寄稿したものと書いている。だが、実際には、その初出は詳かではなかったようだ。人づてに知ったのか、長めの詩をまるごと筆写したうえ、「この一文山田君近作たのむ所ありて早稲田の少年園に寄するところのよし字書之かげにかくれて久しう聞えざりし名の又かゝるかたにもこゝろをそぐらむこそ頼もしけれ」と共感を寄せた。

山田美妙は、尾崎紅葉らと硯友社を興し、小説『武蔵野』で明治初期の言文一致体の先駆者となった。納得のいく文体を求めつづけていた一葉には、強く印象された作家であったのだろう。その美妙は、明治二十五年ごろは、『日本大辞書』『日本地名全辞書』などの辞書の編集発行に励んでいた。実作から遠ざかっていた美妙が、久しぶりに新体詩を発表したのである。一葉には、戦友のように頼もしく感じられた。

「鉄の刀剣」に「神州男子」の心意気を託し、阿修羅（戦争）と引き換えに得る長久の平和を希求する。「一箇のいのちに 一国さかゆ」には、国家に対する個人という近代的な思潮がうかがわれよう。一人の兵の死によって守られる国の栄え、そこに「剣の道」を指し示した新体詩となっている。

だが、詩は、「一国の栄え」とは一体どのようなものであるのか、もう一つ踏み込んだ表現に及んでいない。明治期の後半へ、真の近代国家へ深まっていこうとする時代にあつて、山田美妙の詩はむしろ牧歌的な印象のつよいものだ。

一葉は、この詩の感想は記していない。詩の出来不出来よりも、日清戦争に寄せる昂揚感を共にしているかのように、ただひたすらに詩を筆写している。

一葉はこの詩の筆写のあと、中島歌子の師であつた加藤千浪の自筆家集『萩園詠草』から一首を引用して付した。美妙の詩は詩として、そのあとに添付された一首とメモに、他者の言葉に託した一葉独自の見解が示されている。

萩ぞの大人（千浪・筆者注）が詠にいはいく

恋にのミ誠の道は残りけりミちてふ道は名斗（はかう）のよに

さらに、歌の引用の後には、「主持の道はつとめて英雄のこゝろをとるにあり」として、「国を修めんとするものは家ををさめざるべからず……」と、儒教の経書『大学』の一章

がつづく。美妙の戦争の詩を筆記しつつ、一葉の思いは「国家」というものの方に向かい、主持、すなわち大事を修めようとするものは「英雄」の心をもってあたるべきである、という言挙げに及んでいく。

そういう雑記のなかで、もっとも気になるのは、加藤千浪の恋歌の引用である。「恋にのミ誠の道は残りけりミちてふ道は名斗のよに」。「道」などというものが失われてしまった時代にあつては、「恋」にのみ真実の道は残っていた、というのである。「道」には開国以前の思潮が暗示され、近代の恋愛至上主義とも異なる、ある種デカダンスな「恋の道」が匂いたつ。

一葉は、なぜ美妙の戦争の詩を筆写したあとに、この一首を添えたのだろうか。まるで長歌に添えられた反歌のような位置に、一首は置かれているのである。

雑記「かきあつめ」は、美妙の戦争詩を引きつつ、混乱する時代の中で、国家を修めんとするものの英雄の心映えを切望する。だが一葉は、その英雄的なものが「刀剣」のみにあるのではなく、人が一身をかけて焦がれる「恋」の心映えにも、一家を修めるさまざまな仕事にも繋がっていると、改めて強調したかったにちがいない。このことは、女性である一葉の時代解釈、戦争解釈であり、「武士道」的な浪漫性を保持しつつ、新しい価値観を打ち立てているように読める。

一葉の題詠に時代の匂いのするものは少ない。少ないが、

それは大きな文脈のなかで、時代と密に繋がっているものだった。たとえば、一葉の和歌と日清戦争を結ぶ太い線は、刀剣の道も、恋の歌の道も、細腕で一家を支える困苦も、同等の力として捉えようとする姿勢に見え隠れしている。このことは、「萩の舎」歌友の三宅花圃のモダンな才能や、伊東夏子たちの華やきと大きく異なる点であり、山田美妙の戦争詩とも別のものだった。「萩の舎」のなかで、一葉は、師である中島歌子の剛毅な志を、もっとも濃く継いだ歌人だったのではないだろうか。

二

今井邦子著『樋口一葉』（昭和十五年刊・萬里閣）で、邦子が断言した一葉の歌の位置は、その優美さを認めつつも、ほぼ與謝野晶子を始めとする先人の評価と同じものだった。

「詩歌と散文の価値の批判は決定的に出来るものではないと信じてゐるが、女史の小説を読んでこの歌集を読むと時代の相違とはいへ、一葉ほどの人でも時を得なければ内に蔵されてゐるものも自ら花と咲き出るやうなことがなくて済んでしまつたのであると、そぞろに感慨に堪へぬものがあつた。」

「女史は一生懸命に歌の勉強をしたらしいが、時代が若かつた為、未だ歌を充分趣味の遊戲として取り扱ふことより上に出てゐないので、人の心に迫るものもなく、残念ながらさすがの一葉女史でさへ、此の程度の歌を詠んでその方は終りとなつてしまつた。」

今井邦子の書き方で、再び思い出されるのが田山花袋の一節である。「一葉女史があつた天才を抱いて、あつた不自由な文章を書いたのも、当時の文体の不統一を語つてゐる好い証拠だ。」（田山花袋『東京の三十年』大正六年刊・博文館）

「一葉ほどの人でも」「さすがの一葉女史でさへ」「あの天才を抱いて」という固定観念がまずあつて、それから「時を得なければ」や「時代が若かつた為」「当時の文体の不統一」という「時代の混沌」に要因をもつていくのである。書きようが似ているのは、一葉がすでに屹立した小説家「樋口一葉」として、共通認識のなかに存在していたからだ。

このことは、初めて一葉論が一本にされた湯地孝著『樋口一葉論』（大正十五年刊・至文堂）の視点からの距離をも示す。湯地は、尾崎紅葉と幸田露伴を明治文学中期の大きな流れとし、小説家一葉を「ほんの一支流」であると位置づけた。「大河の風姿を求める事は出来ないが、その代わり大河に見られない趣を持つてゐる。」として論を展開したのである。

『樋口一葉論』の主旨は、「思想的内容」を欠いてはいるが、秀でた「東京」の「恋愛小説家」樋口一葉というものであり、和歌に関しては、ほんの触りといつていいくらいにしか記していない。「一葉の和歌は師の中島歌子を通じて香川景樹等の流を汲んでゐるものであらうが、一向に感心されない。」（湯地孝）というものであった。

湯地の一葉観は、大正時代における標準的なものと見てい

いだらう。この地点から見ると、田山花袋や今井邦子のなかの一葉像はさらに大きく膨らんだものとなった。「一葉ほどの人でも」、「あの天才を抱いて」という見方が、ごく普通のこととして語られるようになったのである。

三

偉大な小説家一葉という見方が堅固になるほど、逆に一葉の題詠和歌は趣味的なものとして片づけられていく。女性として一葉を見るときに、圧倒的な鋭さを見せた今井邦子にしても、一葉の歌に関しては「時代が若かった為」と片づけてしまう。文芸の「近代化」や「進歩」という時間の流れに沿って振り返った見方をするのである。

今井邦子は、著書『樋口一葉』のなかで、先人作家たちの一葉観を列挙し、そこからの脱出を試みた。その論調は、現代の自在な一葉観を切り開く端緒となったものである。たとえば次のような見解からの脱出であった。邦子は以下のように書き記している。

相馬御風氏は「一葉は最後の旧き日本の女であつた」(The last Woman of old Japan)

徳田秋声氏は「一葉の作品に出て来る女は、近松の娘といふ感がおこる」

秋田雨雀氏は「一葉女史は、日本の女にかはつて女に生まれた悲哀を世の中に訴へたのだと云つていい」

馬場孤蝶氏は「一葉は理論で人におし迫つてゆくといふよりも、泣いて条理を訴へると云つた側の女であつた」

又湯地孝文学博士の樋口一葉論の中には「明治時代の(自覚直前の女性)の最後の訴へをなしたのが一葉であつた」

こういった諸家の一葉観に対して、邦子は、「新旧を論ずる日になつたならばその当時に於いてさへ一葉は古かつた」と反論している。そうして、一葉を評するにあたって、ただ旧い女性とか、旧日本の最後の女性とだけで修めてしまえないものがある、と主張した。新旧を超えたところに、一葉という女性作家の分厚い存在感を感じ取っていたのである。昭和十五年にやっと登場した、女性歌人による鋭く新鮮な一葉観だった。

このようなまなざしで一葉の存在を見つめたのに、邦子は、どうして歌の面では諸家と同じように「新旧」の眼で評し去ろうとしたのだろうか。一葉の歌を読み通すのはいかにも時間がかかるし、面白いものとはいえないがたい。だが、與謝野晶子の歌が新しく一葉は旧い、と新旧の対比のうえに置いた固定観念で眺めることが、一葉と時代との真の関わりを見えにくくさせてしまった。そのことは、歌一首の良し悪しとは別の問題のように思う。

短歌表現とその時代

II

佐伯裕子

一葉に導かれて

—

田山花袋は、明治二十七年六月の「文學界」北村透谷追悼号に、詞書を添えた追悼歌一首を投稿した。これがきっかけで「文學界」との付き合いが始まり、翌二十八年には、「蕎麦の花」などの小説を発表するようになった。

北村透谷君をいたみて

世の中はたのしきものをあはれ君なにをいとひてひとり
ゆきけん

田山花袋

透谷が没したとき、花袋は二十四歳。すでに葉間屋や書肆有隣堂などの丁稚奉公を経て、生活の辛苦を知り尽くす青年になっていた。自殺者に寄せた、「世の中はたのしきものを」という皮肉な嘆声はどうだろう。追悼号に溢れる若い悲傷感を、この一首がひといきに断ち切っているように見える。精神の煩悶のうちに自殺した透谷に対して、分厚い生活人の顔が浮かぶのである。

この一首は、大正七年に刊行された『花袋歌集』（春陽堂刊）

には収録されていない。親交のあった国木田独歩への追悼歌「梅雨晴れのわらやの軒の日に干せる繭白き日を君が喪にゐし」があるので、不思議に感じられる。『花袋歌集』は歌の初出を明らかにしていないし、初期のものを省いているので断言はできないが、透谷追悼の歌は、「文學界」に集う青年たちの甘さに向ける言挙げの一首だったのではないだろうか。戦略を持って、「文學界」に一太刀の勝負をかけたものと読める。「世の中はたのしきものを」という、斜に構えた物言いは彼ら青年の胸にざらりと澱を残したに違いない。

また、後に花袋は、以前にも引用したが、『東京の三十年』（大正六年刊）で、「一葉女史があゝの天才を抱いて、あゝした不自由な文章を書いたのも、当時の文体の不統一を語つてある好い証拠だ。」と、樋口一葉の文体の旧さについて記した。既に『田舎教師』など、自然主義小説で活躍していた花袋である。わずかに一葉に触れた数行に、微かながら、終わった作家を見る優越の匂いを嗅ぎ取ることができるだろう。

明治四年に群馬県（旧栃木県）に生まれた花袋は、一葉と

は一歳ちがいの同世代人である。館林藩士だった父鍋十郎の第六子で、本名を録弥といった。父親は、司法省に勤める同郷の元館林藩士を頼って上京し巡査になったが、明治十年の西南の役で、同郷の元館林藩士とともに警視庁別動隊に志願し、戦死している。下級官吏の職を得た旧藩士で、西南の役の鎮圧に志願したものは多かった。彼らの屈折した心のうちは、今では想像しがたいものとなってしまう。

小学校を中退して、十一歳で丁稚奉公に出された花袋は、新政府の兵として戦死した旧藩士の父の姿をどのように感じていただろうか。農を捨て、同心株を買って念願の武士になった直後に明治維新となり、ようやく官吏職に滑り込んだ一葉の父の逞しい姿が重なってしまう。

一葉の山梨、花袋の群馬、それぞれ資質を異にする作家だが、時代の鋭い切れ目に故郷を捨てて上京した「父」の思いが、二人の上に影を落としていたことは記憶に止めておきたい。しかも、花袋の文学的出発も「旧派和歌」にあった。花袋は、十代から漢詩と和歌を作り始めて、詩歌を頼みに身を立てようとしたのである。

二

花袋は、桂園派の香川景樹の流れを継ぐ松浦辰男を師として「紅葉会」を結成しており、柳田國男と二人抜きでた門下生であった。一葉の師中島歌子は、江戸派の流れを汲む歌人加藤千浪の門下だが、一葉は最後まで歌子を桂園派と考え

ていた。実際、歌子も一葉も景樹の影響をつよく受けていたのである。一葉と花袋、二人の歌の出発は「桂園派」にあった、そのように括つていいのだろう。

以前の稿で、樋口一葉の歌と比べながら、『花袋歌集』の「午すぎの町をすぎゆく獅子舞の笛わがまどの紙にひびけり」などの近代性に触れた。青年時代からの作品を収録したとはいえ、『花袋歌集』は大正時代になってから出版された歌集だった。初期の旧派的な歌は切り捨て、姿を整えて大正の世に問うたのである。大正四年に島木赤彦の『切火』、北原白秋の『雲母集』、吉井勇の『祇園歌集』、中村憲吉の『林泉集』、大正六年には『長塚節歌集』が、続々と刊行された最中の出版だった。

花袋と交遊のあった窪田空穂が、「歌人花袋」という一文を『定本花袋全集』（昭和十一年刊 花袋全集刊行会）の「月報十五号」に寄せている。花袋が、理知的な香川景樹よりも熊谷直好の素直な作風を好んだことに言及し、「前田（晃）君は、自分は田山さんの本の殆ど限りないまで刊行されたのをその都度見て来たが、『花袋歌集』の出た時ほど昂奮したのは見た事がないといつてゐた。」と述懐している。花袋が、いかに力を入れ、頼むところがあって歌集出版に当たったかを伝える一文である。

そのようにして出版された『花袋歌集』の自らの序文は、和歌から自然主義文学へと作風を拓いた花袋の本質を明かす

ものであり、わたしはそこに、皮相な透谷追悼歌を投稿した土壌を見るのである。

「私は先生（松浦辰男・著者注）に歌についての眼を開いて貰った。先生は歌は日記であると言った。その人の生活であるといふことを高調せられた。また歌は作るのではなくてよむものだと言はれた。（中略）その言葉の中には生活の爲めの芸術と芸術の爲の芸術との区別、また歌といふものの本当の位置、更に大きくしては芸術の本当の位置といふことが包れてあつた。（中略）その後歌は芸術の一つとして認められた。そして認められてからいろ／＼な歌が起つた。歌で哲学の議論をしたものもあれば、生活の改善を謀つたものもある。（中略）しかし私は先生の教に捉へられたためか、または歌即ち日記に捉へられたためか、何うもさういふ風に歌が客観に出て行く形に共鳴することが出来なかつた。従つて私の歌は日記以上に何もないのである。」

三

田山花袋が、松浦辰男に出会う前に作つた歌と、出会つてから作つたものをいくつか引いておきたい。初めのころはもっぱら漢詩の雑誌「顕才新誌」に、しだいに「志がらみ草紙」などの雑誌に、田山録弥の名で題詠を投稿した。

五月雨にあさかのぬまの水こえて人のあやめにかゝる今朝かな（菖蒲）
田山録弥「顕才新誌」明治十九・七

かやりたく賤がふせやの夕暮へ身をうもれ木の里にぞありたる（蚊遣火）
同 八

ときの間にそれともしらず過ぎゆきて軒端にのこすたきつせの音（夕立）
同 九

小倉山時雨ふりけりあすよりハいろやますらんみねのもみちは（秋時雨）
同 十二

嵐ふく嵐の山の名にしおふ音さへ高く降る時雨かな（山時雨）
明治二十・十二

散残る花をハ己が物顔に風にぞ夏を知り初めにける（首夏風）
明治二十一・七

うめが香の闇までかよふ春の夜は我たまくらもゆかしかりけり（春枕）
「志がらみ草紙」明治二十五・四

うのはなのさきそめしより夕闇もしらぬ垣根となりにけるかな（卯花）
同 五

なつかしき人のわかれにあひしより世をいとふ身となりけるかな（厭世）
明治二十六・六

山川のきよきながれにやどりけりわか葉をいでしなつのよの月（河上夏月）
同 七

あさな／＼かぞへてまちし朝顔の花はさかりになりにけるかも（朝顔盛）
同 九

「志がらみ草紙」の方は、松浦門下で「紅葉会」を結成し励んでいたころのものだが、いずれも歌集には収められてい

ない。「穎才新誌」に投稿した作品と比べると、調べが柔らかく人情味のようなものが匂い出ている。視線を低くして「生活」を詠む」ことを信条とした、師松浦の影響によるものだろう。そのうえで、明治二十七年、北村透谷追悼の一首「世のはたのしきものをあはれ君なにをいとひてひとりゆきけん」が生まれたのである。

同じころ、十代の樋口夏子は次のような歌を作っていた。今から見ると微差とは思えない歌柄のなかにも、その後の二人を分ける作風の違いが認められる。

渡し守よべどこたえず河霧に声さあつゝむ隅田のあけぼの (河辺霧) 夏子 明治十九

冬くれど風のさへらぬ谷かげに残る紅葉を見いでづるかな (尋残紅葉) 同

庭の面の木々は残らず散はてゝさへるくまなし冬の夜の月 (庭上冬月) 同

朝風にたゞよふ軒の薄雲は宵の蚊遣の名残なるらん (朝蚊遣火) 明治二十

茂り合ふまこもが中にニッ三ッ菖蒲之花の咲出にけり

(花菖蒲)

同

花菖蒲の一首は素直に作られているが、順に、「声さあつゝむ」「風のさへらぬ」「さへるくまなし」「たゞよふ軒の

薄雲は」などは、見立てに理知が働いている。田山録弥の十代のころの歌に比べると、新鮮なイメージを感じさせる一連だ。縁語や序詞、係り結びなどの定まりを超えて、自在な比喻としても読める。また、一首一首に、小さな物語が潜んでいるように感じられる。それこそ、松浦師に出会う前の花袋の歌は、不自由な時代のなかで「あゝした不自由な文章を書いた」とも言えそうな作風といっている。

四

同じ旧派の師に出会って、一葉は、中島歌子から「志」と「機知」と「風雅」を、花袋は、松浦辰男から「生活」と「風雅」を学んでいた。だが、花袋の周辺には、歌子の周りにいる歌人や貴婦人たちがかもしれないす優美な退嬰感はなかった。三宅花圃が書いた歌壇小説「歌人」(明治二十五年刊)『みだれ咲』所収 春陽堂)に展開される、「此節売出しの和歌の大家、某大人の発会として、けふしも借切の某様なる奥二階、上席には、半紙ふたつに折て四ツたゝみにしたのを、左の手に持、筆とつた右の手で、おとがひをさゝへゝ」などの、退嬰感に満ちた歌壇状況とは無縁であった。一葉は優美な退嬰に浸りながら、貧しさと戦っていたのである。

一葉と花袋、まったくの同世代ながら、あたかも無縁であるかのようにあった二人の作家だが、その文学の源泉は旧派和歌だった。一葉が保ったものと、花袋が切り捨てたものに、明治という時代の豊かさと貧しさが浮かび上がってくる。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

12

佐伯裕子

一

樋口一葉が、「花ごもり」「闇夜」「大つごもり」を「文學界」に発表したのは、日清戦争の起こった明治二十七年のことである。同年五月に朝鮮東学党の蜂起があり、八月一日に清国に対する宣戦の詔勅がくだる、開国日本にとって一大転換期にあたる年であった。東学党が蜂起した五月には、「文學界」の北村透谷が二十七歳で自殺しており、同月に一葉は住まいを丸山福山町に移している。小説家、樋口一葉にとっても、「奇跡の作家活動」が始まる年であった。

戦争の起こる数カ月前、「廿七年三月／塵中につ記／夏子」と記された日記に、一葉は高揚した文章を記した。ここから日本国の現状を憂えたものである。

おもひたつことあり うたふらく

すぎかへす人こそなければ敷島の

うたのあらず田あればにあればしを

いでやあればにあればは敷島のうたか道徳すたれて人情か

ミの如くうすく朝野の人士私利をこれ事として国是の道を講ずるものなく世はいかさまにならんとすらん かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ぶまじきをしれどわれは一日の安きをむさぼりて百世の憂を念とせざるものならずかすか成といへども人の一心を備へたるものが我身一代の諸欲を残りにこれになげ入れて死生いとはず天地の法にしたがひて働かんとする時大丈夫も愚人も男も女も何のけぢめか有るべき 笑ふものハ笑へ そしるものハそしれわが心はすでに天地とひとつに成ぬ わがこゝろざしは国家の大本にあり わがかばねは野外にすてられてやせ犬のゑじきに成らんを期す

荒れているのは敷島の歌の道だけだろうか。道徳、人情もすたれて、ひとかどの人士も私利に走り、国家の道を講ずる者もない。甲斐性のない女子が何を思い立っても及ばないのは分かっているが、私は日々、後々の世の事まで深く考えている。我が身一代の諸欲を投げうって、死生をいとわず天地

の法に従って働こうとする時、賢人も愚人も男も女も区別はないだろう、わが志は国家の大本にあるのだから……、と高らかにいう。挙げ句に、自分の骸は野に捨てられて犬の餌食となることを望む、とまで言い切っている。危機的な時代の句い、「戦争」の予感に満ちた一文といつていい。

一葉が雑誌「かきあつめ」(同二十七年)に取り上げた、中島歌子の師、加藤千浪の一首「恋にのミ誠の道は残りけりミちてふ道は名斗なぐちのよに」が思い合わされる。この千浪の歌は、日清戦争に寄せる山田美妙の新体詩を雑誌に書写した際に付されたものだった。千浪の一首は戦時下に筆写されたのだが、先の一葉の歌「すきかへす人こそなけれ」は、日清戦争が勃発する五か月前のものである。このように、さががけて国を憂える日記を書いた一葉に、わたしは、外地に赴いて初の特派員となった半井桃水の影響を重ねている。

先の日記から、しばしば「かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ぶまじきをしれど」の箇所が引用され、一葉の女性としての自覚のあり方が言及される。だが、この一文は、「大丈夫も愚人も男も女も何のけぢめか有るべき」の方に重きを置いたもののように読める。「志においてはみな同等」という、近代的な平等主義とも異なる捉え方にこそ、女性一葉の新しい時代観が窺えるのではないだろうか。

二

同じ明治二十七年三月頃の野々宮菊子宛書簡に、一葉が菊

子に歌を教えているものがある。菊子は、一葉の桃水との別離にあたっての唯一の理解者だった。その菊子にも、前年に婚約が破棄された事件があり、一葉は友を気遣う手紙を出した。

手紙のなかに、「涙ハ斯道に唯一のたからに御座候 申すまでハ無けれど東西古今に渡りて英雄豪傑さてハ大家名流のあとをとひ給へ いづれも涙の後の出来事に御座候はずや……」という箇所が出てくる。悲しみに流す涙こそが宝となる「斯道」とは、「敷島の道」すなわち「歌の道」のことをいっているらしい。先に引用した生きのいい愛国の情のうちに、歌人であれば流す涙を宝として歌を作ろう、という思いが潜んでいたのである。

小説を本格的に発表し始めた明治二十七年に、一葉は「涙は歌の道に唯一の宝」という考えを一方でもった。その「歌の道」が、いきおい「国家の大本」に重ねられていく。そうして、日清戦争当時にメモされた千浪の一首、「恋にのミ誠の道は残りけり」の「恋の道」に至りついたのである。日清戦争という非常時に行き遇った一葉は、「国家」のために死ぬことと、「敷島の道」「恋の道」に死ぬことと、何の変わりがあるかと考えるようになっていた。

三

明治二十三年に「国民新聞」を創刊した徳富蘇峰が、エッセイ「還暦を迎ふる一新聞記者の回顧」(大正十一年十一月記、

「中央公論」で、日清戦争を回想している。従軍記者、国木田独歩が、提督丁汝昌の自害を報じたのも「国民新聞」だった。文人記者の典型的な感想であり、当時の気運をよく伝えているので、少し長くなるが、蘇峰の一文を引用しておく。

「いふまでもなく明治廿七八年の役は、日本の歴史にも、「国民新聞」の歴史にも、また個人として新聞記者たる予の歴史にも多大の關係がある。（略）予は東京の文壇に於て、一方には頑迷なる保守党、他方には藩閥政府を対象として奮闘した。藩閥政府といふ中には、武断派もあつたが、また伊藤公一派の文治的官僚派もあつた。然るに、一方には条約改正の問題が盛んになり、他方には支那との關係が緊張し来るに際して、予の對象は更らに外国に転じて来た。」（「日清戦争と予」）

「打ち明けていへば明治廿七年頃までには「国民新聞」は若干の貯金をしてゐた。印刷器械を購ふために、また社業を拡張する為に、若干の準備もあつた。併し一度戦争となると、国家あつての新聞で、国家と存亡を共にするは此時であると考へたから、予は殆んど最後の一銭まで使用するを躊躇しなかつた。福沢翁は開戦の初め軍費として献金せられたが、予は軍事上の通信に金銭を費すは献金も同じ事であると考へ、其積りで多くの通信員を派遣し、予自らも広島に出張して、自ら通信を指揮してゐた。予の新聞記者としての四十余

年間に於て此時程愉快な事はなかつた。」（川上大将と予）

興味の対象は外国に向かつていき、国家と存亡を共にするのは今であるから、最後の一銭まで使いきるをいとわなかつた、という。そして、「此時程愉快な事はなかつた」と回顧するのである。海彼に向かつていく姿勢といい、すべてを投げうっても国と存亡を共にしようとする行為といい、文人記者としての典型的な思いが素直に回想される。文中の福沢論吉は、この時期、「時事新報」を発行していた。

蘇峰の回顧を読んでいると、身体が弱かつたにも関わらず、従軍記者になることを切望した正岡子規の気持ちに想像できる。後になれば、それは「明治ナショナリズム」としてくくられるのだろうが、時代の空氣のただなかにあつて、名付けようもない心持が湧いたにちがいない。「ここにこうしてはいられない」、そういう氣運とでもいうのだろうか。半井桃水が、先駆けて朝鮮国の特派員になつた文人記者魂も、蘇峰の回顧に重ねて思われるのである。

徳富蘇峰が、「国民新聞」を駆使して日清戦争に参加した姿勢には、「戦争」を善悪で捉える思想は窺えない。清国との戦争によって、「日本国」という国家意識の輪郭をいよいよ濃くしたのである。そういう空氣のなかにあつて、一葉の憂国の思ひは醸造されていた。

四

また明治二十七年は、札幌農学校出身の地理学者、志賀重

昂の『日本風景論』が出版された年でもある。十月に刊行されたのだが、ちょうど日清戦争の勝利と三国干渉という時期と重なってベストセラーになり、日本人の景観意識を大きく転換させる本となった。

志賀は、日本の風景の美の特質を表すのに、風土を構成する科学的な要因を列挙した。「氣候、海流の多変多様なる事」「水蒸気の多量なる事」「火山岩の多々なる事」「流水の浸蝕激烈なる事」の四項目からなる、日本初の登山案内書でもあった。それまで「春の霞」などと、ぼんやりした表現をもちいた風景描写が、「火山と海流により水蒸気が立ちのぼる」という叙述に変わるとなると、日本の景観意識は一転してしまふだろう。

ベストセラーになったのだから、一葉は噂に聞いていたかもしれない。樋口家の蔵書のリストには入っていないし、「文學界」の青年たちの話題にのぼったのかどうか、定かではない。読んでいたか、いなかったか、文学とは関係のない本として興味の外であったのかもしれない。だが同年に、内村鑑三が「日本のラスキン」(明治二十七年十二月「六合雑誌」)と志賀を名付けた本である。あるいは何らかの関心は抱いたかもしれない。

志賀は、日本の景観を表現してきた和歌などを痛烈に批判した。

「既に然り、日本は火山国たり、是を以て古来歌人の好み

て吟詠する所、大概は火山岩ならざるなし。然れども日本の歌人は単に「山」として火山岩の山岳若くは活火山を吟詠し、若くは風懷をこれに寄托せしめにして、その火山岩の魁偉変幻なる所、活火山の雄絶壯絶にして天地間の大觀を極尽する所に到りては、いまだこれを写さざるなり、詩客、画師、彫刻家もまた多く然り、これ千古の遺憾。」

つづいて、隠岐の火山^{ササノ}をうたった後鳥羽院の「^{こはし}」のおきの^{ささの}吹しをり嵐しをれてもの思ふ頃」などを挙げ、和歌が、真の景観を「写」していないと指摘する。

内村鑑三は、このような視線は、「自然」に美を読む眼を開いた、イギリスのジョン・ラスキン著『近世の画工』に匹敵すると評した。この「自然」を見る堅固で科学的な視線が、新しい時代の新しい「写生」の意識を開いたのだらう。

志賀重昂は、地理学を追求することは「国益」であると捉えていた。日清戦争に勝利した明治二十七年という時点において、漠然とした日本主義や美意識とは異なる、確固とした日本美と、実地的なナショナルリズムが求められていた。このような意識を、対西欧という視点に据えてみたとき、『日本風景論』がベストセラーになった理由が理解される。

この時、一葉の心意気は、「恋と歌の道」と「國家の大本」に志すことを、天地において同等に捉えようとしていたのである。

短歌表現とその時代

13

佐伯裕子

一葉に導かれて

面白い。どのような言文一致歌が繰り広げられていたのか。

当時の様相が伝わってくるので、「明治大正和歌史」から林麿臣の歌を引用しておきたい。

待鶯

竹の林梅の園にも鶯のなかぬ時にはなかななりけり
ウメニキテミ。 薮ニマドヘド。 鶯ノナカナイトキハ。 サ
テナカスワイ

新樹

隅田川今年は花にこざりしを若葉が蔭ぞ三度間ける
スミダ川。 コトシハ花ニ。 コナンダニ。 葉桜ニナリ。 三
度キタワイ。

樹下納涼

水見れば流れも涼しき声きけば蟬も涼しな木蔭れの宿
オヒシゲル。 木カゲノ宿ハ。 水ノミカ。 蟬ノナクネモ。
ヤハリ涼シイ。

萩の舎の歌人、三宅花圃が、小説『薮の鶯』で口語体を試みたのは明治二十一年のことだった。人男「アハハ。このツ、レデースは。パアトナアばかりお好きで僕なんぞとをどつては。夜会に来たやうなお心持があそばされぬといふのだから 女「うそ。うそばかり：Vという出だしに、人々は驚愕した。この本に刺激されて、一葉は小説を書くとう決心したのである。

明治二十一年、一葉は十六歳で、その前後といえ、日本語の文体がさまざまに乱れ、模索された時代だった。その中の一つに、拙いものではあるが、和歌の口語体化を試みた歌人がいた。本居宣長門の国語学者、林国雄の孫にあたる歌人林麿臣である。

林麿臣の「言文一致歌」（東洋学会雑誌・明治二十一年三月号）については、斎藤茂吉が「明治大正和歌史」（昭和六年・改造社発行「短歌講座」第一巻「歌史歌体篇」）で取り上げている。稚拙な口語訳歌を、茂吉が興味を持って引用しているところが

聖臣は、自分の和歌に、口語に直したカタカナの歌を添えている。なんだか微笑ましい訳であるが、聖臣の意図は、普段使っている口語で和歌を作ろうとする新機軸にあった。当時において考えると、やはり斬新な試みだろう。

茂吉は、「後年、鉄幹の新体詩、子規の和歌などに口語体があり、青山霞村、西出朝風等が、口語歌を創始したと請ふといへども、その先駆は既にこのあたりにもあつたのである」としながら、だが、一般化せずに終わつたと記している。

基本が和歌の発想なので、単純に口語に言い換えると稚拙なものになってしまう。成熟した旧派和歌から見ると、噴飯ものであつたことは容易に想像できる。「サテナカヌワイ」「コナンダニ」「三度キタワイ」……。逆に、こういう平俗語から発想する方向もあつたように思うが、聖臣の熱意は薄れて、それきりになった。

明治初年、日本語のローマ字化を推進した「明六雑誌」のころから、「現在の言葉で、現在のこと」を叙述しようとする試行錯誤が行われてきていたのである。こうしてみると、キリスト教の賛美歌の邦訳作業が、いかに突出したものであつたかと思われない。それゆえに、いわゆる「旧派」といわれた和歌の成熟と洗練は、対峙する日本文化の極みとして、逆に重要な位置を占めていたのである。

二

中島歌子の萩の舎は、小石川区水道町十四番地、安藤坂の

中腹にあり、隣りに、旧水戸藩の定宿「池田屋」が建っていた。池田屋は、ペリー来襲以後の沿岸警備で窮した川越藩の財政を支えた、歌子の実家の「網谷」が営んでいた宿屋である。萩の舎は二階建てで、十二畳ほどの教場があり、その床の間にいつも文人画の掛け軸と花が活けられていた。

歌子は旧名を「とせ」といったが、明治十年に、師事した歌人、加藤千浪が没して独立したとき、歌子と改名している。八田知紀の門弟で桂園派の高崎正風の庇護を受けていたので、名門の姫様や令嬢たちの入門者が多く、稽古日には、送り迎える黒塗りの金紋の人力車がひきもぎらなかつた。

そういう萩の舎を思えば、樋口一葉の歌の出版を考えると、王朝文学に通じるような、瀟洒な作風に目標をおかっていたことが実感される。

『樋口一葉全集』（塩田良平・和田芳恵・樋口悦編纂 筑摩書房 昭和五十六年刊）の補注に、中島歌子の歌風に寄せた興味深い一文が書かれていた。

「加藤千浪は、村田春海に学んだ岸本由豆流の門下で、即吟に長じた。『萩園詠草』（稿本）、『詠史百首』『統詠史百首』など遺している。歌子も伊東祐命も江戸派の系譜の中にあるわけであるが、夏子は晩年まで歌子を桂園派と考えていた。そして、歌子も夏子も景樹の影響を強く受けていたのも事実である。」

伊東祐命は、歌子と恋愛関係にあったといわれる歌人だ。

このことで、さらに興味深いのは、長沢美津が、『女人和歌大系 近代期前編』（昭和五十三年・風間書房）で、「（一葉が）師とした中島歌子は賀茂真淵の系統である村田春海を師とする江戸派加藤千浪門である。江戸派は纖巧洒脱な風を持つ江戸庶民の雅情を詞調に托する流派である。いわば堂上派、桂園派に併行する歌風である」と断言していることだ。

本来の系譜で言うならば、確かに歌子は江戸派の流れなのである。江戸派という、「江戸庶民の雅情を詞調に托する流派」を受けている歌子なのに、『樋口一葉全集』の補注によると、一葉は終生、歌子を桂園派であると信じていたという。日記などから考察されている補注なので、一葉が、歌子を桂園派と思っていたことは事実と考えていいだろう。一葉の思い込みもあっただろうが、歌子が、あえて江戸派であることを称揚しなかった、と考えるほうが自然のようだ。

一葉が庶民の眼で吉原の哀感を描いた根源に、江戸派の影響をも見ようとした長沢美津の意図と、実際との小さなずれは、意味深いものを覗かせている。歌子を庇護した高崎正風は、明治二十年代には御歌所ごかしょに一大勢力を持つようになった歌人だった。堂上派の八田知紀の門弟で、桂園派であった正風の庇護のもとで、萩の舎は繁栄した。とりたてて庶民的な風を打ち出さなかった歌子に、その身の処し方の分厚さがかがえるのである。

かりに流派を問題にするのであれば、歌子と一葉が好んだ

桂園派の香川景樹は「古今風」の歌を理想としていた。だが、景樹の歌論を受けながら、八田知紀は「万葉風」を目標とした。知紀の門弟、高崎正風の庇護のもとにあっても、歌子は万葉風に向かうことはなかった。「江戸庶民の雅情」を理想とした加藤千浪に直に師事した歌子だが、身辺には王朝的、御歌所的なオーラを被せておきたかたのではないだろうか。だが、歌子本来の歌風、ことに恋の歌は、江戸庶民の洒脱さをまもっているもののように思えるのである。

三

いったいに、江戸期から明治期にかけての和歌の流派を見分けることは難しい。どれも同じに読めてしまうのである。それこそ美意識の「微差」に凌ぎをけずっていたといえる。

そういう「微差」を生きる旧い流派には、確実に衰微が兆していたのだが、歌子の周辺からは、新しい歌を見いだそうとする機運は起こらなかった。中島歌子をめぐるある種の退嬰的雰囲気に関しては、歌の門弟である三宅花圃が暴露小説「歌人」に詳しく描いている。

「歌人」は、『薺の鷲』の四年後、明治二十五年に出版された『みだれ咲』（春陽堂）に収められており、筆名が、夢借むせり舎しや丁々子ていざんことなっている。旧派歌人の内幕を描いた暴露小説の走りで、おそらく萩の舎をめぐる歌人を戯画化したものだろう。花圃が名を変えたのは、内容が事実在即していたせいではないだろうか。高崎正風、伊東祐命、そのほかさまざまな

旧派歌人の生懸として、腐敗した様子が描かれているので、一部を引いておきたい。

内幕

四五年以前ことなりし、御歌所の誰かれか、撰集されし十四大家集とやらいふのが発兌になつた当時、大家の二字を難じて、おほきな家に住居する人をいふかとの論ありしときゝしが、もとより大家とかずまへらるゝ学力もなにもなければ、かの先生、口前のうまいのと、囲棋が段と打てるのと、酒の席が上手なので、多くの華族方紳士連に引立てられ、今では何のや某大人ともてはやされ、りうとしたがまへ玄関つき、頗る大きな住居を占め、榮耀なるくらゐき、門人も少しはあれど、月謝計りであのやうにとは、誰れも張る不審紙、其はず、地所の売買、妾の周旋、貸金の取次、書画骨董の世話にかすりを取り、内證の収入、がうんとあるのと、近所のものは噂せり……（花圃「歌人」）

数年前のことだが、とほかしながら、御歌所の歌人で十四大家集に選ばれた歌人を揶揄している。「大家」とは、大きな門構えの家に住むことなのか。もとより学もないのに、口が旨く付き合いが上手なだけで華族たちにもてはやされたにすぎない。榮耀榮華を見せているが、門人は少なく、何による榮華かと探れば、地所の売買、妾の周旋などの収入による

ものだ、とは近所の噂だが……。

口を窮めて誹謗したあと、さらに、もとは旧幕のころ、御家人で小給の士であつた歌人にすぎない。発句の点取りでは、端唄の作り替えなどで素人仲間にも鼻を高くしていたのだ、などと、止めどもない雑言がつづいていく。むしろ歌が引かれることもなく、小説は、さまざまな場面で、飲み食いする「大家」と女性との絡みに終始するのである。

明治二十五年の発表当時は、誰がどの歌人であるか、うすうすと想像がついたのであらう。当時の萩の舎と、中島歌子の周辺の歌壇状況が浮き彩りにされている。批評性は強いが、表層的な暴露小説となっており、腐敗を腐敗として抉りだし、改革しようとする意識は見られない。

そうとうに揶揄しながらも、花圃は、彼ら旧派歌人が和歌の本流であるという意識を拭いさつていくわけではないのである。むしろ、本流であり、権威と信じるからこそ、カリカチュア化できたのであらう。王朝的な雅びと庶民文化、文語と口語、そこに横たわる価値の差を自然に感じている、そのうえでの批評だった。小説「歌人」の力の弱さは、ひとえにその点にあった。

ことと歌においては、花圃のそういう姿勢は、樋口一葉にも自然に備わっていたように思われる。だが、拙い林麴臣の口語歌を含め、明治の新時代において、歌の世界も激しく動きたしていたのである。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

14

佐伯裕子

明治二十八年初夏、神田にコレラが発生した。当時の衛生局長が、東京府知事と警視総監に、神田での発症と流行経路を報告し、「清潔法」施行の急務を訴えた官報（明治二十八年虎列刺流行紀事・『都市史資料集成・第1巻 日清戦争と東京』東京都発行 平成十年刊）が残っている。

「五月廿四日神田区表神保町ニ止宿スル陸軍工兵少尉——ノ発病ヲ初メトス同人ハ数日前マデ広島ニ在リテ帰京シタルモノニシテ当時広島ニハ已ニ発病者アリタレバ同地ニ於テ感染シタルモノタルハ疑ヒナキガ如シ……」

名前は伏されているが、広島から帰京した陸軍少尉を発端として、次々にコレラに感染した状況が告げられる。大勝利を収めた日清戦争だったが、清国での戦争中、軍は疫病に苦しまされ、病没した兵士は相当数にのぼっていた。

明治二十八年三月二十二日、陸軍の輸送基地宇品港で水上警察所員二名がコレラを発症した、という「めさまし新聞号外」が配られた。日本国土へは、広島宇品港への清国からの

帰還兵によってコレラがもたらされたのである。広島、岡山
よりから東京神田まで、コレラは短期間に広く流行した。

同年四月七日号の「時事新報号外」では、「虎列刺我軍を犯す」として、千人単位の発症と死亡が報じられた。軍の衛生管理が整備されていなかったため、赤痢、コレラ、マラリアに罹った兵士たちは十余万名にも達した。戦争では勝利したが、疫病で兵力を失うという衛生面での弱点が自覚された。そのことは、日本の近代化、都市化を果たすうえでの重要な課題となった。

この時の東京のコレラ患者は、神田から麻布、渋谷、日本橋、築地、小石川、浅草へと広がっていった。先に挙げた官報によれば、発病者周辺の家屋、什器、下水などに、大々的に石灰消毒がおこなわれたらしい。だが、東京中にコレラが大流行した明治十九年の騒ぎとは違って、患者は少人数に止まった。広島や岡山のような打撃的な被害には至らずにすんだ。それは、十九年の痛手を忘れず、都市としての衛生機能を整えてきた成果だった。

二

小石川には中島歌子の萩の舎があり、樋口一葉の生活範囲のなかにもコレラ騒ぎがあったと思われる。だが、一葉の日記「水の上」（明治二十八・五・二十三〔六・十六〕）には、明治二十八年五月二十五日、二十七日と小石川の萩の舎に出向いた記述はあるが、コレラについては書かれていない。

「二十五日 小石川けい古なり 出がけに大橋君へ小説原稿を送る」

「二十七日 中牟田つね子ぬしが数よみ（筆者注・数詠）の会小石川にて催す成き」

だが、翌五月二十八日に、「此日芦澤芳太郎より書あり台湾総とく附属の身と成ていよ／＼かの地へ趣くべく成しにこれよりハ病氣と戦争の二つをこゝろミる覚悟なりなどいひおこす」と記入されている。

新しく設けられた台湾総督府の近衛師団に配属された、母方の従兄で山梨在住の次男、芳太郎が、最初に「病氣」を覚悟して、その地に赴く由をしたためた書簡である。日清戦争の勝利のあと、三国干渉に遭った日本は台湾作戦に着手していた。軍は宇品港から台湾に向かったのである。四月八日の号外、「虎列刺我軍を犯す」とあわせて読むと状況がよくわかる。軍人として外地に行くこと、台湾総督府付きになることは、「病氣と戦争」を二つながら覚悟するに等しかった。一葉は、神田、小石川など、身近のコレラ発症事件には

触れずに淡々と書き記すのみだが、「病氣と戦争」の問題の重さには心を止めていたようだ。

当時の台湾総督府に関しては、三宅花圃の夫、三宅雪嶺が、自著「雪嶺自伝」（昭和十一年一月から「婦人之友」に連載）で、次のように回想した。

「自分の兄は軍属として従ふことになった。（中略）台湾に総督府が開けるので、それならば働き甲斐があるとし、神経衰弱と見えたのかどうやら元氣になり、台南の暑いところで勤務した。ところがコレラ病に罹り、高島副總監が人胆（じんたん）を与へたけれど、その効がなくて歿した。（中略）それでもコレラ病は戦死扱ひにされるので、扶助料は遺族に下った。」

氣候風土の違いから、病氣で倒れる兵は多かった。雪嶺の兄は軍属であったとはいえ、「コレラ病は戦死扱ひ」という、当時の切迫した状況は記憶されているだろう。病氣は、軍部にとって最強の敵であった。戦う前に疫病で倒れてしまう兵を救うには、ひとえに疫病対策と衛生管理の徹底を遂行するよりなかった。

三

「コレラ病は戦死扱ひ」ということを、一葉は知っていたのだろうか。「病氣と戦争の二つをこゝろミる覚悟なりなどいひおこす」と、芳太郎の手紙の感想を記しているばかりである。いったいに、一葉は病氣に関して恬淡としたところがあるように思われる。

例えば、一葉と一歳違いの田山花袋が、十五歳の明治十九年に、コレラが東京で打撃的に流行ったときの恐怖を回想したもの(『東京の三十年』)を読むと、いっそう一葉の恬淡ぶりが浮き上がってくる。

「……其年はコレラが流行つて、何処に行つてもその噂ばかり、避病院に送られる吊台つうだいがあとからあとへと来るやうな光景で、魚類などは一切食ふことが出来なかつた。黄い紙、立番の巡査、さういふものは到る所で見られた。外になど歩いても、いつコレラに襲はれるかも知れないので、私の少年の心は絶えずそれにおびやかされたのを覚えてゐる。」

花袋の、こういう恐れ方は、一葉の記述には見られない。そのことは、和田芳恵が指摘した、従兄、樋口幸作の病氣のことにも関わっていたのだろう。

和田は、幸作の病氣についての資料を慎重に調査した結果、「そういう隔たった生活をしていても、血縁であつたから、幸作の病氣は、一葉一家にとって重大な問題になつた。癩病は遺伝ではなく、伝染病であることは、近代医学では決定されているが、しかし、長いあいだ、遺伝性と云われてきたために、理屈ではわかっても、感情的にはすっきりした觀念になつていないようだ。」と『一葉の日記』(一九九五年・講談社文芸文庫)に記した。

和田説は、一葉が丸山福山町に移つて、「大つごもり」「にぎりえ」「十三夜」「たけくらべ」などの秀作を生み出した

契機として、幸作の病氣を考えているのである。

山梨の樋口の本家は、長男だった一葉の父が家を出て武士になつたため、弟の喜作が継いだ。だが、一葉の父の死の一年前に喜作が死に、妻のまんも明治十六年に死んでおり、樋口の家は、残された息子幸作とその妻、娘のきよ、末の妹のくらが守つていた。幸作の病氣のことで、一葉を頼つて上京したくらは一葉と同年だった。

日記によると、一葉が、幸作の不意の死を知らされたのは明治二十七年七月、二十三歳の年のことであつた。

同年六月になると、「水の上日記」(明治二十七・六・四―同七・二十三)に幸作の病氣への杞憂が出てくる。

「樋口幸作兄弟此地に四月の半より来たりて桜木病院にありけるよし 二十六日の夜おくら来りて当時の病状をかたる」

また七月一日には、さりげなく芦澤芳太郎の久しぶりの来訪を記したのち、次のように書き記した。

「十時頃成けん 桜木丁より使者来り幸作死去の報あり 母君驚愕 直に参らる からハその日寺に送りて日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ 浅ましき終をちかき人にみる我身の宿世もそざるにかなし 二日 早朝母君およびおくらと共に日ぐらしに骨ひろひにゆく 山川程を隔てたる叔甥のおなじ所に烟とのぼるハこものがれぬ宿縁なるべきにや おハしまさばと、今日ハなき人に成し父上嬉しとおもふ」

一葉母子は、幸作兄弟にできるかぎりのことをしてあげたようだ。幸作の突然の死に、驚愕した母たきと一葉。「日ぐらし」と書かれた日暮里村の火葬場で、骨を拾った様子が語られる。「母君驚愕」「我身の宿世」「のがれぬ宿縁」という言葉に籠められた思いは、やはり和田説の通りと思わざるをえない。天地が逆さになるほどの驚愕も、日記では、抑制に抑制を効かせた表現に止められているのである。

ちょうどコレラが流行する一年前の出来事だった。一葉の胸のなかに重く淀みつつける幸作の死、その事実と戦い、その恐怖を鎮めて日々を暮らしていたとすれば、世のコレラ騒ぎも遠い風景のようであったのだろう。

四

明治二十八年十二月に発表した小説「十三夜」のなかに、「チフス」に罹って幼女が死んだという一節がでてくる。また、「経づくえ」にも「室扶斯患者」という言葉が使われている。だが、「コレラ」を登場させた小説は、調べた範囲では見当たらなかった。コロリと死んでしまうところから生まれたという病名に対してか、あるいは言葉の美意識の問題からか、いずれにしても何らかの抵抗があったのではないだろうか。言葉への繊細なこだわりが感じられるのである。

一葉の生涯の、事実上の最後の選歌集『ミヤき野』のⅡに、二十七年の夏以降から二十八年十二月までの歌が厳選されて収められている。萩の舎を離脱して一年を経て、また萩の舎

の助教となって復帰してからのものであり、時期的に、樋口幸作の死の直後からの作品である。すべて題詠であり、「池夏月」「口なしの花」「門田早苗」「夏滝」など、優雅で古典的な題が並ぶ。二十七年夏のころの歌に「日ぐらし」という題の一首がある。

日ぐらし

おき出るあしたも早くなく物を日ぐらしとのミいかにいふらん

この歌から、日記の一節「からハその日寺に送りて日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ」「早朝母君およびおくらと共に日ぐらしに骨ひろひにゆく」が思われた。たまたま出された題が「日ぐらし」であったのだろう。蟬の名前であることを承知しながら、その題の向こうに、「日ぐらし」の里の日暮里村の火葬場で、骨を拾いあった血族の姿が見えていたにちがいない。

朝早くからも鳴く蟬なのに、日暮れを表す言葉「日ぐらし」とだけ呼ばれるのはどうしてだろう……。

「日ぐらし」という言葉へのこだわり、憐れで儚いものへの思いの寄せ方に、わたしは日暮里での一族の悲嘆を重ねて読む。一葉は、そのような古典的な方法をもって物事を歌に表したのである。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

15

佐伯裕子

の歌のあらず田荒にけりあらずきかへせ歌の荒樸田(あらすけ)」(『桂園一枝』を本歌として、短歌革新への気概を見せている。

敷島のうたのそらす田すきかへし昔しの春へたれかミす
べき
(寄歌述懐)

古風な詠題の流麗な歌ばかりを厳選した『ミやき野』は、樋口一葉の最後の選歌集といわれる。そのなかに、「日ぐらし」という題の一首、「おき出るあしたも早くなく物を日ぐらしとのミいかにいふらむ」がある。時期的には、従兄弟の樋口幸作が死んだ明治二十七年の夏に作られた歌だ。当時の日記には「日ぐらし」と記された日暮里の火葬場が出てくる。幸作の宿命的な病いによる急死を悼み、一族で骨を拾いあった「日ぐらし」の里、日暮里での悲愁感が重なって読める一首である。

旧く優美な「題」に寄せて、流麗な古典調の歌を作る。一葉は、そのようにして物事を歌にした。切実な恋であらうと、また驚愕的な身内の事件であらうと、そういう現実を直截に歌のなかに表そうとしなかった。小説で目ざましい躍進を遂げる最晩年にいたるまで、歌においては旧派和歌の域を出ずに終わったといえるのだろう。

だが、同じ『ミやき野』で、一葉は、香川景樹の「しき嵐

この歌の数カ月前、明治二十七年三月の日記「塵中につ記」にも、「すきかへす人こそなけれ敷嶋のうたのあらず田あれにあれしを」と詠んでいる。「いでやあれにあれしは敷嶋のうた斗(はか)か道徳すたれて……」と嘆き、「かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ぶまじきをしれど」といいつつも、国のために働こうという決意表明をした一節である。

歌の道の荒廃に、よほど心を碎いていたにちがいない。日清戦争の起こる数カ月前のことであった。日記では、歌の道の荒廃をいうばかりだった歌が、数カ月の間に、荒れた歌の道を鋤きかえして、昔日の春を見るのは誰なのでしょう、と変わっている。歌の革新への自負さえ、ほのかに感じられる

一首になったのである。

二

落合直文、与謝野鉄幹、晶子、正岡子規たちの新しい歌が誕生する前、明治二十年代後半にかけての歌の状況は、一葉にも「荒靡」と映るような混乱のなかにあった。ローマ字文を推奨する「明六雑誌」から始まり、新体詩、言文一致の試みなど、さまざまな試行錯誤が繰り返された歳月であった。そういう歌の変遷に関しては、斎藤茂吉の『明治大正短歌史』（昭和二十五年・中央公論社）での感想が面白い。旧派和歌に関わる感想が、いかにも茂吉らしい。

「旧派の歌といつても、兎に角香川景樹あたりが当時新派のつもりで詠出した歌風の名残であるから数多くの中から拾へば相当の佳作にも逢著するに相違なく、古今集以来の長い伝統で、気の利いた良い技巧をも認め得るのであるが、大体からいへば、生気が無く納まりかへつてしまつて、どうしても堂上人、富豪の弄び物といふ風のものが多い」。

景樹以降の歌を、「当時新派のつもりで詠出した歌風の名残」「富豪の弄び物」と断言するあたり、茂吉の本質的な姿勢がうかがえるだろう。

さらに、堂上派の八田知紀の「別れかねやすらふ程に咲きにけり妹がまがきの朝がほの顔」などを、「皆相当に好い歌」といいながら、「ただ、八田知紀の『別れかね』の歌の如きが当時から有名であり、従つてさういふ歌風を模倣するもの

が輩出して、その厭味と平俗とが人心に飽かれたときに、猛然として新派和歌の運動が起つたのである」と記す。そのうえで、「稽古不十分の新派和歌よりも稽古を積んだ旧派の歌によいのがあるが、併しこれは全部ではない」と、シニカルな眼差しを強調している。

茂吉のいう「稽古不足の新派和歌」としては、当時二つの傾向があった。一つは、新しい詠題によるものである。大久保忠保の『開化新題歌集』（明治十一年刊）から、茂吉は幾つかの用例をあげている。括弧内が「新題」である。

をみなへし尾花とふたつ争はばいづれがかみに立たむと
すらむ（男女同権） 鈴木重嶺

しかすがに忘れもはてぬ皇国ぶり箸ほしげなる人も見え
けり（西洋料理） 猿渡容盛

葦原のみずほの米にくらぶれば品はいたくもおとりぬる
かな（南京米） 星野千之

「題は新題で従来の題に比べて尽く目新しいものであるが、歌の実質は新しくは未だなつてゐない」という茂吉の感想を待つまでもなく、実にはほえましい素朴な歌である。

「新題」に関しては、今井邦子も『樋口一葉』（昭和十五年刊・萬里閣）で、出典は不明だが、新派和歌として数首あげている。ただ歌題の取り方が広がったただけのこと、という感

想は茂吉と同じである。邦子の引いた歌を挙げておく。

横浜にひそめる龍の雲を得て走ると見しは車なりけり

(汽車)

大畑弘国

語りごとあやしの箱にくりためて恋しきときのすさびに

ぞきく(電話)

滝村鶴雄

「電話」の歌など、機能を誤解しているようで、題が新奇なだけの新派和歌の稚さが偲ばれる。だが、題が新しくなると、それを入れる器に不満が生じてくるのは当然だろう。ひとたび新しさを求めだした気運が止まらなくなったことは、容易に想像できるのである。

もう一つの試みとして、器そのものを変えていく方向が考えられていった。前に言及した林麴臣の口語歌の試みがその一つである。「ウメニキテミ。藪ニマドヘド。鶯ノナカナイトキハ。サテナカヌワイ」「スミダ川。コトシハ花ニ。コナンダニ。葉桜ニナリ。三度キタワイ。」などという、試みを十分に尽くせなかった口語訳の歌があった。

以上、おおよそ二つの傾向で、試行錯誤が繰り返されていたのである。だが、新しさへの試みのなかで、詞書きと歌、物語と歌、日記のなかに挟む歌、そういう、文章との組み合わせを考えていたものは少なかった。

三

王朝時代に完成を見た文章と和歌の交響を、もう一度明治の歌に新しく蘇らせることができるのだろうか。和歌はさておき、もし、地の文章に新機軸が盛られたら、そのハーモニーはどのような新しさを見せてくれるのか。そういう面からの試みが考えられても不思議ではなかった。あるいはそのところに、「敷嶋のうた」を「昔しの花」に蘇らせる道として、一葉の考えがあったのではないかと思うのである。

日清戦争時の「丁汝昌」を詠んだ歌の出でくる、明治二十八年一月の日記『しのふくさ』を、和田芳恵は「長い詞書をつけた歌集」と評した。他の日記の随意さとは違って、文章と歌の組み合わせ方に神経がいき届いているのである。『しのふくさ』は、題詠の選歌集とも違う、完成された晩年の散文歌集とみていいのではないだろうか。

明治二十七年の暮れ、一葉は、流行作家の村上浪六から金を借りる約束をしていたが、音沙汰もなく年が明けてしまった。追いつまった自らの新年の思いを、勢いのよい、くだけていながら、ぎりぎりのところで品格を保った文章が活写していく。そういう、当時の下町の口調に近い「詞書き」を、歌に繋げていくのである。

「暗夜」などを「文藝界」に連載して、いよいよ文章が一葉のものになろうとしているころであった。『しのふくさ』の書き出しの文章と歌は次のように始まる。

浪六のもとより今日や文の来るとまぢてはかなくとしも
暮れぬ かしこも大つごもりのさわぎいかなりけん

まちわたる人のたよりへ聞かぬまに
またぬとしこそまづ来たりけれ

三日の朝年礼にとてなから井のうし門までおはしぬ 何
事もかざりをすてゝすがたもいたくおとろへ給ひき

ますかどみわれもとり出ん見し人は
きのふとおもふにおもがはりせる

聞こへし美男に而衣装などいつもきらびやか成し人なり
けるを

待ちわびた金の音沙汰もないのに、先に新年が来てしまつたという感想から始まり、年始に來た半井桃水の風姿を見て、噂の美男で華やかな着物をまとうていたのに、何と衰えたことか……と嘆ずる。歌は古風だが、嘆きとも皮肉ともつかない心理に踏み込んだ文章が、ストレートで皮相な切り口をのぞかせる。

となりに酒うる家あり 女子あまた居て客のときをする
事うたひめのごとく遊びめに似たり つね文かきて給は
れとてわがもとにもて来る ぬしへいつもかはりてその
かずはかりがたし

まろびあふはちすの露のたまさかは
誠にそまる色もありつや

いつも恋文の代筆を頼まれる一葉、その小女たちの相手の数は計りがたい。たまには、そのなかに本物の恋もあったのだらうか、とうたう。酒屋で働く小女を描く数行の文章から、皮肉な一首への展開へと移っていくのである。王朝時代とは反対の、少しはすっぱで風刺的な人生空間が生まれていて、巧みな構成になっている。

四

今から見ると、詞書きに当たる文章も古文のように読めてしまいが、一葉の時代はそうではなかったはずだ。勢いのいい口調の文章が、歌に新鮮で庶民的な空気を波及させている。長く公表されなかった日記だが、ここには、旧派和歌という枠では括れない空間が広がっているのではないだろうか。歌自体が新しくなったわけではないが、庶民的感情の雅びを求めたという「江戸派」の歌風が、文章のなかで生かされたように思われる。

『しのふくさ』の次にくる計画として、一葉は、長い詞書きのある恋物語歌集をもくろんでいたらしい。『樋口一葉全集』に収録された、「詞かきの歌」という題の未完に終わった雑記に構想の片鱗が残っている。一葉は、『伊勢物語』のような歌物語を、現代に蘇らせたかったようである。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

16

佐伯裕子

樋口一葉が和歌を作り始めたのは、明治十七年、十二歳の年であった。その数年のうちに、一葉は日記に次のような疑問を投げかけている。

「おのれ日々日記を作るに言文一致なるあり 和めかしきあり 新聞体になるあり かくハ却りて文の為に弊害とのみなりて利は侍らずやあらむ……」(明治二十五年三月二十四日)

日々の日記を記すにさえ、言文一致や和文、俗流の新聞体が入り混じってしまう。それは、却って文章のためにならないのではないだろうか……。このような切実な問いを、和歌の師である中島歌子に真剣に尋ねている。

この日記を書いた明治二十五年ごろには、一つの文章を書くにもさまざまな書き表し方が混在するようになっていた。本格的に小説を書くこうと試行錯誤していた一葉の文章にも、開化のもたらした混乱は浸透してきていたのである。

では、和歌においては、文体の問題はどうだったのだろうか。

か。

堂上派といわれる宮中御歌所に関わる歌人が歌壇の主流であった明治初期から、ひとり和歌だけが伝統を守っていたわけではなかった。「今日の言葉で、今日の歌を」という意識が芽生えていたのも事実であり、明治三十年代になって、近代短歌が突然のように生まれたものではなかった。そのことは、斎藤茂吉も『明治大正短歌史』(昭和二十五年刊)で、「稽古不足の新派和歌」としながらも、「新しい詠題」による歌や、林麴臣の珍しい言文一致歌が萌芽として現れていたと指摘している。

明治二十一年の「東洋学会雑誌・三月号」に掲載された林麴臣の「言文一致歌」は、のちに茂吉が引用したものがそのまま全文だったというほど短い試みのものであった。一時で消えてしまった麴臣の短歌革新の主張に着目した茂吉の近代短歌観のほうに、逆に面白く感じられるくらいである。麴臣の「言文一致歌」の短い主張は次のようなものであった。

「歌ハ、折りニ触レ事ニ臨ンデ情ノ感ジウゴキ思ヒ切ニセ

マツタトキノ呻吟キノコエニ過ギナイモノデアル。云ハト鳥
ガ花ニ囀リ虫ガ草ムラニ鳴クモ、ツマリオナシコトデ万葉集
ヤナニカノ古イ歌ノ中ニ其ノ世ノ俗語方言ノマムニロカラデ
マカセノヤウナノニカヘツテ感心セラレルノガオホイムガ、
ソレヲ見テモヨウワカルコトデヤ。歌ハ殊ニ言文一致デナケ
レバナラスハズデアル。……」

林麿臣が言うように、「万葉集」などでも口からでまかせ
のように、時代の俗語方言で歌われたものに、却って感心さ
せられたりする。それを見ても分かるように、歌というものは
殊に言文一致でなければならないというのである。前にも
引いたが、そのうえで、自作の和歌を口語歌に直した五首を
添えている。

「竹の林梅の園にも鶯のなかぬ時にはなかぬなりけり
ウメニキテミ。藪ニマドヘド。鶯ノナカナイトキハ。サテ
ナカヌワイ

(待鶯) 麿臣

茂吉は、後年の与謝野鉄幹の新体詩や、正岡子規の口語体、
青山霞村らの口語歌の先駆がこのあたりにあったと見た。け
れど、麿臣の熱意の不足と、後に続く模倣者がいなかったこ
とが、一般化しなかった原因だろうと記した。茂吉に、麿臣
の「言文一致歌」の全文を教えたのは「友人の柴生田稔」だ
った。いま読んでも、やはりその口語歌は奇妙な感じのもの
で、発表された当時であれば、なおさらふざけた感じが先立
ったであろう。

二

だが、明治二十一年に林麿臣が行った実験には、当時の和
歌革新の問題の本質に届くものがあつたように思われる。

麿臣は、従来の和歌の文体そのものを変えなければならな
いと強調したのである。このたいへん重要な指摘が、「サテ
ナカヌワイ」のような平俗な口調ではなくて、もう少し西欧
風の開明的な匂いを感じさせていたならば、続いて模倣する
青年が、多少なりとも出てきたのかもしれない。

新しく開明的な題材を平明な言葉で表す詩型を創ろうとし
た『新体詩抄』（明治十五年刊）の外山正一の序文、「甚だ無
礼なる申し分かは知らねども三十一文字や川柳等の如き鳴方
にて能く鳴り尽すことの出来る思想は線香烟火か流星位の思
に過ぎざるべし」が思い合わされる。青年たちが夢中になつ
た「新しい題材」「平明な言葉」は、「サテナカヌワイ」の
方向にはなかつたのである。

茂吉のいうように、麿臣の口語歌は、和歌の文体そのもの
を変えようとした「先駆」と見ていい試みだった。だが、そ
の林麿臣の試行に先立って、しきりに「詠題」の改変が試み
られた時期があつたのである。

三

今井邦子著『樋口一葉』（昭和十五年刊）にも引かれていた
「新題歌」は、大久保忠保編の『開化新題歌集』（明治十一年
刊）などによるものらしいが、原本は変体仮名で書かれた解

読しがたい冊子であった。そこで、明治の和歌改良史をつぶさに研究した歌人、小泉茅三の編著『明治歌論資料集成』（昭和五十年刊・鳳出版）『明治大正歌集総覧』（昭和五十年刊・鳳出版）などを頼って拾い読みをした。

小泉茅三は、まず旧幕臣の埋もれた歌からいいねいに掘り起こし、明治維新、改暦、西欧化の流れの中で切れてしまった時間をつなぐようとしていた。旧会津藩士だった山川浩の歌集『さくら山集』（明治三十五年刊）など、旧藩士たちの歌を掘り起こして読むことから、近代短歌への流れを探っていこうとしたのである。

山川浩は明治六年に陸軍少佐となり、十九年には高等師範学校長となった。弟は東京帝大総長の山川健次郎、妹が大山大将の夫人、捨松である。歌は、「戌辰の役敵の屍をみて」という詞書きのついた一首、「これもまた我為ならでさらしけんあはれ逢かもとの屍も」などがある。小泉は、「時に藩閥に背こうとし、時にこれと妥協した」（『近代短歌の性格』昭和十五年刊・萬里閣）作者をいい、「微温性の歌集」と評した。そのうえで、明治初期の教少ない「裏側の歌集」として重視するのである。

小泉茅三の『近代短歌の性格』によると、文明開化のもたらした言葉が意識的に和歌の「詠題」に取り上げられるようになったのは、明治五年から十年までの間であった。当時は、風雅な詠題を与えられて歌を作ることが普通であったから、

その題を新しく開拓しようとする考えが生まれたのも当然といえるのだろう。

大久保忠保編『開化新題歌集』が明治十一年、佐佐木弘綱編『明治開化和歌集』『開化新題歌集』は十三年に、『開化新題和歌集』は十四年に出版されている。二人の編者の意識的な集大成のほかに新題を取り入れた歌集には、岡部啓五郎の『明治好音楽』（明治八年）、橘東世子編『明治歌集巻第一』（七）（明治九年）、岡村邁輯の『明治詩文歌集』（明治十一年）、細川春流著『奇題百首』（明治十二年）があった。日本が太陽暦を採用した明治五年から十年代末にかけて、さかんに「新題」の歌が流行したのである。

どのような「新題」があったのか。大久保編と佐佐木編のなから面白いものを挙げておきたい。当時の新しい世相風俗もよくわかる。

太陽暦 紀元節 電信機 郵便 汽車 汽船 軽気球 人力車 小学校 女教師 外国語学校 華族学校 女生徒 新聞紙 蝙蝠傘 玻璃窓 国旗 活版 復古 廃藩 病院 養育院 横須賀造船所 富岡製糸所 巡査 陸軍 海軍 博覧会 国立銀行 礼拝堂 貿易 西洋料理 男女同権 地球儀 日曜日 土族 幼稚園 『開化新題歌集』
新年 紀元節 復古 瓦斯燈 鉄道 写真 寒暖計 牛店 芸妓 貸座敷 祭政一致 門閥廃棄郡県定置 官員免職

刀職閉店 愛国 人道 義務 体操 原告 被告 新聞記者 裁判所 徴兵 新平民 娼妓 娼夫 自在車 望遠鏡 顕微鏡 マントウ シャツボウ カバン 牛乳 種痘 解剖 東京繁榮

『開化新題和歌梯』

いずれも、「太陽暦」「新年」で始まっているのは、新暦を開化の象徴と理解したからである。カタカナ語が少ないのは、欧米語の翻訳が当時の急務であり、国語の成果であったからだ。そのぶん、漢字熟語の詠題の歌は、その概念をもう一度説明したものになっている。むしろ、数少ないカタカナ語の題の歌の方が面白かった。

みそらとぶ鳶にかはりて旅ならぬ人さへうへにきよそひ
にけり(マントウ) 竹内助員
おはやけにつかふる人も旅人もたづさへやすみたづさへ
にけり(カバン) 中西尋樹
おしなべてたかきいやしきけだ物の毛をいただかぬ人な
かりけり(シャツボウ) 中西文吉

マントウ(マント)がトンビ(合羽)に掛けてうたわれている。マントを着る人が、空を飛ぶ鳶のようにも見えたのだろう。さまざまな人がカバンを携えて行き来している様子や、羊毛などでできている帽子を頭に乗せて歩く流行がうたわれ

る。時代の面白さはあるが、いずれも西欧文化のもたらした表層的な風俗描写に終始した歌といってい。新題が歌の本質まで新しくすることはできなかったのである。

四

長い歳月をかけて培ってきた風雅な「詠題」と和歌との微妙な関わり、そこに潜む重層的な文化の匂い、そういう効果に嵌めこむようにして、題のみ新しくする試みは、いま振り返っても荒っぽい試行錯誤であった。だが、「今日の言葉で、今日の歌を」という前のめりの思いは、ひしひしと伝わってくる。加えて、長歌改良論なども論議された混沌の時期を経て、明治三十年代に初めて短歌の革新が遂げられた。

わたしは、そこへと至るもう一つの試みとして、前回、わたしなりの着想を紹介したが、長い詞書きのついた樋口一葉の日記体歌集「しのぶくさ」(明治二十八年)を加えておきたい。集中の「まろびあふはちすの露のたまさかは誠にそまる色もありつや」は、一首では古めかしい。だが、「となりて酒うる家あり 女子あまた居て客のとぎをする事うたひめのごとく遊びめに似たり……」という、移り気な酒屋の娘の描写が添えられると違ってくる。皮肉なりアリストの眼がえぐりだす。時代の陰影と空気が生き生きと読みとれるのである。生きのよい同時代の地の文章と、洒脱で成熟した和歌との組み合わせ、その違和の織りなす揺らめきに、一葉は、歌の新しく生きる道を見いだそうとしたのではなかったらうか。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

17

佐伯裕子

樋口一葉の父則義は、甲斐（山梨県）の農家に生まれた。

二十七歳のときに江戸に駆け落ちをして、父の友人の真下専之丞の世話で同心株を買い、幕臣として、著書調所で西洋の書物を取り調べていた。明治維新の前年のことである。生き抜く才覚があったのだろうか、官軍が東征し、江戸が東京になった際も、則義は新政府のもとで下僚の職を得ることができた。市井には、没落した貧しい武士たちが徘徊していた。わずかの間のみ幕臣だった則義に、幕府への義理立てはなく、自然に転身ができたのである。

だが則義の死後、一葉の母は、家が貧窮するほど士族であった誇りをもつようになる。優雅な「萩の舎」では「平民組」だった一葉も、元士族の娘という意地を支えとして生きた。そのことは、一葉の小説に「没落士族の娘の誇り」というテーマで色濃く表れてくる。母の奉公先だった武家の没落ぶりや、歌の師中島歌子の夫で若死にした水戸藩士のこと、彼らの境遇もないまぜにして小説化されたのである。

明治十年、二十年代は、旧藩士たちの残影がどこにも濃厚に見え隠れしていた。「幕藩」という生活意識から、新しい国家意識が隅々に定着されるまでの歳月、その境界線を、明治二十七年の日清戦争に見ることができよう。

小泉麦三の著『近代短歌の性格』（昭和十五年・万里閣）に次のような一節がある。

「明治短歌史の幕は、十指に余る勤王志士歌集の梓行によって開かれる。維新のために、生命をかけてはたらきつつその成る日を見ずして寂しくこの世を去つて行つた、或は去らねばならなかつた人々への追慕の気持が、そこに明らかに反映してゐる。然しながら、そこに吾々は同時に更に寂しい死の相を見のがしてはならない。」

「更に寂しい死の相」とは、敗れ去った幕府方の会津藩の志士に代表される作品群を指している。小泉は、明治維新は、「徳川期までの日本文化」を守ろうとする力と「これを破壊しようとする」力との階級対立とみていた。やや単純な見解だが、埋もれた勤皇や佐幕の志士たちの歌も同列に語られな

ければならないと強調しつつ、その資料の少ないことを指摘する好著である。

一葉が暮らした日々には、つい昨日のこととして武士の時代が生きていた。しかししだいに、とりわけ近代短歌への道を考えるときに、明治維新の志士たちの歌は忘れさられていた。近代短歌といえ、すぐに与謝野鉄幹・晶子や正岡子規たちの名が浮かんでくるのだが、明治十年代の「新しい詠題」を探る文明開化歌や、林麴臣の口語短歌の小さな試みはあった。日清戦争までのそういう歌の混乱期のなかでは、彼ら志士たちの歌も微妙に響きあっていたにちがいない。

新政府に受け入れられなかった、あるいは反新政府の意志をもって敗れた旧藩士たちが、キリスト教の信徒となり、新聞記者となり、文人となり、新生日本に重要な役割を果たしたことは記憶されている。それらが、歌においてはどのような経緯をたどったのか。短歌史に現れているのは、志士たちを助けた蓮月尼の静謐な和歌のみである。

二

小泉茶三があげた少ない資料のなかで、実際に読むことができたのは、新政府のもとで成功した旧会津藩士、山川浩の歌集『さくら山集』（明治三十五年刊・好文社）だった。

会津藩士だった山川浩は、慶応二年に外国奉行の小出大和守に従って、フランス、ドイツを経てロシアに行き、攘夷論の非を知ったという。鳥羽伏見の戦、会津の戦などの戦いを

経て、佐賀の乱で負傷して引退し閑居した。そのおかげで藩閥の争いに巻き込まれずにいた山川の運命は、新時代には選ばれたともいえる。明治十九年、文部大臣森有礼の依頼で高等師範学校長となり、成功を重ねていく。山川の弟は後の帝大総長の山川健次郎、妹にアメリカに遊学し大山巖大将夫人となった捨松がいる。

『さくら山集』に付記された伝記によれば、山川は新しい考え方の会津藩士だったという。歌は「風流に親しむ」ための楽しみとして作られており、後年、肺結核にかかってからは、より風雅な題詠が多くなっていく。「春夏秋冬雑」の部立ての八百余首のなかに、時折、志士としての忸怩たる思いがのぞく。

何事もなさで四十のはるを今むかふ鏡のかげもはづかし

(元旦対鏡) 春の部

忽ちにかはる浮世のありさまを空にうつしてみする稲妻

(稲妻) 秋の部

何事をなして過しゝ月日ぞとあすこん年に問れんもうし

(除夜) 冬の部

自分はいったい何をなしてきたのだろう、と自らに問うのである。新時代に成功した自分の向こう側に、敗れた仲間、志士たちの姿がいつも見えていたのではないだろうか。彼ら

に照らしだされた自分を「はづかし」「うし(憂し)」というのである。山川のこの思いに、蓮月尼の秀歌「いにしへを月にとはるゝ心地してふしめがちにもなる今宵かな」が重なってみえてくる。澄んだ光に現在の自分を照らされる羞恥心、というのであろうか。こういう感慨に、失われた文化意識が読み取れるのである。

「雑の部」の「(従軍)」一連には、戊辰の役への思いが直截に表されている。戊辰の役は、明治元年から翌年までの官軍と旧幕府との戦いの総称で、鳥羽伏見の戦、彰義隊の戦、長岡藩会津藩との戦などを含んでいる。伝記によると、戦いのつど、山川は微妙な立場で臨んでいたようだ。

戊辰の役敵の屍をみて

これもまた我為ならでさらしけんあはれ蓬かもとの屍も
罎を潰して若松城に入たる時女中の勝敗を尋ねければ取
りあへず

よせてこし仇は跡なくちりはてゝ残るは野べの屍なり屍
小出光照の戦死をなげきて
後れつる身こそつられ死出の山越は共にと思ひしもの
を

いたつきのいゆるにつけて思ふかな君が今には残す恨を
「白虎隊」追悼の一連もある。佐賀の戦での負傷をかこつ

ているうちに、戦友の小出光照の戦死を知り、会津藩士として「後れつる身こそつられ」という忸怩たる思いを深めたのである。

三

『さくら山集』は、風雅の歌に寄せて死んでいった旧藩士を悼みつつ、新時代に成功した自身の心の救済を求めようとした一冊といえるだろう。そういう眼差しで、山川が日清戦争という新時代の戦をうたった作には、興味深いことに、一葉の戦争の歌と共通する発想がみとめられる。

明治二十七年貴族院議員として広島に召されたる折十月
十五日夜よめる 山川浩

今宵しもますら猛男は矛とりてこまの荒野の月やみる乱
軍人の妻にかはりてよめる

如何して君はますらんすきまもる風だに寒き冬の夜頃を
清國に事ありし頃曉更爐火といふことを

埋火のもとだにたへぬ曉の寒さをいかにもりあかすらん
少将大寺安純が戦死をいたみて

うらやましあだの要塞を打くだき我みも玉と砕けたる君

これらの山川の歌に重なって、一葉の日清戦争の歌(詠草・明治二十七年)が思い合わされる。

としのはじめ戦地にある人をおもひて 一葉

おく霜の消えをあらそふ人も有をいはゝんものかあら玉
のとし

敵国のさまをさぐりにとて立出し人のはかなき終りをと

げたるも多しときくにそれが妻などのこゝろははとて

さだめたる方こそあらぬ旅衣身さへたゝれむものとかやハ
ミシ

さりながらそれもまた

うら山しいづれ消ゆべき露のよを野原のあらし立まさり

つゝ

さむきふすまかすけきともし火しづかにあほひで故郷を

しのぶときいミじきつはものといへども涙へ襟に冷か成

るべし

つるぎ太刀さゆるしもよの月に寝て結ばぬ夢のゆくへを

ぞおもふ

山川も一葉も、極寒の大陸で戦う兵士の身を思い、また残された妻に自分をなぞらえてうたっている。「うら山し」という本心を見せた一葉は、女性の身として、そのように劇的な生死に関わる人生を羨んでいたのではないだろうか。

山川浩は、歴戦の会津藩士だったが、新時代に大きな成功を収めた。その山川が、日清戦争で戦死した少将を悼んで、やはり「うらやまし」とうたう。そこには、成功は収めたも

のの負傷して一線から退いた身を、「後れつる身こそつられ」と恥じる「生き残った志士」の心が疼いている。

「生き残った志士」という屈折感、その時代の人々の或る「心の型」として残っていた。「没落士族の娘」一葉も、その型を美しく踏襲していたと思われる。一葉の歌のほうが巧緻だが、国家間の近代戦争である自覚よりも、戦う志士の悲哀が先に立っている点に、二人の共通の心を見いだすことができる。しかし、志士の心で日清戦争をうたった一葉や山川の姿勢は、しだいに古いものとして切り捨てられていくのである。

翌明治二十八年刊行の外山正一、上田萬年他編著『新体詩歌集』の「新体詩」になると、日清戦争は次のように勇ましく作詩されている。当時の軍歌の典型といっている。

「朝日に輝く日の丸の旗／閃く皇国の軍艦共よ／千島の果より沖繩までも／開国この方異国の敵に／一度も今迄穢されざりし／貴き海岸守れや守れ／敵の海軍幾百あるも／千尋の底へと沈めてしまへ……」（『我が海軍』外山正一）

北は千島から南は沖繩までの海を守るといふ、国境と国家の先鋭な意識の形成……、この新体詩は当時の国民感情を率直に写しだしたものにちがいない。だが、自分の来し方の「生」と照らし合わせて戦争をうたった樋口一葉や山川浩の歌の、湿った羞恥感情の在り方のほうに、わたしは深い興味を覚えている。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

18

佐伯裕子

樋口一葉の日記「ミづのうへ」に、明治二十八年五月十四日、本郷にあった寄席若竹亭に妹の国子と行った夜のことが記されている。「今日夕はんを終りてハ後に一粒のたくはへもなしといふ」から始まるのだが、明日の米もない暮らしのなかでも、初夏の夜の心弾みが匂い立つ箇所である。

人々歸りての夜にいりて国子しきりにわか竹にかゝり居る
越子一座の明日のよ限りにてよそへ行くべきをいかで聞か
ばやとうながすにさらばとて家を出づ 午前ハけふかぎりの
食とて胸を痛めし身が夜にいりてはよせへ遊ぶ 世ハす
べて夢也

若竹亭は音曲や落語のかかる寄席で、その夜の一座は竹本越子率いる女義太夫であった。一葉が亡くなる前の年、次々に小説を発表し始めて「文學界」の青年たちとしきりに交遊をしていた頃である。明日の米もないと嘆いた身が、夜には

寄席で遊んでいる。「世ハすべて夢也」という一葉の、まだ若い胸のときめきが聞こえるようだ。国子に、「一座は明日で余所に行ってしまう、どうしても聞いておきたい」とせがまれて出掛けたのだが、一葉にとっても楽しい夜となった。

一葉の晩年の小説の未定稿には、しばしば女義太夫が登場してくる。かつて、「おのれ日々日記を作るに言文一致あり和めかしきあり 新聞体なるあり」と悩んだ一葉だった。廓の遊女や、酒屋の少女、そうして下町に生きる商人たち、あるいは寄席にかかった義太夫の声、そういう「耳」から入ってくる言語にも敏感に反応した一葉の姿が浮かぶ。雅文から、下町風に活きがよく切れのいい文章に変わっていった、晩年の日記や小説が思い合われる。庶民に持て囃された音曲落語の寄席の片隅に、一葉も楽しく座っていた初夏の宵があった。

書き言葉ではなく、耳から入ってくる言葉へと、明治初期の「言文一致」の情熱はどのような思いによって進められて

いったのか。一葉が、迷いつつ「言文一致」というとき、どのような文体を想定していたのか。歌友の三宅花圃が『藪の鶯』（明治二十二年刊）で試みた、西欧風の会話「アハハハハハ。このツー、レデースは。」などを想定したのだろうか。だが、一葉は、花圃が小説で金銭を得たことに刺激されたが、その小説に感心したわけではなかった。言文一致の源を、仮名垣魯文たちの草双紙に置いて考えていたか、あるいは講談調の文体を想定していたのか。

『藪の鶯』は会話のところが話し言葉になっていて、地の文は違っている。そういう手法も、いきなり、花圃が創り出したものではない。会話が口語体、地の文が文語体というスタイルはさまざまに試みられていた。そのような言文一致の試みで、最も切実な問題は何であつたのだろうか。

言文一致の小説の草分けとされる『浮雲』（明治二十年刊）の作者、二葉亭四迷に、『浮雲』執筆当時を回顧した「余が言文一致の由来」という小文がある。明治三十九年の「文章世界」五月号に掲載されたもので、筆記者が前田晃とあるから、聞き書きのスタイルだったのだろう。

「言文一致に就いての意見、と、そんな大した研究はまだしてないから、寧ろ一つ懺悔話をしよう。それは、自分が初めて言文一致を書いた由来——も凄まじいが、つまり、文章が書けないから始まったといふ一伍一什の顚末さ。もう何年ばかりになるか知らん、余程前のことだ。何か一つ書いて見

たいとは思つたが、元来の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで、坪内先生（坪内逍遙）の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は円朝の落語を知つてゐよう、あの円朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。」

三遊亭円朝の落語の口調を取り入れて『浮雲』が書かれたのは周知のことだろうが、二葉亭四迷がしきりに、「文章が書けない」「文章下手」だったから、と言っている点が面白い。この場合の「文章」の対極におかれるのは「言語（話、しゃべり言葉）」である。書き言葉と話し言葉とがあつて、自分は書き言葉が下手で書けないと言うのだ。

この感慨は、『浮雲』執筆当時の明治二十年前後は、まだ文章と言語が明確に分かれていた状況を伝えるものだ。当時の硬派文芸の主流は、漢学を中心とした。漢学を駆使した文学者の代表に、「朝野新聞」社長で『柳橋新誌』の作者、成島柳北がいた。一方で、江戸庶民の話し言葉を巧みに使つた河竹黙阿彌がいたが、それは劇の脚本であり、「文章」として意識されていたのではない。武士時代の象徴である「候文」も役割を終えて、文章の次の形が模索されていた。

「文章下手」とは、そういう時代のなかでの自覚であつた。学識にあふれた作家志望の青年でも、「文章」が書けなかつた。漢字や日本の古典の勉強よりも、原語で西欧の小説を読もうとする青年たちである。思いあふれて小説を書こうとしても文章そのものが書けない……。現在から見ると奇妙に感

じるズレと悩みが生じていた。その悩みは、同時に、新しい時代を表現する小説を書きたいと思っても、それを容れる文章がなかったことを示している。雅文調や漢文調の文章では、内容までがその世界に引きずられてしまう。

眼で読む文章と耳で聞く言語の間には、はっきりした境界が引かれていた。そうして、その境界には磨かれた美学があった。「文章下手」という四迷の自覚は、謙遜などではなく、切実な悩みであって、坪内逍遙に教えを請うたのである。そんなに「文章」が苦手なら、流行の三遊亭円朝の癖のように書いてみたらどうだ。そう逍遙に言われたのだった。

そのことを樋口一葉に引きつけて考えると、さまざまな文体の選択肢に悩んでいた一葉は、「二葉亭とは逆に、当時の「文章」の優秀な書き手だったことがわかる。文章と言語の境界にある美学をつよく意識した作家といつていい。古典による雅文の摂取と漢学の素養を積んで、そのうえで一葉は押し寄せる「近代」に接していた。

三

活字による印刷技術の導入が、明治初期に文芸の在り方向づけたとすれば、イギリスから伝来した速記術の役割も大きかった。ことに「言文一致」の成立に重要な働きをしたのである。

二葉亭四迷が手本にした三遊亭円朝の『怪談 牡丹燈籠』は、明時代の中国の小説『剪燈新話』の中の「牡丹燈記」を

焼き直したものである。当時の速記は政談演説に適用されていたが、寄席の高座にも使われるようになった。耳で聞く文章で読めるようになったのである。高座をそのまま再現する速記技法があつて、『怪談 牡丹燈籠』は文章化された。その文章を手本にして、言文一致体の小説『浮雲』が明治二十年に誕生したのである。

円朝の『怪談 牡丹燈籠』は次のように始まる。

寛保三年の四月十一日、まだ東京を江戸と申しました頃、湯島天神の社にて聖徳太子の御祭礼を執行まして、その時大層参詣の人が出て群衆雑踏を極めました。茲に本郷三丁目には藤村屋新兵衛といふ刀剣商が御座居まして、その店頭には善美商品が陳列である所を、通行かゝりました一人のお侍は、年齢二十一とも覚しく、膚色髪までも白く。眉目秀で、目元キリ、ツとして少し癩癪もちと見え、鬚の毛をグーツと釣揚げて結はせ、立派なお羽織に、結構なお袴を着け、(中略)侍「亭主や、其処の黒糸だか紺糸だか識別れんが、彼の黒い色の刀柄に南蛮鉄の鐐が附いた刀は誠に善さうな品だナ。鳥渡御見せ。亭主「へいへい、コリヤお茶を差上げな。……

切れ目のない円朝の語り口を、そのまま記述した袋とじの本『怪談 牡丹燈籠』は、明治十七年に出版された。若林珪

蔵という速記者が、何度も円朝にクレームをつけられながら脱稿したものである。その円朝の本が、坪内逍遙を動かし、さらに二葉亭四迷の『浮雲』に影響を及ぼしていった。『浮雲』の出だしを引いておく。

千早振る神無月も最早跡二日の余波となつた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよくぞよく沸出で来るのは、熟れも頤を気にし給ふ方々。しかし熟々見て驚と点検すると、是れにも種々種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髭、顎の鬚、(中略)緑の巻上ツた釜底型の黒の帽子を眉深に冠り、左の手を隠袋へ入れ、右の手で細々とした杖を玩具にしながら、高い男に向ひ、

「しかしネー、若し果して課長が我輩を信用してゐるなら、蓋し已むを得ざるに出でたんだ。何故と言つて見給へ、局員四十有余名と言やア大層のやうだけれども、皆腰の曲つた老爺に非ざれば氣の利かない奴ばかりだらう。……」

『浮雲』は、始めは句読点なしだったが、「朝日版全集」以後に付されるようになった。その時の校正担当者は石川啄木である。二葉亭は、円朝を真似ながらも「ございます」調を使つていない。先に言文一致を試みた『武蔵野』の作者山田美妙は「です」主義だったが、二葉亭はそれを意識してか、

「です、ます」を避けて「だ」調に統一している。

切れ目なく侍の様子を語りつづける円朝と、『浮雲』の切れ目ない描写はよく似たところがある。だが、円朝が、勧善懲惡的な世話物や人情怪奇話を語つたのに対して、二葉亭は近代的な男女の内面生活を描き出そうとした。そのために、説話調になる「です、ます」体や、語り口調の「申します、ございます」を避けた。また、円朝が会話の前に脚本めいて「侍」などと振つたのを省略し、自然に会話が進行していくように工夫している。そうして、今日の小説に近い形が創り出されたのである。

「おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く氣だらう、押かけて行つて引きずつて来るからさう思ひな、ほんとにお湯なら帰りにきつとよつておくれよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男を取らへて小言をいふやうな物の言ひぶり、……」

樋口一葉の『にぎりえ』の冒頭である。客引き女の会話に切れ目なく挟まれる地の文には、「なり」「こそよけれ」などの文語が混じる。一葉は文語意識を最後まで手放していない。文章の書き手だったゆえに、書き言葉の持つ美を手放すことができなかったともいえるだろう。だが、その美意識が、暮らしの中で耳にした客引き女の声を、いかにも美しく響かせているのである。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

19

佐伯裕子

吉原遊廓の当時の地図と芸妓たちの源氏名や肖像を描いた、斎藤真一著『明治吉原細見記』（河出書房新社・昭和六十年刊）をめぐっていたら、次のような文章に出会った。「久野おばさんが、ほとんど同時期に吉原にいたという事実から、私は特別一葉を身近な人と感じるようになった。」

著者の養祖母「久野」は、明治二十六年前後の吉原で「紫」という名の太夫だった。古本屋で見つけた明治期の「吉原細見」には、芸妓たちのランクが値段で表されていたという。そこには「廓」の悲哀が象徴されていた。

古本屋を巡って、「吉原細見」を捜し出すのに何年もかかり、さらに養祖母にあたる「紫太夫」を探すのに何年もかかった。探し当てた「細見」の芸妓の名前には、気位と意気の高さがまといっていた。「おきん」「花次」「なつ」「つる子」「はん子」「小せん」……。 「紫」の名を持つ太夫は何人もいたが、明治二十四年の吉原大火を経て、老舗「角海老楼」に移った紫太夫こそが「久野おばさん」だった、と著者

は推測している。

『たけくらべ』に、「三島神社の角をまがりてより是れぞと見ゆる大厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長や、商ひはかつつ利かぬところとて……」という大音寺前の描写がある。一葉の住んでいた辺りは、実際に、十軒二十軒、三十軒長屋が狭い道を挟んで并んでいた。そのありさまは、上島金太郎著『樋口一葉とその周辺』（笠間書院・昭和四十四年刊）に記された、当時を知る本田トミ女の談に代表されるだろう。

「トミさんは東京にあこがれて嫁にきたのだが、花嫁姿で大音寺前まできて車を降りた時は、右も左も塵箱がこわれたような家ばかりで、嫁にくる場所を間違って連れられてきたのではないかと思った。周囲の家々があまり汚いので逃げて行こうかと思っていたら、一ヵ月後に一葉さんが、薩摩餅の着物を着て通ったので、あんなきれいな人がこの龍泉寺町に住んでいるのなら、私もしんぼうしようと、永住の決心が定まったと聞かされた。」というものである。

明治二十六年に龍泉寺町に越した一葉は、そういう遊廓界隈の雰囲気身を沈めながら、凜々として生きようとしていた。一葉がかいま見た芸妓の一人に、斎藤真一の養祖母「紫太夫」もいたのであろうか。

日記「塵之中」の明治二十六年八月に、妹の国子と廓に玉菊燈籠を見物に行った記述がある。名妓「玉菊」の早逝を悼んで、江戸期から催されていた燈籠祭りであった。

毎夜廓に心中ものなど三味線に合せてよみうりする女あり
歳ハ三十の上いくつ成るべきにや 水浅黄のうろこ形の
ゆかたきて帯ハ黒じゆすの丸帯をしめ吉原かぶりに手ぬぐ
ひかぶりて柄長の提燈を襟にさしたるさま小意気にしやんと
して其^(素見)むかしハ何成けん 驚なかせし末なるべきか
(中略) すけんぞめきの格子先一寸一服袖引たばこあがれ
あがるの問答に心うたるゝたはれをばしらず粋が身をくふ
おもふどし二かいせかれてしのびあし籠にからむつたのも
ん松の太夫とさゝやきの哀れ命を引き四つのかねに限りゑん^(驚)
んをう瓦上おく霜の明日をもまたじとおもひつめし身にハ
いかに身にシミて心ぼそかるべき ほそく澄みたる声はり
あけて糸の音色もしめやかに大路小路をながしゆくうしろ
姿 これが哀れかかれが哀れか

「角海老楼」付近のスケッチである。門浄瑠璃を歌う小粋

な女の昔を、一葉は、「驚なかせし末なるべきか」と想像している。都々逸「ばかにしやすな昔は花よ驚なかせたこともある」を下敷きにしたものだ。また、芸妓が客を二階に登らせる描写には、清元の「素見ぞめきは椋鳥の群れつゝきつゝ格子先(吉原雀)」や、端唄「ぬば玉の闇をお前に登り詰め二かいせかれて忍び逢ふ……」も潜ませてある。

当時の日記には、こういう洒落な調子と、古典調の序詞などが混在するのだが、どこか蓮葉で小粋な感じが出始めている。心にしみる浄瑠璃流しの細い声と、引き止める遊女、帰ろうとする客と、哀れなのはいずれなのだろう……。

それこそ『にぎりえ』に登場する廓の「お力」の台詞や描写、「おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか」「やがて雁首^{がんぶ}を綺麗に拭いて一服すつてボンとはたき、又すいつけてお高に渡しながら氣をつけてを呉れ店先で言はれると人聞きが悪いではないか」につながるものだった。

一葉が、廓の様子を日記に記したのはこの箇所のみだが、一年後に書いた『にぎりえ』では、古典調の部分省き、廓の話言葉を生き生きと活写し、強調したのである。

二

明治二十六年七月、樋口一葉は、本郷区菊坂町から下谷区龍泉寺町三百六十八番地の二戸建長屋に引っ越した。俗に「大音寺前」と呼ばれた貧しい地区で、近くに吉原遊廓があった。

小説や歌で身を立てることをあきらめ、萩の舎からも、半井桃水とも離れて、商いに生きようと決心したのである。一葉は翌年の四月まで、その長屋で小間物や駄菓子売っていた。その期間が、小説家樋口一葉の「奇跡の十四ヵ月」を用意したことはよく知られている。

一葉の龍泉寺町時代の日記は、順に「塵之中」（原文の表記は塵だが、塵に統一する）「塵中日記」「塵中日記 今集」「塵中日記」「塵中日記」「ちりの中」「塵之中日記」がある。猥雑な環境の中の生活苦と心境が「塵」という題字に託されて、現実的で切れるいい文体を探り出している。この期間は、「文學界」に発表した小説「琴の音」「花ごもり」や、数少ない和歌よりも、優れた日記文学を残した時期といっている。

引越した年の暮れの「塵中日記」、明治二十六年十二月一日付けに、馬場孤蝶が「文學界」に寄せた新体詩「酒匂川」を批評した箇所がある。流行の「新体詩」は、韻文でもなく、五七調で歌う浄瑠璃に似ていて、散文体でもあるところが「今一息」とした批評の辛辣さも龍泉寺町時代のものだった。新しい文体に寄せる一葉の姿勢に触れたところでも引用したが、新時代にあつての和歌への感想が書かれている。

「いひふるしたるみじか歌の月花をはなれて今のよの開けゆく文物にともなひ難きあまり新体などといふも出くめりもとよりさえかしこく学ひろき人々がものすものなめれど猶

わかう人が手になれるは好みにかたよりすぎにへんしてあやうこと様のものになれるもありふる（中略）さりとてみそひと文字の古体にしたがひて汽車汽船の便あるよにひとりうしぐるまゆる／＼とのみあるべきにあらず」

新体詩は偏りすぎだが、「汽車汽船」の世の中に、ひとり和歌のみ牛車でいいわけはないと述べ、続けて「俗中に風流あり 風流のうち大俗あり」と明記している。

いづれぞやうきにえたへで入りそむるミ山のおくと塵の中とは
日記「塵之中」

七月二十六日、長屋に引越したばかりの日記に記された一首である。「憂きことに耐えられなくて逃避していく場所には、奥深い山か、俗世の塵にまみれた町中か、いったいどちらなのだろう。「塵の中」を「山奥の閑居」に対比させて使っているところなど、和歌的な情緒に刃を立てているように読める。同時に、生活苦の嘆息も聞こえてきそうである。吉原遊廓界限の「塵の中」、そこに住む一葉には、やはり「落ちぶれた」という思いがあった。それだからこそ、「塵の中」を深く見つめようとする意志が働いていたのである。

遊女が逃げないために巡らされた「お歯ぐる溝」の向かい側に、「塵箱がこわれたような」長屋が聳っていた。溝からは藪蚊が立ちのぼっており、遊女の性病検査のための「検査

（鶯花契万春）

場」もあった。そのような住処であったが、一葉は、「くるわ近く人氣あしき処」と人々に言われるたびに「くやしく」感じた。そうして、吉原に散歩に出たり、廓で流される門淨瑠璃を聞きにいたりしたのである。苦界を視つめて書き記すことによって、一葉は、見下ろされる視線に対抗した。

三

龍泉寺町時代の一葉は、生涯でもっとも和歌から遠いところにいた。同時期に「塵中百首」という歌稿があるが、実際の歌数はごく少数だった。人間に好奇心をもち、社会に眼を向けて日記を書いたにも関わらず、歌は古典調で力の弱い厭世的なものばかりである。

よの中は秋のはじめに成にけりいかゞはすべき袖のうは露（秋のはじめに）
「塵中百首」

いさゝ川きのふの春のおもかげもかへらぬミづにかはづ鳴なり（夏のはじめに）

秋ふかく成にけらしな朝日かげはれたる空もさびしかりけり（秋朝日）

おもひすてゝ入りぬる山のかひぞなき秋の夕べは袖のぬれつゝ（山家秋夕）

夜ふかく成にける哉花がたミおさなきめさへさめがちにして（秋夜）

よろづよを契かはして梅の花かをればうたふそのゝ鶯

五首目の歌には、長屋住まいの感慨が少し出ているだろうか。向かいに住む幼子などが想像される。眠りが浅くなる秋の夜には、幼い子供さえ覚めがちであるとうたう。「いさゝ川きのふの春のおもかげも」に初々しい若さが感じられるが、総じて、厭世的で古典調の型にはまった一連だ。

流れ口がないゆえに特有の苦が生えて黒く淀む「お齒ぐろ溝」、その溝に取り巻かれた遊廓、見世に並ぶ白い頸の女たち、細く佻しい流しの声、塵箱のこわれたような長屋。そういう儼えた空気は、美しい調べの和歌に盛り込むことができないうと、一葉は痛感したにちがいない。

「汽車汽船の便ある」世に喘ぐように暮らす貧者の思いを、蔑視される廓の中にもこもごもの感情が揺らめいていることを、一葉は日記という散文に刻みこんだ。「塵中日記」を読むと、和歌と散文の役割を区別する一葉の意志が浮かび上がってくる。和歌に全てを盛り込もうとすることを、一葉は断念していた。そこが、与謝野鉄幹、晶子、正岡子規たちの短歌革新の意識との違いといっていいたいだろう。

だが、晩年の一葉は、「長い詞書きのある歌」「物語のなかの歌」という、散文と和歌を交響させる構想を描いた。小説を書くかたわら、「敷島の道」としての歌の新しさを求め始めたのも、龍泉寺町の日々を経てからだった。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

20

佐伯裕子

明治二十七年に起きた日清戦争をきっかけに、日本にコレラが流行したのは翌二十八年三月のことだった。東京には、台湾から広島を経由して帰京した陸軍少尉の発症を皮切りに、同年の五月に神田から麻布、渋谷、日本橋、築地、小石川、浅草へと罹患者が広がった。

以前に、この連載で、日清戦争後にコレラが流行したことを書いた。その後もずっと気になることがあって、もう一度コレラの話を書きとめておきたい。

明治二十八年、神田周辺にコレラが発症した時期、小石川にある萩の舎の歌稽古に向いた一葉の日記「水の上」を紹介した。まさに、警察や号外などで注意が呼びかけられている、明治二十八年五月二十五日と二十七日の記述である。

明治十九年にコレラが大流行した際、少年だった田山花袋は、「いつコレラに襲はれるかも知れないので、私の少年の心は絶えずそれにおびやかされたのを覚えてゐる。」（『東京の三十年』）と震撼した。同世代人である一葉も、少女期に十九

年のコレラの大流行を経験していた。恐怖したはずの当時の記憶と重ねてもよさそうだが、その日の記述には、ただ「小石川にけい古なり」「数よみの会小石川にて催す成き」などとおぼろげな記述があった。その際に、わたしは、「コレラについては書かれていない」と記したが、五月二十九日の記述を見逃していたので付記しておきたい。といっても、「コレラ、虎列刺」などという病名が出てくるのではない。ごくあっさりとした一行だけである。

「廿九日 晴れ する事なしに過ぬ 悪^{あき}き流行すべきき
ざしあればとて大掃除はじめる 日くれて西村君来訪」

「悪^{あき}き（コレラ）」が流行しはじめたので大掃除をした、というのである。一葉はなぜ、コレラに触れた箇所でも、「コレラ」と書かずに「悪^{あき}き」と表現したのでろうか。号外や新聞のゴシック体の「コレラ、虎列刺、コロリ……」などの強烈な表記を避けたのか、「悪^{あき}き」と書かれているところが深く印象に残った。

日記や小説中に病気を取り上げるとき、一葉は、病名を記

す場合とばかりして書く場合がある。長く疑問に思っているところである。同じ流行病でも、天然痘の予防接種「種痘」や、「チフス」「黒死病」などは、作品や日記に実名で登場してくる。語感にはっきりした好悪があるように見える。

○本妙寺にて種痘を行ふといふに我もくに子も行かばやとて支度をなす
〔日記〕明治二十五年三月十六日

○文化とか開明とかの余光に、何ごと根から葉から掘りかへして、百年千年むかしの人の心の中で解剖する世に、これを職掌の医道の妙にも、我が天授の諦ひは何うも成らず、学士札幌へ越し歳の秋、診察せし室扶斯患者に感染して、惜しや三十一路にたらぬ若さを、北海道の土に成しぬ、風の便りにこれを聞きしお園の心。

〔小説「経つくえ」明治二十五年〕

○東京の狂水病おこらんとす

〔につ記〕明治二十六年五月廿日

○北里青山兩博士黒死病しらべとて香港に渡りたるハミじき名与なりしや 青山博士のその病につかれてあやふげなる電音おぼつかなし 知らぬ人にもあらぬ仲なれば殊に哀なり
〔水の上日記〕明治二十七年六月二十七日

○呑んで呑んで呑み尽くして、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨々々、お袋は田舎へ嫁入つた姉の処に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて実家

へ戻したまふ音信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれど、其子も昨年の暮チブスに懸つて死んださうに聞きました。
〔小説「十三夜」明治二十八年〕

天然痘を暗示する種痘、そうしてチブス、恐水病、黒死病（ペスト）と病名が記された作品から引用した。黒死病は七月一日の「東京朝日新聞」号外に、香港に調査に赴いた青山博士が黒死病に罹患して重病と報告されたことへの感想である。「経つくえ」「十三夜」では、チブスが役割をもつて使われているが、いずれにしても、わたしの調べたかぎりでは、一葉が記したなかに「コレラ」は登場してこない。「悪あき」と言い換えたもののみだった。

二

明治二十八年の東京での流行は、十九年の時の規模にはいならなかった。衛生管理が進んでいたせいもあったが、それは都市部だったからで、軍港のあった広島、その周辺の岡山などの地域でコレラは猛威を奮った。その辺の事情は、日々の新聞や号外に書きつがれ、喧伝されていた。

祖父が岡山出身であったため、その妻である祖母からしばしばエピソードを聞かされた人物の一人に、「岡山孤児院」の設立者、石井十次がいる。熱心なキリスト教信徒だった十次の行動は、祖母にとっては、連載の初回に紹介した祖母の父親の高崎教会での熱狂ぶりに通じるものだった。祖母の父

が布教に夢中になりすぎて老舗の旅館を失ったのを、十次の過激な生涯に重ねていたようだ。

石井十次は、孤児院事業をキリスト教会と信者の「寄付」で運営する方法を導入した。英国プリストル孤児院の創設者、ジョージ・ミューラが明治十九年に来日して、熱心にキリスト教の信仰と孤児院事業の演説をしてまわった。医学を学んでいた青年十次は、ミューラの記事を新聞で読んで、心を動かされたのである。

後には、寄付に頼らず自立の道を選ぶようになり、明治二十年の濃尾大地震、二十七年の日清戦争、三十七年の日露戦争、三十八年の東北大飢饉と、悲惨な出来事のたびに増える孤児たちが暮らせる「家」を持たせたのである。困難な状況のなかで十次を衝き動かしたのは、生来の過剰な熱情と、宣教師に学んだキリストの教えだった。理想を実現する事業とはうらはらに、周囲の人々と家族たちは十次に振り回されて生きなければならなかった。没後は引き継ぐものがなく、孤児院を閉鎖するが、戦争孤児たちを含め延べ三千人の児童が育っていったのである。

ただでさえ困難な事業にあって、最大の危機をもたらしたのが明治二十八年のコレラの流行であった。

石井十次編『新刊岡山孤児院』（明治三十一年・岡山孤児院出版部刊）に、日清戦争後のコレラによる孤児院の被害を記した箇所がある。

明治二十八年はわが岡山孤児院に取りて未曾有の一大厄年なりきなきだに三月十日天下に向て寄付金を謝絶し勞働自活の方針を採りしがために孤児院は一層生活の困難を感じるの折柄妻しな子は三月廿一日女子分娩の後不治の病床に着き尤も重きを置ける実業部の主任者活版部長林崎君は独立戦争真最中七月廿七日「コレラ」のために倒され八月十六日予亦た「コレラ」に罹りて避難病院へ送られ五名の女兒亦相踵て之れに犯さる

院長の十次は一命を取り留めたが、実業部の主任や児童たちが罹患し、死亡してゆく惨状が記録されている。院内の衛生面の遅れを嘆くとともに、「避難病院」の不備も記録されているが、そのような惨状を支えた力は、聖書の「ヨブ記」の思想に拠っていた。

「あゝ予は如何なる場合にもやはりヨブと共に人主たとひわれを殺し玉ふともわれは「エホバ」に感謝しつゝ従はん」と答ふなり」（石井十次・同書）

石井十次は行動者であったから、「コレラ」に打撃を受ければ「コレラ」と書く。何度でも書くのである。十次は信仰をもち、自分の生きるべき道を模索する行動の人であった。

三

樋口一葉は、開国以来、時代を先導していった「キリスト教」にもゆるやかな距離を取っていた。明治二十五年に歌友、

野々宮菊子に誘われて行こうとした教会も、半井桃水が教会の裏の面まで批判し反対したために行かずに終わったのである。一葉には、言葉や思想的なものに、しばしば敏感に距離を取る姿勢が見うけられる。そういう注意深さと冷静さは、一葉文学の本質といってもいいだろう。

同時代の他の文人たちは、自在に「コレラ」という病名を作品中に使っていた。坪内逍遙の『当世書生気質』（明治十八—十九年）にも、斜に構えた調子でコレラが登場する。

「(倉) エ継原が病氣だつて。△略△(国) △略△ 野猪とか何とかを食ったのがあつて。それで虎レラ病にかゝつたといふ……(倉) エ。虎レラだつて。真実か。いゝ加減な虚喝だらう」

嗟峨の屋おむろの随筆『世の中』（明治文庫・明治二十七年刊）にも、明治十九年に大流行したコレラの描写が出てくる。

「嗚呼思へば明治十九年、此年は如何なる不幸の年なりしぞや、日本国中に於て日に幾千の人が、或は最愛の妻子を残して、或は、大事の父母を後におきて非命の死を遂るぞや、嗚呼虎列羅、虎列羅、惡の味方、善の敵よ」

ラテン語名「コレラ・モルブス」の表記は、明治期に「虎列刺、虎列羅、虎レラ、虎疫、虎列拉、暴瀉、虎狼痢、時疫、水瀉、」などとさまざまに変化して、最後に「コレラ」に落ちついた。死亡率が高かったためか、過激な当て字が多く、

「三日ころり」などの言い回しも生まれている。「コレラ」であろうと何であろうと、時代の情報、作品の材料として咀嚼し、みな自在な使い方をしていたのである。ひとり一葉は、そのような価値に重きをおいていなかったのではないか。「コレラ」という、文芸としてこねれない言葉を、一葉は敏感に忌避していたのではないだろうか。

さらに、一葉が決して表に出さなかった、甥の樋口幸作の特殊な病氣への危惧は大きかった。一葉が、幸作の不意の死を知らされたのは、明治二十七年七月一日、二十三歳の夏であった。

「十時頃成けん 桜木丁より使者来り幸作死去の報あり母君驚愕 直に参らる からハその日寺に送りて日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ 浅ましき終をちかき人にゐる我身の宿世もそぶるにかなし」
(水の上日記)

幸作がハンセン氏病と想像される病氣に罹患していたとすれば、遺伝病とされた当時にあつては、一葉母子の苦しみはいかばかりだったろう。少なくとも、明治二十七年七月以降の一葉は、コレラなどの疫病を外側から見る位置には立てなかったのではないか。一葉が、「コレラ」という言葉に語感として抵抗を覚え、それを避けた詩的敏感さに、微妙な死生観さえ読み取れるのである。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

21

佐伯裕子

しい方向を次のように考えていた。

「戦争は勝てり。東亜の半開国は一躍して一等国の班に入れり。是に於て文芸技術は本より社会百般の人事総て一等国たらざるべからず。若し夫れ戦争に勇して平和の事業に怯たらば縦令全世界を屠戮し若くは征服するも畢竟土蛮の行たるのみ。戦争の為に戦争する英雄時代は既に過去の夢となれり。」

日清戦争の勝利によって、日本は一等国となった自覚をもち、文芸、社会、人事のすべてにおいて一等国として生きなければならぬと示す。東亜のリーダーとして、平和の事業に進むべきだという高揚感にみちた文章であり、「戦争の為に戦争する英雄時代」の終焉を告げている。

文芸批評家であった魯庵は、山田美妙の言文一致小説を空疎と斬り、明治十年代の政治小説の重流を蔑するとともに、幕末の戯作者の生き残りたちに敵対した。美妙から尾崎紅葉にいたるまで、時の流行作家たちを揶揄し、批判する、鋭利で頑固な批評家であった。その魯庵が支持した作家は、二葉

明治時代には「戦後」という時間帯が三度あった。攘夷開国をめぐる官軍と幕臣の戦い、そして、初めての近代戦争である日清戦争と、さらに日露戦争の勝利の後である。旧幕臣たちが強く引きずった「敗戦意識」は、日清戦争に勝利した戦後を迎えることで払拭されていった。

明治五年に生まれ、二十九年に没した樋口一葉は、明治維新後に文明開化の波が怒濤のように押し寄せた第一の戦後から、日清戦争に勝利して国民感情が日本回帰に傾いた期間の、二度の「戦後」を生きた文人だった。

「戦後の文学 国民をして機運に乗ぜしめよ」(「国民之友」明治二八・四・一三、二三)と題して、日清戦争直後に、いち早く戦後文学出現の言挙げをしたのは内田魯庵だった。魯庵は不知庵という筆名で、ドストエフスキーの『罪と罰』などの翻訳も手がけていた。不知庵訳の『罪と罰』は、一葉も友人に借りて読んだ一冊である。

魯庵は、日清戦争後の日本人としての自覚と、日本国の新

亭四迷、幸田露伴、樋口一葉にとどまった。

魯庵は、小文「一葉女史の『にぎり江』」（『国民之友』明治二八・一〇・一九）の中で、遊女の運命を描こうとした一葉の試みは失敗しているが、「斯くの如きヒューマニチイに富める作家は今の男性作家中にも多くを求むるを得ざるなり。」とし、透逸な作品であると評した。誰よりも早く、『にぎり江』を「戦後文学」として認めたのだった。

だが、魯庵は、詩歌については否定的な見解をもっていた。「和歌は優雅秀麗を以て勝る（『読詩饒舌』）（『国民之友』明治二八・一二・二）が、「大詩想を表すに足らんや」と、戦後の社会問題や氣運を容れるには遅れていることを強調している。漢詩和歌俳諧を「抒情歌」の名のもとに統一して「新たに一体を作れ」と促し、しかも、当時流行していた「新体詩」は、漢詩和歌俳諧以外の別の形態を作ったもので、抒情歌を統一したものではないと主張した。従来、漢詩和歌俳諧は、それぞれの囲いから解放されよ、と訴えた。

日清戦争が終わってから、ほかの文芸には新しい動きが出てきたのに、和歌を取り巻く感情は、相変わらず優雅秀麗のものとしてしか捉えられていなかったことがわかる。「開化新題」などによる歌がどれだけ作られても、魯庵のような和歌への判断は動かなかった。

だが、敗れた幕臣たちや、彼らの周りの人々の維新後の戦後の感情は、敗北感と誇りとに満ちたものであった。そのよ

うな時代の名残りは、長く和歌のなかに息づいていた。旧幕臣に象徴される「想い」は、しばしば和歌の姿で保たれていたように思われる。維新後の「戦後」のありように、和歌は大きく関わっていたのである。

二

ふしみよりあなたにて、人あまたうたれたりと、人のかたるをききて
太田星蓬月尼

聞まきに袖こそぬるれ道のべにさらすかばねは誰が子なるらん

いぶきます風にあられのはらはらとうちちらされてきえやしつらん

をしからぬいのちを尚も惜むかな捨てき時の有と思へば

山川 浩

少将大寺安純が戦死をいたみて

うらやましあだの要塞を打くだき我みも玉と砕けたる君

伊藤与助が出征の途に出た時功名をむさぼるなとて 中島歌子

やあふきにしひて進むな大方の人におくるる名をしとらずば

出立しける日心地あしうて終日おもひつづけたる

人の親のこころも今ぞおもひしるこの別れこそ悲しかりけれ

順に、太田垣蓮月尼の『海人の刈藁』（明治四年）、山川浩の遺歌集『さくら山集』（明治三十五年）、中島歌子の遺歌集『萩のしづく』（明治四十一年）から引いた。いずれも戦いに関わる歌だが、蓮月尼は長州と徳川幕府の間で行われた鳥羽伏見の戦い、山川と歌子は日清戦争への思いをうたったものである。

蓮月尼の二首は、鳥羽伏見の戦いで倒れた若い武士の亡骸を、古風な女性の情感で哀れみ悼んでいる。世の無情を、古來からの優美な和語に乗せてうたったものだ。尼には志士たちを匿い、支えた時期があった。

山川浩は、鳥羽伏見の戦いや会津の戦いに加わった負け組の会津藩士だったが、佐賀の乱で負傷して蟄居していた。その結果、新国家の要人として活躍する道を得た。官軍に敗れた同志の無念を思い、こころに屈折したものを持ちつづけたことが、山川を歌の道に導いていったのだろう。

命を惜しいと思っていない、命を捨てるときのためになお惜しむのだとうたう。さらには、戦死した友人を悼んで、「うらやまし」ともうたうのである。

「うらやまし」に関しては、蓮月尼に「うらやまし心の儘に咲きてとくすがすがしくも散る桜かな」という歌がある。散り際のよさをうらやむ歌で、同様の「型」は一葉の歌にも登場してくる。明治新国家の要人としてあったにもかかわらず、旧会津藩士だった自負をもちつづけて生きた内面の葛藤

が、山川の歌から読み取れる。新時代を生きる山川にとって、あるいは歌は自己救済の役割を果たしていたのかもしれない。

一葉の歌の師である中島歌子は、若くして死んだ水戸藩士、林忠佐衛門の妻として、敗れていく藩士たちのために働いた。ここに引いた歌は、日清戦争に出征した伊藤与助という青年に与えたものである。「功名をむさぼるな」と詞書きをして、「あやふきにしひて進むな」とうたっている。出征の餞にしては奇異な感じのする一首には、與謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」とは異なる生命感情が覗いていよう。多くの幕臣の死を見てきた歌子が、「あやふきにしひて進むな」とうたったところに、旧体制を生きた女性の新しい時代への激しい感情が迸る一首といつていい。歌子は伯爵令嬢たちの上流社会を相手に「萩の舎」を構えていたが、新国家に対しては屈折した思いを抱いていた。

明治初年から被っていた第一の「戦後」の情感を、三人の歌は象徴しているように思われる。三人とも、旧幕時代の心情をこころに潜めて生きた歌人であった。

山川のいのちの「捨てるとき」、歌子の「功名をむさぼるな」という思いには、武士の覚悟のようなものがのぞいている。魯庵のいう「平和の事業」などという新思想からの心得ではなかった。

旧派和歌はただ優美だけでなく、彼らの中に燃え残っていた、鬱勃とした抒情を容れる器でもあった。樋口一葉の歌にも、同じような感情の「型」を見いだすことができる。

そういう意識と抒情性がまったく忘れられていく契機として、日清戦争のもたらした「戦後」が作用したのではないだろうか。新しい戦後が回帰しようとした「日本」は、もはや旧幕臣たちの日本ではなかった。

内田魯庵がいち早く「戦後の文学」の佳作として一葉を推奨したのは、小説家としての一葉だった。では、一葉の和歌はどうであったか。日清戦争前も戦後も、少しも変わらずに一葉の歌は作られたのか。

樋口一葉は、魯庵のいう、新体詩とも異なる「抒情詩の新たな一体」を創り出そうとはしなかった。題詠を主とした、華奢で優美な一首のうちに、新時代の「大詩想」を盛り込むことも考えていなかった。ただ、もはや「萩の舎」の優雅さに魅力を感じなくなっていたことは確かだった。

明治二十七年か二十八年の冬に書かれたとされる「断片」(残簡 その二)に、長い詞書き付きの歌集を作ろうとした形跡がある。前に紹介した長い詞書き付きの歌集「しのぶくさ」など、さかんに歌に詞書きを添えていたのである。日清戦争のころのことであった。この断片も、書きかけではあるが、歌と詞書きとの調和に、一葉らしいデカダンスを漂わせている。同時期の「萩の舎」の詠草とは異なるものだ。

英雄といひ豪傑といふ いかにもその名のことく敷ならん
機運一たび熱せば万里の城壁もこゆべし 静かにおもひ
おもむろに考へて無欲の中ニ人事をおもふもの世にあらは
れずしておはる事少なしとせず 天地とこしなへにありと
いへども一度此土をさりし物二度現世にあらはるゝ事きか
ず 空しく思ひを抱きて九泉に超きしもの古来いくばくか
あらん (中略) 自然の変化を人力の左右しうべからずと
しれバしばらく此土に遊べる中のしわざとしてよからんと思
ふ人ハよかれ あしからんと思ふ人ハあしかれ 神仏何
ぞ関せん 唯それ心に耻る所なくんバ他界の諸神来りて遊
ばん事うたがふべからず

ふくる夜の闇のともし火かげ消えばやみなるものをあは
れよの中

「閨」などの歌言葉や姿は旧派和歌のものであるが、その前に付された虚無的な詞書きと合わせて読むと、なんとも暗く儚い現世観が浮き上がってくる。天地は永久に存在するといっても、一度この地を去ったものは二度と現れはしない……。

従来は無常観とも異なり、むしろ西欧的なデカダンスの匂いのする詞書きである。第二の「戦後」は、一葉の歌にも大きな影を落とそうとしていた。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

22

佐伯裕子

明治二十六年七月号の「文學界」で、北村透谷は前号に掲載された戸川残花の新体詩「桂川（情死を吊ふ歌）」を称賛した。「桂川（吊歌）」を評して「情死に及ぶ」というタイトルの透谷の小論は、残花の詩を讀えつつ、新時代の「情死考」となっている。幕臣の子として生まれた残花は、明治維新のころは彰義隊に参加し、のちにクリスチャンになったといわれる。透谷も維新によって没落した士族の息子であり、キリスト教に傾倒した。同じような境遇に共感を覚えていた残花は、明治二十七年に透谷が自死したのち、二年にわたって「文學界」に追悼の思いを書きつづけた。

あらためて新体詩「桂川（情死を吊ふ歌）」を讀んでみると、なぜあれほどまでに透谷が感動したのか理解しがたいものがある。だが、当時の詩の状況に置いてみると、様子が違ってくる。明治十五年から二十五、六年ごろまで継続された外山正一たちの『新体詩抄』に始まる新体詩には、恋愛に関わる詩が見当たらないのである。

そのことについては、大岡信が、「當時こういうもの（新体詩―筆者注）に関わった連中は、恋愛というのは和歌や俗謡にまかせてたのかしら、と思う。長詩では、恋愛なんていう私的な主題じゃなくて、社会問題とか哲学問題とか、そういうものを歌おうということが、暗黙のうちにあったんじゃないかと思えますね。」（『討議近代詩史』一九七六年刊・思潮社）と語っている。鮎川信夫、吉本隆明とのこの討議には「桂川」の詩は出てこないのだが、大義こそ新しい詩になるという背景があったから、新体詩で情死の哀れをれんめんとうたった残花に、透谷は心動かされたのだろう。

戸川残花の詩「桂川（情死を吊ふ歌）」の一部を引いておきたい。

こゝは処も桂川、／桂といふも名のみにて、／月の都も夏
なれば、／木の下闇か、陰くらし。
霧たちこめし水の面に、／二ツの光りてらすなり。／友に
おくれし螢火か、／はた亡き魂かあはれ／。

思へば昔し、年若き／男女のいくたりが、／意の駒の狂ひいで、／心の猿おろかにも、／夏草しげき煩惱に、／人の正道ふみ迷ひ、／危き梢、深き淵、／あな浅ましや、あさましや。／……

長詩は、「われらが罪をゆるせかし。／犠牲となりしは愛のため。」と結ばれる。

透谷は、「桂川（吊ふ歌）を評して情死に及ぶ」の冒頭に、「まづ祝すべきは市谷の詩人が俗嘲を顧みずしてこの新らしき題目を歌ひたることなり。」と記した。「情死」という愛恋の究極の姿を、詩の題目として扱ったことを称えているのである。そのうえで透谷は、恋愛と情熱に関わる持論の展開へつなげていく。

「世の中に絶えて心中なかりせば人の誠はなかるらむ。（旅中本書を携へず或は誤字あらん）と冥土の飛脚に言はせたる渠林子、われその濃情を愛す。人の誠意は情によりて始めて見るべし。沈静は元より沈静の味あり、然れども熱意も亦た熱意の味あるにあらずや。熱意は人を誠実に駆り、誠実は往々にして人を破却に逐ふ、破却素より惡むべし、然れども破却の中に誠実あり、人死して誠実残る、愛の妙相は之なり、……」

長詩「桂川」では、情死に「罪」「愛の犠牲」という常套的な匂いがつけられているが、透谷は、「何を以て劣と聖と

の別をなす」「情の素たるや一なり」と記して一步を深めている。日本語に「恋愛、愛恋」という言葉が生まれたのは明治の初めだった。透谷が用いた言葉「情熱」に関しては、明治の半ばまでは日本語になかったか、ほとんど熟していなかった（橋浦兵一の調べによる。北川透「表現の思想」より『透谷と近代』一九九四年刊・翰林書房）と推定されている。

二

遊女と客の情死や刃傷されたは、樋口一葉の住んだ吉原界隈では日常的な事件だった。闇から闇に葬り去られる遊女たちの死を哀切に語る俗謡はあっても、そこに「愛の妙相」を探り出そうとする新体詩は生まれていなかった。

長詩で「情死」を取り上げた戸川残花の「桂川」は、和歌が開化による新題を取り入れた流行とはちがっていた。題となるものや言葉が表現として新しい思想を生み出さなければならぬ、そういう理想が窺われる。「桂川」の詩そのものがそこまで到達したとは思えないが、その詩を評した透谷の小論と対になって、はじめて情死を「思想」として捉え直す契機となったのである。

樋口一葉が明治二十八年に書いた小説「にぎりえ」は、「菊の井」の「お力」と、彼女に失恋した男の心中が描かれている。一葉はラストを、男の恨みによる無理心中とも、二人の納得づくの情死ともとれる藪の中のままに終わらせた。

魂祭り過ぎて幾日、まだ盆提燈のかげ薄淋しき頃、新開の町を出し棺二つあり、一つは鴛にて一つはさし擔ぎにて、鴛は菊の井の隠居所よりしのびやかに出ぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば、彼の子もとんだ運のわるい詰らぬ奴に見送れて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひます、(中略)何しろ菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては残念であらうと人の愁ひを串談に思ふものもあり、諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨みは長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き処より、折ふし飛べるを見し者ありと伝へぬ

「にぎりえ」の「人魂か何かしらず筋を引く光り物の」のくだりは、新体詩「桂川」の「友におくれし螢火か、はた亡き魂かあはれ／＼」に通じるものだ。一葉のどこかで、「文學界」に登場した情死の詩と、それを称賛した透谷の文章が響いていたのではないだろうか。

透谷については、一葉は日記に、三宅花圃の「透谷などやうの人に而格別におもしろくも非ず」という言葉を紹介している。だが、自分の意見を述べた箇所はない。孤蝶子の「孝女白菊」を題材にした新体詩「酒匂川」(「文學界」同二十七年十一月号)には意見を述べているところを見ると、情死に寄せる二人の詩人のやりとりへの感想、あるいは批判を記すのは

差し控えたように思われる。

透谷と残花、二人の詩人の熱量に比べると、心中を描いた一葉の視線には冷徹なものが感じられる。男女の恋と死の真相を藪の中としたまま筆を置くのである。男女の死について、少しの夢も持たせぬように抑制して書かれている。透谷の「破却の中に誠実あり、人死して誠実残る、愛の妙相は之なり」とは距離を持った書きようだが、狂気も俗情も「何を以て劣と聖との別をなす」という視線の深さには、共通したものが感じられよう。

一葉は、吉原界限で見聞きした悲話をもとに「にぎりえ」を書いたが、透谷の言う「愛の妙相」を描こうとしたのではなかった。すでに破綻した精神のただなかで熱情を希求した透谷とは反対に、生きながら胸に空洞を抱え込んだ一葉の冷静さが読み取れるのである。

三

新体詩の詩人たちに、色恋沙汰は和歌や俗謡の題材と思われていた日々、一葉は中島歌子ゆずりの微妙な「恋」の歌を作りつづけていた。明治二十一年には「恋百首」をものしている。

朝な／＼むかふかゞミのかげにだにはづかしきまでやつれぬるかな
(思やする恋)

ふみまよふ恋のこゝろを人とはどたどうば玉のやミ路な

りけり

(恋心)

待宵のうれしかりしに引かへてつらくかなしきぬく
のそら

(後朝恋)

契りおきし物ならなくに夕ぐれはあやしく人の待れぬる
かな

(夕待恋)

春日野にもえ出る春の若草の早くも人をミそめつるかな

(初夏恋)

「恋百首」は半井桃水と出会う数年前の歌だ。一葉十六歳のころの恋歌で、兄の泉太郎が肺結核で死に、一家の家督を相続して家長となる年であった。父の意志で渋谷三郎と婚約したのだが、父の死後、渋谷より破談されている。渋谷に恋したという訳でもなかったのだから、一葉は誇りを傷つけられ失意の底に沈んでいった。

まだ本当の恋を知らないうちに、このように微妙な恋心に通じてしまう成熟ぶりは、古典和歌の恋の心を幾重にも踏襲した成果だった。恋のさまざまな姿態と心理に精通して、表現の方が成熟したのである。題詠という方法は、そういう作用のともなうものだった。

表現のうえのみで熟した恋が、実際の恋を得てから失っていく日々にあつて、どのような変化を遂げたのか。「にぎりえ」に描かれた、投げ出すような破局の描写を、一葉の和歌からは読み取ることはいかない。「にぎりえ」を書いた明治

二十八年ころの数少ない恋の歌を見ておきたい。

下にのミもゆるはくるし春のゝのくさの色にも出ぬべき
かな

(寄草恋)

花と見しミねの白雲ゆけどくあとはかもなき恋もする
かな

(恋の歌の中に)

いさゝ川きのふの春のおもかげもかへらぬ水にかはづな
く也

(首夏水)

うき人のつらさにこりし心とおもほえぬまでおもひみ
だるる

(絶後見恋)

かげろふの夕かげまたぬ身をしらであすとも人をたのミ
つるかな

(契明日恋)

ふく風に草のはゆれて散るつゆのおき所なきこひもする
かな

(寄露恋)

「下にのミもゆる」恋、「あとはかもなき」恋、「かへらぬ」恋、「おもひみだるる」恋、「おき所なき」恋……、遂げられぬ恋に苦悩する若い女性の思いがピュアに伝わってくる。忍ぶ恋の辛さ、恨めしさ、それは和歌の上の「型」でもあったろうか。歌からは、自分の切なさのみが前のめりに伝わってくる。その思いから一步、「にぎりえ」の深みと新しさに踏み込む冷徹な観察眼が、一葉の恋の歌のなかに生かされることはなかった。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

23

佐伯裕子

樋口一葉が中島歌子から教えられた和歌は、旧い決まり事に習い、「題」を与えられ、あるいは「源氏物語」など古典に因んだ舞台のうえで詠むものだった。歌は「私ごと」をうたうものではなく、「伝統技法」「創作」に近い意識をもつて作られていた。

それについて、日記に表れた一葉の日々の思いは、「恋と世間」「小説と歌」「生活苦と誇り」「上流社会と下層社会」「西欧文化と日本文化」、そういう二項対立に引き裂かれていくように読める。その緊張のなかで、一葉は周囲に構えた意見を述べたり、本音を言うのを差し控えたりして、意識して冷静さを前面に出しているのである。

思慕する半井桃水とのことも、日記ではどこかはぐらかしているようなところがあるが、旧い和歌という「型」に託すときは、思い切り柔らかな恋心が吐露されている。若い一葉にとって、ことに恋の微妙な「題」に得たときは、歌が安心して本音を託せる器となったにちがいない。一葉の恋の歌に

は、思慕に満ちた生まの声が通っている。小説で描かれた女性たちの分厚い悲哀感とも異なる、初々しく寂しい恋歌が年々に作られていた。

よの人の耳やたつると何ならぬ言の葉をさへしのお中哉

明治二十五年

竹うまのむかしながらの友にまでいはれぬふしを覚えたる哉

同

中々にくもりもやらでこぬ人のつれなさみゆるはるの夜の月

二十六年

いさゝ川きのふの春のおもかげもかへらぬみづにかはづ鳴なり

同

其人のたぐひとおもへば桜花にはえるさへにかなしかりけり

同

逢事はおもひ絶たる中空にまちしにゝたる入あひのかね

同

わかれんとおもふ斗も悲しきをいかにかせまし逢はぬ月

日を

二十七年

恨むらむたがきぬくの別路もおもひやらるゝ鐘のおと

哉

同

みしめ紐かけても人はおもはじをいつまでいのるこゝろ
なるらむ

同

木枯の吹く音寒き冬の夜はかけても君の恋しかりけり

二十九年

明治二十五年には、桃水と縁を絶つように中島歌子にすめられていた。あきらめる意志を日記にはつよく出しているのだが、それでも、「其人のたぐひとおもへば桜花にほえるさへにかなしかりけり」と慕情をうたっていたのである。

一葉は、「桃水」の名から連想される、春の桃の花や桜の花、そうして水にも敏感に心を寄せて暮らした。桜の花も桃水「其人」と同類のものであるから、うつすらと匂って咲いているさえ愛しく悲しいことだ、と呟くのである。いかにも可憐な恋する若い心が、巧みな表現で仄めかされている。

「むかしながらの友」にも言えない思い事である。「わかれん」と思うだけで悲しいのに、逢えない月日をどうしたらいいのか、苦しい恋の深みへ陥っていくさまが思われる。

日記では、訪れてきた桃水の容姿の衰えを冷淡に描写した場面もあるが、死に近くなるほどに、歌のなかの恋心は切々と苦しいものになっていった。最晩年の一首「木枯の」の切

なさには、一葉の真の思いが籠められていよう。

一葉にとって、和歌が、写生や実生活をうたうものであったり、あるいは同世代の田山花袋のように、自分の歌は「日記以上に何もない」と歌集に記す意識をもっていたら、また違っていたらう。歌がリアルな「私ごと」の描写として読まれてしまう点に、一葉は、神経質なほど配慮を重ねたはずだ。歌そのものに新時代の表現を求めるようになっていたら、日記で冷笑的に周囲を描いた手つきを、歌にも発揮したにちがいがなかった。だが、晩年の一葉は、旧派の歌の姿はそのままだに、新しい社会を活写する詞書きを付けることで和歌の革新を求めようとした。「萩の舎」から疎遠になっていた晩年の一葉だが、旧派和歌の型式と詠嘆性はむしろ救いだったのかもしれない。

二

樋口一葉の思い出は、歌友の三宅花圃や伊東夏子、「文藝界」同人の馬場孤蝶、平田禿木を始め、さまざまな人々がそれぞれ立場から書き残している。そのなかで、禿木の「文藝界前後」（『文藝界前後』所収・「平田禿木選集」昭和六十一年刊・南雲堂）に興味深い文章がある。

たとへばあの龍泉寺へ店を出すにしても、女史は五十金、百金の資本に窮してゐたやうであるが、これを天知子（星野天知・筆者注）にでも相談したら、ともかく雑誌を出して

ゐることもあり、藤村（島崎藤村）君の旅にみついだやうに、これは立ちどころに出来たかも知れない。店で売る品物にしても、自分（禿木）の伊勢町の家は荒物問屋同様であつたのだから、線香、布海苔の類は幾らでも間に合せられたかも知れない。さういふことには些かも触れなかつたので、女史はあの苦しみをしたのである。そこが切り抜けられず、あの荊の道を歩んだので、あれだけの立派な作物が生まれたのである。

流行作家、村上浪六に借金を申し込んで空振りしたり、久佐賀義孝という風変わりな女好きの占い師に近づくなど、金銭の工面に必死だった晩年の一葉、その一葉が、「文學界」の発行人、星野天知や同人の禿木たちには頼らなかつた。一葉のブライドの在処がうかがわれる一文といつていい。桃水や浪六、久佐賀には借金が無心をするが、「文學界」の青年たちにはサロンの女主人として振る舞っていた。恋の相手、桃水へのブライドとも異なる作家の誇りと意地が、一葉のなかに育っていた。

「文學界」の青年たちとの賑やかなサロンの交わりの初めのものとして、禿木が本郷菊坂の一葉の家を訪れたのは、明治二十六年三月二十一日のことである。その十日後の「文學界」三号に一葉は小説「雪の日」を発表した。桃水の家を訪ね、親密に語り合い、大雪の降るなかを人力車で帰った日

を描いた小篇だ。一葉は、桃水の長編小説『胡砂吹く風』上下巻を、桃水から贈られたばかりであつた。二十五年に歌子から絶交するように論され断念したのだが、実際には、つかず離れず、交わりを絶たずに生涯を終えたのである。日記が事実として読まれると思えば、本当のところを見えにくくして書くが、小説や歌は人々に創作として読まれるので、むしろ安心して本当の心を表すことができたのだらう。

平田禿木は、和田芳恵がいう一葉の最晩年「奇跡の十四箇月」をつぶさに見た一人だつた。禿木は、同二十六年の十月にも一葉宅を訪れており、その奨揚の成果か、一葉は短篇「琴の音」を「文學界」十一月号に発表している。さらに「文學界」の発行人である星野天知が来訪したのは、翌二十七年一月のことだつた。

三

一葉のめぐりには、馬場孤蝶、戸川残花、川上眉山、斎藤緑雨ら文学青年が出入りするようになっていった。禿木の「文學界前後」には、馬場孤蝶の記す一葉の思い出よりも、冷静で皮肉な観察眼が感じられる。もう少し文章を引いておきたい。

「同人（『文學界』）のうちで、女史に思はれようなどと、誰もあすこへ出入つた者はない、それぞれ別に本尊があつたのだもの。但し先方はさうぢやないと、さも自信あり氣に云ふのが馬場孤蝶子一人である。」

孤蝶一人は、一葉の方に恋心があつたと自負していたらしいが、「恋」の対象として一葉のもとに通つた者はいなかった、と禿木はいふ。

「巖本（善治）氏に嫁してから、島田女史は若松賤子の筆名を以てバーネット夫人「小公子」の巧みな口語体の訳者として名声を挙げ、（中略）一方また、鷗外先生の令妹小金井きみ子女史は、その和文体の訳をもつて「浴泉記」の名訳を試み、名声漸く挙りかけてゐた頃で、「雪の日」の稿を「文學界」へ寄せて来た一葉は、これ等の間に立つて、別に一旗挙げようとの野望に燃えてゐたのだ。」

禿木は、作家としての一葉の位置を、若松賤子や小金井きみ子という西欧文学を翻訳した新時代の女性作家に對置させている。そういう位置を自覺した一葉が、別の自分の道を探しつつ野望に燃えていた、とも記される。當時の一葉は、「文學界」の仲間たちから「ブロンテ女史」と呼ばれていたのである。

西欧文学とキリスト教に多大な関心をもつ「文學界」の青年たちが、賤子やきみ子の仕事に注目していたことは間違いない。「女學雜誌」の發行人、巖本善治の妻である若松賤子は、旧会津藩士松川勝次郎の長女だったが、戊辰戦争に敗れてから父母を失い、横浜の織物商の大番頭大川甚兵衛の養女になった。ミス・ギターの塾（現フェリス女学院）に学び洗礼を受けている。

また、平田禿木が回想するように、禿木自身も、日本橋の小さな教会堂でキリスト教に触れ、そこで星野天知と知り合つたのである。

そういう、西欧文化に純粹精神を求める雰囲気に向かうには、象徴のように北村透谷が屹立していた。三宅花圃が一葉に向かつて、またおかしなことを書いていると切つて捨てた透谷、一葉も関心のないように振る舞つていた透谷である。

一葉の最晩年の小説「われから」には、倦怠感から書生との恋に走る人妻の破綻が描かれている。あまり説まれていないが、独り堂々と破綻を受け入れる女性の姿に新味の出た小説だ。「恋わびぬ海人の刈藻にやどるてふ／われから身をも碎きつるかな」（『伊勢物語』）が題の曲掬ともいわれる。この「われから」は、先にあげた短編「琴の音」では、母に捨てられ捨て鉢になつて零落する少年の描写として、「我から願ひて人に成らん望みもなく」のように使われている。西欧流の「自我」や「自立」に對峙させた、日本的な自我と自立のありようであつたように思われる。

勝氣な一葉は、身近に西欧文化の波をかぶりながら、そこからも自立した日本の「われから」の道を探そうとしていた。決して、エミリー・ブロンテになろうとしていたのではないのである。そのように、身を張つて新時代と新文明に對峙していた一葉にとって、和歌は、安心して心を解き放てる細い通路となつていたのではないだろうか。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

24

佐伯裕子

—

「正直に言つてしまへば、一葉の歌の大多数は、全く「退屈なもの」にすぎない」と、萩原朔太郎は『樋口一葉全集第五卷』（昭和十六年刊・新世社）の後記で明言した。日本が大東亜戦争に突入していく昭和十六年という「現在」から、尖鋭な神経で読み直す朔太郎の眼に、一葉の歌は「類型的の形式文学」の累積にすぎなかった。「或る一定の調律と修辭学」を習い、「規範された歌言葉と歌の作法」を知っていれば、「立ちどころに何十首でも口をついて出る」ようなものに映っていた。

そのうえで、朔太郎は示唆に富む感想を記している。

「しかもその退屈の原因は、彼女の歌壇的環境が悪かつたことよりも、もつと深く本源のところに根を持つてゐる。つまりいへば一葉は、素質的に真の詩人ではなかつたのである。もし真に素質的の詩人であつたら、どんなに墮落した環境の中であつても、どんな凡庸の教師の下に指導されても、

自己の素質してゐるだけの天分は、いつしか必然に発揚さるべき筈である。然るにそのことがなかつたのは、彼女が素質的に小説家であり、散文作家であつたことを証左してゐる。」朔太郎は、詩は情熱によつて作られ、散文は客観の描写によつて書かれるといい、一葉にとつて歌は生涯の「熱意」であつたが、「表現」にはならなかつたと記す。現在では情熱と熱意、主観と客観の境界さえ融解されてきているが、一葉の歌を、「情熱」ではなく「熱意」の総量として捉えたのである。そのうえで、朔太郎はまた新鮮な発見もしている。

「佐佐木信綱氏も、斎藤茂吉氏も評してゐる通り、一葉の歌の中では、恋愛歌だけが最も秀れて光つて居る。しかし勿論その恋愛歌も、多くは「寄月恋」といふ如き題詠によつて作つたもので、その中の約七分通りは、古歌の模倣か焼き直しのやうなものであるが、極めて少数の作品中には、流石恋する女性の実情が、切々としてよく歌はれてゐるものがある。（中略）ところがまた不思議なことに、さうした実景実情的の歌になるほど、本質上の詩美やリリズムが稀薄となつて、

より散文的な内容に近づいて来る……」

秀れていると思う恋の歌も、題詠から離れて実情実景に近くなるほど「詩美」や「リリズム」が薄れ、「散文的」な内容に近くなる、というのである。そのことを朔太郎は、『樋口一葉全集第五巻』で、一葉の歌の編纂をしているうちに発見した。

この一文から、前の号に紹介した北村透谷の「桂川（吊歌）」を評して情死に及ぶが思い合われる。情熱に満ちた透谷の危険な情死考と、樋口一葉が「にぎりえ」などで冷え冷えと描いた心中の違うことである。一葉は透谷と同じ「文藝界」に執筆を重ねながら、しかもごく近くに住んでいながら、透谷について一言の感想も洩らさなかった。透谷が自殺した時期の日記を間引いたかと想像したくなるほど、触れてもいい作家の死に触れていないのである。

一葉にとって、透谷は十分に関心をもつ人でありながら、まったく異質の存在として直観されていたのだろうか。透谷の本質にたぎっていた危険な情熱から、一葉ほど遠くにいた同時代人も少なかつたろう。一葉は、開国以来、青年たちを先導したキリスト教にも冷やかな距離を置いていた。

多くの評論を書き残した透谷が、実は散文家ではなく詩人であつたように、あれだけ歌の世界にこだわり、生涯にわたつて四千首余りの歌を残した一葉は、その本質に詩人ではなく散文家を住まわせていたのだろうか。

二

晩年の樋口一葉は、長い詞書きを添えて歌を並べる試みをした。歌に長めの散文を添えることで、題詠という和歌の在り方を変えていこうとしたのである。そういう試みの中で、歌と散文の組み合わせが巧くいっているものと、違和感を覚える場合が見られる。歌と散文に違和があると思われるのは、一葉が社会に対して批評を加えようとしたものに多い。

明治二十八年一月に書かれた歌文集「しのぶくさ」から、二組の典型的な例を引いておきたい。

ゆしまの坂道は此ほどまで町やにていとにぎやかなりしが
家をこぼち道をひろげて岩崎ぬしのやしき成しより石垣た
かくつみて木立ひまなくやみのよなどいとさびしく成ぬ
月まではいかにやいかによの中のひかりハおのが物にな
しても

丁汝昌が自殺はかたきなれどもいとあはれなり さばかり
の豪傑をうしなひけんとおもふにうとましきはたゝかひ也
中垣の隣の花のちる見てもつらきハはるのあらし成けり

いずれも、社会への批評を鋭く表わそうとした具体的な散文（詞書き）に、「月」や「花」に思いを託した優美な歌が添えられている。

「月まではいかにやいかに」の歌い方は、当時、湯島の切通坂に建てられた岩崎久弥の別邸についての感想である。

三菱合資会社の業務取締役だった岩崎の本邸は本郷にあった。湯島の切通しは、明治二十六年頃の市区改正工事によって広げられ、拡張工事とともに岩崎別邸も建てられた。工事の様子には、ほかに一葉の書簡文にも書き残されている。

「湯島の切通しなどの広く成たること只今も猶さかりに取ひろげ中なれど凡そ十五間斗の幅に相成べくと存じ候天神も公園地に成りてより誠にしづかに奇麗にてことしは梅もよろしく……」(明治二十六年三月 関場悦子宛代筆)

宛て先の関場悦子は妹の邦子の友人で、邦子に代わって一葉が代筆した手紙である。まだ岩崎別邸が建っていない時であらうか。切通しが広くなり、湯島天神に公園もできて、「誠にしづかに奇麗」になったと記される。邦子になりかわって書いているためか、ひととおりの感想になっているよう。

二年後に書かれた「しのふくさ」の方ではじつに辛辣である。湯島の切通しは、たくさんの家が建っていた賑やかな坂道だったのに、家々を壊して拡張され、岩崎邸が建ってから大変寂しくなったというのである。詞書きは、高い石垣と木立に囲まれた岩崎邸に焦点が当てられており、「いとさびしく成ぬ」と結ばれる。

その文章を受けて、八月まではいかにやいかによの中のみかりハおのが物になしてもVという歌に移っていく。この世

の光を自分のものにするのができて、あの遙かな月まではどうであらうか、というのである。豪邸を建てた資産家に、皮相な感想を加えたものとして読める。

この歌については、「心の花」(大正十一年十二月号)で心理学者の高島平三郎が次のように絶賛した。

「何といふ痛快な歌でせう。今日のプロレタリアにも、批種の概があつて欲しいと思ひます。」(心理学者の見たる一葉女史)。絶賛しつつ、そういう一葉の「反ブルジョアジ的精神」が、「萩の舎」の友人たちに「ひがみ家」と見られたことを惜しんでいる。

散文との絶妙な組み合わせと見える例なのだが、かりに詞書きがなかったら、この一首は「痛快な歌」といえたらうか。痛烈さは薄れてしまったにちがいない。高島の「痛快」という感想は、散文中に資産家「岩崎ぬし」が登場したためと思われる。「ゆしまの坂道は」で始まり、「いとさびしく成ぬ」で終わらせた詞書きは独立して読めて、主旨も雰囲気もそのままに伝わってくる。だが、歌の方は、詞書きがなければ意味も雰囲気も微妙に異なる。優雅な道歌めいた一首という印象に集約されるのではないだろうか。

一葉が日清戦争に関心をもったとしてよく挙げられる「中垣の隣の花の」の歌も、わたしは同様に感じている。敵国海軍の名提督と讃えられた「丁汝昌」が、部下の命と引き換えに自害したニュースは、日本中を駆けめぐった。一葉は、「さ

ばかりの豪傑をうしなひけんとおもふにうとましきはたゞかひ也」と嘆く。敵ではなく戦争が疎ましい、という。こちらの方は、「中垣の」の歌がいかにも付け足しに見えるほど、詞書きですべてを言いつくしているのである。

いずれも、ある型をもった古風で優美な二首が、詞書きに現れた新時代の散文精神を既成の情緒に引き戻す役割をしている。一葉の社会への批評に歌が合わせられるとき、そこに奇妙な断層が生じてしまう。

本来は添えなくてもいいところに歌を添えてしまう、そういうところに、生涯にわたる一葉の歌へのこだわりが浮かび上がってくるようだ。鋭い社会批評の文と合わせられるとき、一葉の意図とは別に、一葉の歌の限界も見えてくる。

三

夜ハふかく成にける哉花がたミおさなきめさへさめがちにして（秋夜）
一葉

「萩の舎」から離れ、商いに励んだ龍泉寺時代の歌、歌稿「塵中百首」に収められた一首である。「塵中日記」など日記はさかんに書いていたが、一葉にとってもっとも歌のできなかった時期である。俗に「大音寺前」と呼ばれた貧しい地域の長屋に住んで、吉原遊廓の遊女の辛苦も知る日々だった。やがてそれが「たけくらべ」などに結晶するのだが、そのよ

うにリアルな現実を生きていたとき、一葉は「萩の舎」で習った歌から最も遠いところにいた。

この一首は出来のよい歌ではないだろう。眠りが浅くなる秋の夜は、幼い子さえ覚めがちになる……。旧来の和歌の中では「おさな」も修辭的で優美な情緒として伝わってくる。だが、一葉がうたおうとした実景は別のものだった。いつものような優美な上句に対して、下句には、同じ長屋の幼子の様子を写した形跡がうかがえるのである。貧しく狭い長屋に幼子の泣き声が響いてくる、そのような実景描写に近い作品だったのでないだろうか。中島歌子門で教えられた和歌の美意識の中では、「おさな」が長屋の幼子とは読めず、美しく収まってみえるのである。

晩年の一葉は、散文（詞書き）と歌を合わせるという歌物語を試みたが、おのずから、一首そのものの散文化という方向にも向かっていたのではないだろうか。恋の歌が、「実景実情的の歌になるほど、本質上の詩美やリリズムが稀薄となつて、より散文的な内容に近づいて来る」という朔太郎の感想に、一葉の歌の新しい方向が暗示されていたように思われてならない。

歌に散文を添えるのではなく、一首そのものを散文化させ、客観化させる——、そういう新しい境界に踏み出すことなく、一葉は没した。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

25

佐伯裕子

一

「文學界」の同人馬場孤蝶は「樋口一葉女史について」(『明治文壇の人々』昭和十七年刊)で、一葉が中島歌子に師事するまでのいきさつを回想している。学問好きの娘に和歌を習わせようとして、一葉の父則義が「歌子といふ」先生に頼みたいと漢方医の遠田澄庵に依頼した。「歌子」とだけ聞いた澄庵は華族女学校の下田歌子だと思って頼みに行き、断られてしまった。そのことを則義に告げたところ、

所が又遠田澄庵がやつて来た時に、下田歌子は駄目だったと云ふと、いや下田歌子ぢやない、中島歌子だ、下田歌子と云ふ人は西洋風の学問をした人だから、中島歌子さんの方にしたら宜からう、此の人は字も巧いし、歌の先生だから、此の方に行つたら宜からう、それは訳はない、私の娘としたら宜いと云ふやうなことで、遠田澄庵の紹介で中島歌子と云ふ歌人の門に入つた。中島歌子と云ふ人は千流

の歌を学んだ人で、聞く所に依れば随分微賤から身を起した人であつた。従つて気品もなければ、学問もなかつた。

さらに「何でも籠屋とか、車屋の娘であつたとか云ふが、砲兵工廠の前側の商人の娘であつたらしい。」と続く。

一葉研究などでは、一葉が「西欧文化」に影響されなかつた遠因として引用される一文だ。「父」の教育方針に重点が置かれていて、「下田歌子と云ふ人は西洋風の学問をした人だから」のみが強調されて引用されるのである。

だがこの何気ない回想をよく読むと、明治学院で島崎藤村や戸川秋骨と同級であり、政治家の馬場辰猪を兄にもち、やがて慶応大学で欧州文学を講じた英文学者孤蝶の、女性への視線と身分や学歴に対する選別意識が表れていることがわかる。ひるがえって一葉の父の言葉には、孤蝶に潜む新時代のエリート意識は見受けられない。「西洋風の学問をした人だから」と古風なことを言いながら、実は新しく柔軟な視線が読み取れる。何にも縛られない眼力があるからこそ、中島

歌子の学歴ではない学問の深さを見抜いていたといえよう。

中島歌子は幕末の川越藩を支えた豪商「網屋」を実家にもち、小石川に水戸藩の定宿「池田屋」をもつ家の娘であった。「池田屋」が衰退して歌塾「萩の舎」を構えたのである。滅びゆくものを最後まで支え、自立を目指した女丈夫であった。けっして「微賤から身を起した人」ではない。だが孤蝶には歌子を卑しむ意識があったようだ。「身の起し方」にも隠微なものが暗示されているのである。

この一文からは、馬場孤蝶に象徴される当時の「文學界」の選良的な意識を読み取ることができる。孤蝶が何気なく話す会話など、彼らが放つある種の「感じ」に一葉が気づかなはずはなかった。だからこそ一葉は平田禿木が述懐しているように、星野天知たち「文學界」の人々に一切の無心をしなかった。ただ作品で認められたかったのである。

二

一葉の小説は尾崎紅葉や幸田露伴たちの文学と、「文學界」の青年作家たちの初期浪漫主義の文学との中間にあったといわれる。また日清戦争後の戦後文学である深刻小説の流れにあったともいわれる。文学史として整理された一葉の位置である。そうしてそこにはつねに新旧文学の「過渡期」という言葉が添えられる。同時代の作家に森鷗外、島崎藤村がいたが、彼らは「過渡期」という括り方をされることはない。

一葉文学が「中間」とか「過渡期」と位置される理由は、一葉が女性であったことと、和歌で鍛えられた古風な文章とレトリックによるところが大きかった。またキリスト教信徒である歌友の伊東夏子や野々宮菊子、「文學界」の平田禿木らが放つキリスト教的な雰囲気になりながら、西欧文化と宗教から遠くにいたこともあげられるだろう。一葉にとってごく身近な「西欧」は、友人を通して知ったキリスト教だった。だが、明治中期に及ぼしたキリスト教の影響のすさまじさに接しながら、一葉はほとんど影響をうけていない。むしろ西欧を身近につよく意識しながら、対置させるように日本の思想を打ち出そうとしたのではなかったか。

安政五年（一八五八年）、強いられて欧米諸国と結んだ治外法権や関税自主権のない不平等条約は、日本が近代国家として認められていないことを物語っていた。新政府は近代国家の形を早急に整えなければならなかった。太陽暦が一葉の生まれた明治五年に移入され、やがて鹿鳴館が造られ、急速な欧化政策が押し進められた。そういう潮流のなかで、明治十七年に福沢諭吉がキリスト教を国教にしようと「詩事新報」の社説に書いたこともあった。

一葉が初めて和歌に触れたのは明治十七年、十三歳の年である。日清戦争を経て小説家として没する十余年の間に、欧化政策に進進した日本は大きな変貌を遂げたのである。

一葉は日記や書簡に、キリスト教に揺れ動く心を潜めなが

ら自分の考えをはっきりと表している。

たのしきくにあり 老せぬたミ
とこしへのはるに かれせぬはな
日八つねに照りて うきやミもなし
とミれば隔つる 死出のながれ：

(伊東夏子が持参した申命記の聖句をその場で夏子とともに和訳したもの。このころ夏子は一葉を慰めようと教会の話をしていた。筆者注)(中略)

きりすと教徒子ごろしの件重禁錮三年づゝと申渡さる

「よもきふ日記」明治二十六年三月廿九日

されどもかたへをミれば伊東夏子ぬし平田禿木君などとし
まだ若く世故になれざる人の心よ 神をしたひ神を敬まひ
道義の光を起さんとする人々も見ゆるをあながちによの中
にごれりとも定めがたし

「につ記」明治二十六年五月廿九日

君は富家に生れさせ給へり我れは貧裏に人と成りぬそも
／＼これすらことなるに学ぶ処おなじからねば君は宗教の
門に入り我は虚無の空理に酔ひて骨を野外にさらさんとき
平常の持論たがへりとして君は見もかへりたまはざるか

伊東夏子宛書簡(明治二十七年二月、四月頃)

「よもきふ日記」の記述には、伊東夏子に協力して賛美歌の和訳をした半日が記される。「死出のながれ」というのは、

賛美歌集では「へだつる川なみ たかからねども／なほその
きしべに おちまどひ／船だしかねつつ 人はたてり」と訳
されている。神との約束の地カナンへ向かう苦難をいうので
ある。一葉のは異訳なのかもしれないが、わたしは名和訳だ
と思っている。そのように賛美歌に興味を示したすぐ後に、
一葉はキリスト教徒の幼児殺害事件の覚書きを記す冷静さをも
っていた。

そうして、「につ記」では、夏子や禿木が純真に「神」を
慕い敬う姿を見て、あながち世の中が濁っているとも言いが
たいと心が揺れるのである。

さらには伊東夏子宛の書簡である。龍泉寺町の家に移る前
に、一葉は夏子に以後の来訪を断っている。「萩の舎」のす
べてから遠ざかりたかったのだ。この書簡はふたたび交友が
始まったころのものとして推測されている。

「君は富家」「我は貧裏」「君は宗教の門」「我は虚無の
空理」に酔うと相反する運命を示しつつも、「心の友」とし
て隔てることなく友人でいまいしょう、というのである。すね
た相手の機嫌を取り戻す書きぶりはまるで恋文のようだ。あ
るいはしたたかさが感じられるといってもいい。だが、もっ
とも重要なところでは、ひりひりとした真情をもって友人と
自分との境界をくきやかに指し示す。そして「我は虚無の空
理に酔ひて骨を野外にさらさんとき」といわねばならなかつ
た、物書きの覚悟の寂しさが伝わってくる。

多大な関心を寄せながら、一葉はキリスト教に象徴される西欧や神の救いから遠く身を置いた。そのことは確かな覚悟をもってなされていた。

真に教義が理解されないまま良家の子女にまで伝播している、一時は福沢諭吉が国教にしようとして書いたキリスト教である。野々宮菊子や伊東夏子たちが放つミッシヨンスターの新しい香り、そうして「文藝界」の青年たちの浪漫的な精神性、一葉にはそれらがいかにも「富家」のものに思えていたにちがいない。日清戦争以後、キリスト教信徒は減少していくのだが、一葉は時代のそういう様相を見て判断していたのではなかった。

三

先の日記や書簡の一、二年ほど前のこと、明治二十五年三月廿一日の「日記」に半井桃水を訪れた記述がある。一葉がキリスト教の友人の話をすると、桃水は即座に否定した。

談宗教のことに及ぶ 過る日野々宮君に約して会堂へ行かばやと思ひしも障ることありてはたさぶりしといふ 大人そはよき事を先承りし哉 あやふかりしことよ あたら御身渦流に巻き入れられたまはん所なりしとて嘆じ給ふ そへ何故といへば君縷々として教会の表面裏面を述べ給ふ 汚行彼の如きあり 醜事是の如きあり 牧師狀師ハ恰も色情の教師の如く集合する男女の信者は殆其生徒に外ならず

とて痛論し給ふ……

いかにも桃水らしい大人の意見とわいていい。このころの一葉は教会へも行ってみようとしていた。勢いをもって波及する西欧の宗教、その風潮に桃水は懷疑を抱いていた。多少は大げさに注意したのかもしれない。キリスト教会に集う人々の醜惡な面を強調したのである。二十歳の一葉にとって、桃水は尊敬する恋しい先生だった。師から教会の「汚行」「醜事」「色情」を聞いてしまったあと、一葉がキリスト教に警戒心を抱いたとしても自然なことだったろう。

その翌年、伊東夏子と賛美歌を訳した日の記述のある「よもぎふ日記」に、次のような恋歌が登場する。

もこのさかりに人の名をおもひて

もこの花さきてうつろふ池水のふかくも君をしのぶ頃哉

折句になっている一首で、「桃水」の名が隠されている。

明治二十六年四月六日に詠まれたものだ。

西欧の文化を友の身近に見つめつつ、晩年の一葉が選びとったのは苦界に生きる底辺の女性たちであり、日本人としての情感であった。「虚無の空理」に酔い、物書きとして死ぬ覚悟をした一葉の嗅覚は、菊子や夏子や孤蝶や禿木たちの新しい教養ではなく、「父」や「桃水」の人間性の方に真実味を嗅ぎとっていたのではないだろうか。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

26

佐伯裕子

—

樋口一葉は父義則や「萩の舎」の歌友たち、「文學界」の仲間たちの影響があつて、少女期から普通の市井の女性よりも西欧文化に接する機会が多かつた。一葉を旧時代の女性の最後を生きた小説家とくくり、与謝野晶子たちによって新しい時代が開かれたとする見方はいかにも早急だろう。

一葉は、怜悧で同時代的な感受性をもつて一つ一つ吟味しながら、和歌や小説、日記に使う言葉と文体を選んで生きたのである。その選択を理解する一つの手掛かりとしてキリスト教があつた。明治初期から十年代にかけて、さまざまの勢いで布教活動がなされたキリスト教だったが、身近にキリスト教徒の友人がいながら、一葉はついに傾倒することがなかった。理由はさまざまにあつた。たとえば「自立」などという訳語を「われから」という和語のうちに捉え直そうとする意思がつよかつた。また作品に流行病の「チブス」は使つても「コレラ」は用いないなど、西欧的な概念と言葉に対し

て繊細な反応を見せていた。キリスト教の「神」にしても、その訳語や概念を享受するには長い時間が必要だつた。

この連載を始めるにあたって、わたしはわたしの曾祖父が創立に加つた群馬県の高崎教会のことに触れた。一葉が和歌を習いはじめた明治十七年に教会が設立されたからである。創立した伝道師星野光多が『上毛高崎倉賀野伝道史』を書きはじめてのは、明治十六年七月であつた。

「上毛高崎地方伝道ノ事、実行ガ今日ニ始マルハ、今ヲ去ル数年前、東京横浜ノ信徒中往々コ、ニ来レル伝道者アリ。而シテ未ダ充分ノ好機会ヲ得ズ。只嘆息シテ中バニシテ廃ム。」

たびたび上毛地区に横浜から伝道者が来たが、なかなか根づかなかつたことを嘆き、星野は土地の有志を募るところから始めている。奥野昌綱により高崎に初めてプロテスタントのキリスト教が伝道されたのは明治十一年だつた。植村正久も何回か訪れて伝道したが定着しなかつた。

明治十六年、横浜教会の信徒だつた若い星野光多が試みた

のは、まず高崎の青年たちのなかに飛び込んでいくことだった。星野は十六年七月に、新町の旅荘越後屋、岡田謹吾宅に泊まって構想を練っている。岡田は家業よりもキリスト教の伝道に熱心になり、やがて周囲の青年たちを動かしていく。その岡田謹吾がわたしの父方の祖母の父親であった。祖母からほとんど話を聞いたことのない、写真も見たことのない、わたしの曾祖父である。

二

わたしは数年前に、古い資料を見せてもらうために現在の高崎教会を訪れた。キリスト教の伝道に一身を賭けた旅荘の青年が、やがて教会に疑問を持ち、離れていく。そして曾祖父は政治家を志していったのが、それは特殊な青年像ではなかった。越後屋という旅荘を営んでいたから、信仰をきっかけに地域の政治や県議会への道に進んだのである。キリスト教信仰から詩歌文芸の世界に進む青年たちも多かった。新聞記者や詩歌文芸の方にいく青年には、敗北した旧幕臣がたくさんいたのである。

星野光多が記した『上毛高崎倉賀野伝道史』を読んでみると、町の人々が教えをどのように理解したか、また星野自身が伝道師としてどのような教えを説いていたか、はっきりとは見えてこない。伝わってくるのは、新しい国づくりと町づくり、純粹な理想を求める激しい「熱気」のようなものであ

る。高崎教会という一地方の教会の動きは、当時の日本中の教会の動向を代表していたとも思われる。高崎教会がどのような推移をたどったか、信徒数の変遷を紹介しておきたい。

明治十六年 受洗者三名

十七年 信徒四十三名・受洗者三十二名

十八年 信徒百三名・受洗者四十九名

十九年 信徒百八十名・受洗者四十九名

二十年 信徒二百五十一名・受洗者七十八名

二十一年 信徒三百十八名・受洗者七十七名

二十二年 信徒三百二十六名・受洗者二十八名

二十三年 信徒三百四十名・受洗者二十一名

二十四年 信徒三百三十名・受洗者一名

二十五年 信徒三百三十名・受洗者ナシ

二十六年 信徒二百四十七名・受洗者ナシ

二十七年 信徒百一名・受洗者ナシ

二十八年 信徒者九十九名・受洗者一名

二十九年 記載ナシ

明治十六年から二十九年まで、ちょうど樋口一葉が詩歌文芸を志し、苦しみながら小説家となっていく歳月に当たっている。信徒数は明治二十三年を最高として、日清戦争後の二十九年以降は、多いときでも百四十名に達することはなく、受洗者も一桁の年が殆どとなる。

『高崎教会百年小史』（日本基督教団 高崎教会編）に、星野

が会堂を建築するにあたって記した記録について、興味深い解釈が記されている。

「不思議なことに、星野光多が記している日誌では、会堂建築に関する記事はこれだけなのである。会堂建築ということとは大変な事業である。然も彼が高崎に来て未だ一年も経ておらず、苦勞も多かったことであろうと考えられるのであるが、(中略)会堂建築の実施を決議してから建築を始めるまで八日というスピードである。(中略)星野は後からその当時を振り返って、建築総資金が二千元であったと書いているが、彼の書いた日誌を読む限り、会堂建築に関しては分からないことが多い。(中略)教会信条がまだ出来上っていないのに、建物が先に建てられてしまうのである。つまり「教会とは何か」という、教会建設にとって最も大切な問題が後回しになっているのである。このことは当時の日本の教会の問題を反映している……」

まだ二十二、三歳だった星野光多は、横浜教会の「長老派」である植村正久と、新島譲の影響下にあった上毛の「組合派」の間で困惑しながら教会を設立したのだった。あったのは純粹な熱意だった。わたしの曾祖父たちはそこに惹かれ、熱意のみで押し切っていったにちがいない。それ以後の教会は、内部、外部の不協音に揺さぶられつづけた。星野は明治二十一年に辞任し、東京下谷教会の牧師となっている。

明治二十年代初め、信徒数がピークになる前後に、高崎の

町に不審火が出たり、教会に暴徒が乱入したり、また内部の分裂が繰り返されたようだ。曾祖父の越後屋は明治二十一年に焼失している。そのあたりから、曾祖父は教会とは距離を置くようになったらしい。教会は自分の胸のうちに建っている、そういう考えで離れていった一人だったのだろうか。越後屋から出火して大火となったという記録が残っているばかりだが、キリスト教を巡る町の騒乱ぶりが象徴される大火であった。

三

「神」と「教会」に対する理解と信仰は、日本の地に根づきそうに根づかなかった。国は国策としてキリスト教を利用したり弾圧したりした。樋口一葉が若く接した「萩の舎」の歌友たちは、都市のミッシェンスクール仕込みの信徒だった。高崎教会の混乱とはまた違った状況で、キリスト教は明治期の女子教育に多大な力を発揮したのである。生徒たちは賛美歌をうたい、知的な宣教師の説教を聞いて育っていた。伊東夏子が賛美歌を紹介したり、教会に行くことを薦めたのは、一葉が精神的に落ち込んでいる日々であった。

一葉は伊東夏子宛(明治二十七年)の手紙で、「君は富家」「我は貧賤」、「君は宗教の門」「我は虚無の空理」といい、夏子と自分を対比している。私が虚無の空理に酔って骨を野外にさらしたとき、それでも君は氣にかけてくださるでしょ

う。そのように異なる境遇信条にいても、互いの友情は変わらないう。そういう書簡を出したのである。一葉の冷やかさを寂しがる伊東夏子をなだめすかす、おとなの文章である。互いの差違は決して埋まるものではないことを、一葉だけが知っていた。

いずれにしても、一葉は自らの意志で選んでキリスト教の信仰と文化を受け入れなかった。文明開化による口語体の文章やカタカナ語を敬遠し、旧派和歌を最後まで捨てなかった一葉である。そのうえで、「虚無の空理に酔う」という発想は西欧的なものだったのか、北村透谷に影響されたものなのか、あるいは日本の無常観だったのか。それらが複雑に入り混じったデカダンスだったのだろうか。

樋口一葉は明治二十九年十一月二十三日に没した。日清戦争が終結して一年の後である。新聞の計報記事には次のように記された。

樋口一葉——夭折す

女流小説家の巨擘として名を当代に擅まゝにし、髭眉の丈夫と並び立ちて遜色なかりし一葉女史樋口夏子は、今年秋の初めつ方より肺を患へて文筆を廃し、静かに医療を加へ居りしが、去二十三日終に隔世の人となれり春秋僅かに二十有六、先には若松賤子亡ひ、次いで稲舟女史死し、今又此多望の人を奪り去らる、何ぞ今年天の才媛に幸ひせざるの甚しきや。

〔讀売新聞〕明治二十九年十一月二十六日

「若松賤子」も「稲舟女史」もともに一葉が心にかけていた若きライバルであった。その中でもとりわけ一葉は「巨擘」だったと記される。一葉の病勢を伝える八月十九日の「讀売新聞」でも、「着想の奇譬にして文章の巧妙なる、近時の文壇優に一頭角を現はし、をさ／＼先進の男性作家を凌がんとすとの世評高き閨秀小説家」と前書きされている。

「髭眉の丈夫と並び立ちて遜色なかりし」もそうだが、一葉はすでに男性作家に負けない存在という評価を受けていた。薄幸の小説家として描かれる一葉であるが、最晩年には作家としての栄光を十分に感受しえていたのである。そういう状況でも、最後まで、和歌の真の革新を夢見ながら生きた一葉だった。開花和歌や新体詩が盛んに試みられる時代にあつて、詞書きを駆使しながら、むしろ旧来の真の姿を和歌に取り戻そうと考えていたように思われる。

一葉が初めて和歌に触れたのは明治十七年、十三歳の年であつた。日清戦争を経て二十九年に没する十余年のあいだに、近代化のもとで発展していくものと敗退していくものが、火薬のような匂いを発してすれ違った。そういう時代を一葉は駆け抜けた。押し寄せる新時代の波のなから、自分の考えと感性をもって、「われから」選び抜いた言葉だけが今に残されている。樋口一葉の文学は、新しい文芸を切り拓いたものだったのか、敗退していくものの最後の光芒であつたのだろうか。

短歌表現とその時代

一葉に導かれて

最終回

佐伯裕子

終わりに

樋口一葉は、少女の頃から病没するまでたくさんの和歌を作った。一葉の歌に寄せる評価は、古風な類型歌が多いけれど恋の歌は秀れているという、佐佐木信綱、萩原朔太郎評に集約されるだろう。だが、与謝野晶子や今井邦子の評に代表されるような、古めかしい退屈さを指摘するものも多い。今井邦子は次のように評した。

「女史は一生懸命に歌の勉強をしたらしいが、時代が若かつた為、未だ歌を充分趣味の遊戯として取り扱ふことより上に出でてゐないので、人の心に迫るものもなく、残念ながらさすがの一葉女史でさへ、此の程度の歌を詠んでその方は終りとなつてしまつた。」(『樋口一葉』昭和十五年刊)

一葉の歌が趣味の域に止まった淵源を、邦子は「時代が若かつた為」としている。自然主義作家の田山花袋が、一葉の小説を、「あの天才を抱いて、あゝした不自由な文章を書いた」(『東京の三十年』)のも、混乱期にあったせいであると考

えた発想と同じものだ。

明治二十年代という時代を「若い(未熟)」とする根拠は、年とともに進化がなされるという発想の上にある。だが、時代の新旧に優劣をつけない視線で見たらどうであろうか。「時代が若かつたから」という批評の根拠は成立しない。維新後にやってきた文明開花の渦中であつて、一葉自身が一つの選択をしてとどまったと考えると、視界がすっかり変わって見えて。時代の苦界に自ら沈む女性、没落士族の娘というデカダンスを小説に生み出したとき、一葉は、亀裂した新旧の価値観をつなぐ世界を作り出したといえないだろうか。

しかしまた、一葉の題詠は古いという感想もまぬがれがた。旧派和歌の題詠を作りながら、日記でしきりに「和歌の革新」を訴えた一葉である。その「革新」が指す意味は何であつたのか。一葉が志した和歌の革新は未完に終わったが、わたしにはそれが、古い価値観を捨てずに拓こうとした新しさだつたように思われてならない。

明治維新による開国は、日本の歴史を大きく断裂した。このことは、昭和二十年の敗戦時と重ねて考えられるものである。歴史を前後する折れ目に遭遇したとき、それ以前の価値観を否定しながら、日本はそのつど柔軟に甦ってきた。新しいものと古いものが触れ合うときに生じる火花、勝者と敗者が擦れ違っていく瞬間の空気には、新時代の活気とともに、いい知れない悲哀感が漂っていたにちがいない。

この連載では、樋口一葉の周辺を巡りながら、そういう明治期の詩歌文芸の変容を見てきた。古い文化と新しい文化が擦れ違ふときの空気、開国にともなう時代の亀裂の深みを探り当てたかったのである。

わたしがもつとも心動かされたのは、時代のなかで揺れ動く「文体」と「文章」であり、それに寄せる一葉自身の迷いそのものであった。文章のスタイルが変われば思想も変わってくる。言葉が変われば国の本質も変容する。そのことに一葉は敏感だった。翻訳語やカタカナ語、俗謡調、新聞体、口語体、そして維新前からの伝統的な和文体、どれをどのように使って作品を書いていくのか、その一葉の迷いこそが、新しく変わろうとする時代の行方を浮き彫りにしているように思われた。

日本が太陽暦を移入したのは明治五年である。その年に生まれた一葉が小説家となって亡くなる二十四年間は、怒濤のように西欧文化が入り込んできた時期であった。言文一致を

試みた小説や翻訳調の「新体詩」にも、一葉は知らぬ顔をしていたわけではない。日記を記すとき、言文一致や和文めいたもの、新聞体の文章などが入り乱れてしまう不安を、歌の師である中島歌子にせつせつと訴えていた。

少女期から和歌を習った一葉は、早くから雅文体に抜kindでた文章家だった。流行小説家の師、半井桃水に出会い、古風な雅文では読者がつかないと論されて、一葉は文章のスタイルに悩みはじめたのである。長い試みと迷いの果てに、一葉は、和文脈に切れのいい下町の口語体を混じえた文章を身につけ、数々の名作を残した。

小説家として最後の光芒を放つ明治二十八年には、表現に寄せる言挙げを歌日記「しのぶぐさ」に書き残すまでになった。連載の始めにも紹介したもののだが、もう一度記しておきたい。新時代の詩歌文芸に触れていく手触りと気概が感じられ、もつとも心動かされる一文であった。

ひかる源氏の物がたりはいみじき物なれどおなじき女子の筆すさび也　よしや仏の化身といふとも人のミをうくれば　何かはことならん　それよりのちに又さる物の出こぬハか　ふんとおもふ人の出こねばぞかし　かの御時にハかの人ありてかの書をや書きとよめし　此世にハ此世をうつす筆を持て長きよにも伝えつべきを更にそのこゝろもたるもあらず　はかなき花紅葉につけても今のよのさまなどうたへる

をばいミじういやしき物にいひくたすこゝろしりがたし
今千歳ののちに今のよの詞をもて今の世のさまをうつし置
たるをあなあやし かゝるいやしき物更にみるべからずな
どいはむものか 明治の世の衣類調度家居のさまなどかゝ
んに天曆の御世のことばにていかでうつし得らるべき

同じ女性である紫式部の成しえたことが、後の時代に成さ
れないのは、書こうと思う者が出てこないからだという。式
部と同等の位置でものをいい、「此世にハ此世をうつす筆を
持て長きよにも伝うべき」とつづけている。明治時代の生活
を文章で写そうとするのに、天曆時代の古い言葉をもって活
写することはできない、そう言明したのである。一文から
は、「現代作家」たらんとした一葉の明確な意志が伝わって
くる。

「今」から「今」へ

一葉の小説は、歌友であった三宅花圃の『薺の鶯』のよう
な言文一致を試みたものではなかった。現代から見れば、む
しろ古典といつていくらいなのである。そのゆえに、古い
時代の女性という印象を与えてきたのだが、「此世にハ此世
をうつす筆を持て」という気概をもって作品が書かれていた
ことは特筆しておきたい。『たけくらべ』にしても『にぎり
え』にしても、一葉は「今」の言葉で「今」のことを書いて

いた。一葉の掴んだ「明治の現在」そのものを書いたのであ
る。

だが一葉は、流布しているキリスト教や西欧の言葉と概念、
風俗を安易に取り込むことをしなかった。西欧的な発想もな
るべく和語に噛み砕いて文章化した。それに対して、西欧的
な文化をふんだんに取り入れた三宅花圃たち同時代の女性作
家がいた。彼女たちは家庭や教育環境によって、自然に西欧
に親しんでいたのだ。例えば花圃は、幕末の外国奉行組頭と
して何度か欧米に派遣された蓮舟田辺太一の娘だった。鹿鳴
館でのパーティーの描写にしても、自然にかるやかに文章に
取り入れることができたのである。一葉のように、文章のス
タイルに向き合って葛藤する意識は稀薄だったにちがいな
い。『薺の鶯』は、むしろその自然さに新鮮な若さが生み出
された小説だった。

鹿鳴館時代の尖端的な「今」を「今」の言葉で書いて人々
を驚かせた『薺の鶯』だったが、そういう作品の新しさを前
に、一見すると古めかしく見える『たけくらべ』『にぎりえ』
の方が、「長きよ」を生き抜いたバラドックスは何なのだろう。
明治二十八年の歌日記「しのぶぐさ」に、小説家としての
決意を言明した一葉の志は、遠く今の世にまで届いてきた。

「今自分が生きている此世こそがすべて」という時空意識
を、一葉ほど切実に抱いていた女性の作家もいなかったのだ
はないだろうか。

一葉はつよく「時代」の変貌を自覚して文章を書いた作家であった。一葉が和語の美しさを保って描いたのは、古い価値観をあっさり捨て去らないという選択によるものであった。減じようとする世界の光芒と、そこに自ら身を沈めていく人々の退嬰感を、和文脈に下町の口語をまじえて描きだしたのである。「おのずから」「われから」沈んでいくという個人の自己意識のつよさ、一葉は時代の新しさをそこに潜ませた。それが一葉の掴みとった明治の「現在」であり、新しい明治の悲愁だった。

「萩の舎」の歌会をよく知っている佐佐木信綱が記した「一葉女史と当時の歌壇の回顧」(『心の花』大正十一年十二月)に、一葉が歌に情熱をかけていた明治二十年頃の歌壇の様子が記されている。

「新しい歌の未だ生れなかつた明治二十年ごろの歌人のおもなる人としては高崎正風、黒田清綱、間嶋冬道、小出榮、伊東祐命、松波資之、海上胤平、鈴木重嶺、橘道守、わが先考弘綱女流では税所敦子、小池道子、鶴久子、中島歌子、大野定子、松の門三卿子の数氏をかぞへ得る。(中略)中島氏は、小石川の安藤坂が今のやうに道路が広くならなかつた頃、坂をのぼりきらうとする右側に門があつて、毎月九日の歌会には、数台の車が門前に待つてをつた。座敷の床には、真淵翁の考案に成つた人麿の画像がよくかかつてをつた。」

高崎、間嶋、小出、伊東は御歌所派で、税所、小池は宮廷

の歌人であった。民間の歌人も、貴族的なものと庶民派に別れていたが、わずかの歌風の違いが展開されていた。信綱はさらに、一葉が「さる雰囲気の中で、しかも因襲的な作風にひたりつゝ、それを打破しようとしたまことの歌、当時において新しい歌」を残したと記している。当時の歌壇は、花圃が書いた暴露小説『歌人』の、戯画化された歌壇の頹廃ぶりを重ねていいのかもしれない。

一葉が荒れた歌の畑を鋤き返したい、と訴えた和歌革新の願望は、歌の背後にある歌人の「心」や「姿勢」の革新にあったように、わたしには思われる。マンネリ化して華美を競うようになった「萩の舎」への疑問もそうである。「新体詩」「開化和歌」のように新しい風俗や語を使うことを拒む一葉には、和歌の語句を新しくしようという意志は見られない。従来の歌に、「今」を書いた詞書きを付す方向に新しさを求めたのである。

樋口一葉の小説にあって三宅花圃のそれになかったもの、一葉の歌にあって「萩の舎」の歌友の歌になかったもの、その本質は何だったのか。「今」の言葉で「今」を活写したいという一葉の言挙げの背後には、消え去ろうとする士族意識と、日本的な和歌の調べが潜んでいた。文章や和歌の革新を求めながら、新しい価値観に安易に身をずらさないという選択がなされていた。開国により生じた歴史の亀裂、一葉はそこを埋める作業を文芸でなしとげようとしたのである。(了)